Takt

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔａｋｔ

【Ｎコード】
Ｎ８６２３Ｃ

【作者名】
快流緋水

【あらすじ】
妖しい黒い力を持つ人が繰り広げる不思議なこと。それはどこへ行き，どうなるのか。全ては自分のために。

Takt

ふと気付くと，古い館の前にいた。屋根に風見鶏がついている，木造の洋館の前にいた。洋館の周りを囲む生垣は荒れていて，手入れはされていないようだ。また，門はさびていて，開けるとギーギーという音がしそうである。

（こんなのあったっけ？）

夕柳水珂は首をかしげる。

いつもの散歩道に，このような洋館があるとは。

見落とせるわけもないくらい，目を引く洋館なのに。

住宅街の一角のため，そこだけ空間が分けられているようなのに。

それでも今までは気にならなかった洋館。でも，今目に入ると，気になって仕方がない存在となった。

（ずいぶん古いなぁ。）

外壁にはツタが自然と生い茂っている。門から洋館までの約１０メートルの小道は，落ち葉が吹かれたまま散らばっている。誰かが踏んだ様子も見られないので，廃屋のようだと水珂は思った。

「誰の家だろ？」

「俺のだけど。」

突然，後ろから声を掛けられてドキリとする水珂。そっと振り返ると，そこには身長１８０ｃｍ位ある，黒のロングコートを着た人が立っていた。少し長めの前髪のせいで顔全体がはっきりとは見えない。それでも，端麗そうに感じた。

「そ，そうだったんですか。」

「中も見る？ちょっと埃っぽいけど。」

突然の誘いに，また見知らぬ人の家に上がるのに躊躇する。また，男性とともにあがるのは危ない……。

それでも，気になった存在に踏み込むチャンスは逃したくない。

「いいんですか？」

「いーよ。」
身の危険にドキドキしながらも，水珂は男性についていく。重そうな門を男性は軽々しく開け，水珂を招き入れる。
「ずっとここに住んでいるんですか？」
「まーね。ここ半年は海外にいたけど。あ，丁寧語じゃなくていいよ。」
見知らぬ人だが，親しみをもって接してくれるようだ。水珂の警戒心も徐々に解け，もっと早くこの洋館に気付けば良かったと内心思っていた。
「うん。分かった。」
散らばった落ち葉を踏んで玄関にたどり着くと，男性はアタッシュケースから鍵束を出す。鍵は全部で２０個ほどありそうだ。それなのに男性は迷うことなく選び出し，頑丈そうな扉を軽そうに押して開ける。水珂には重そうに見えるのだが，男性はなんともないようである。見た目は細身で力がなさそうであるが，そうではないのかもしれない。
「半年いなかっただけでずいぶんと埃っぽいな。こんな中で悪い。」
「ううん。」
洋館の玄関はホテルのフロントのように広い。そして，左右の階段から2階に上がれるようになっている。バルコニーのように，2階には飛び出たスペースがあり，そこには漆黒のグランドピアノがあった。
「ひろーい。」
水珂の声がかすかに響く。その反響は家の中でするようなものではなかった。
「ミニオーケストラをするからな。」
「ミニオーケストラ？」
「ここで管弦楽の人たちが演奏するんだ。ピアノも入れたければ2階にあるし。」
扇状のスペースなので，コンサート会場の舞台に見えなくもない。

反響が良い点も納得出来る。
「すごぉ～い。」
「まぁな。俺は何をしていると思う？」
「え？」
「このミニオーケストラで，俺は何をしていると思う？」
水珂は男性をジーッと見つめる。音楽の知識に乏しい水珂は，外見で判断することにしたのだ。
「楽器をあまり知らないんだよねー。そうだなぁ，ピアノ！」
男性の口元がニヤッと釣り上がる。
「よく言われるけどね。違うよ。」
水珂は顔をしかめる。
「だったらー，ヴァイオリン！」
「ハズレ。」
即返されてしまう。その後，ティンパニー，チェロ，コントラバスと言っていくが，ことごとく外見からの判断が否定されていく。
「じゃあ何？わかんないよ。」
男性は何も言わずにアタッシュケースを開け，鍵の掛かった古い箱を取り出す。先ほどの鍵束から1番小さな鍵を手にして鍵穴に通すと，カチリと小さな音をたてて蓋が開いた。
　それには指揮棒が入っていた。
「なんだ。楽器じゃないのね。」
「誰も楽器だとは言ってないけど。」
冷静に返す男性。水珂は一本取られた，と少し悔しそうである。
「でもかっこいいね。あ，海外に行っていたのは演奏旅行とか？」
「ああ。ニュースでやっていなかった？」
「んー，ごめん。音楽って私の範囲外だから。ピアノは弾けたらいいな～とは思ったことあるけどね。」
それを聞くと男性は水珂に手招きをし，2階に上がった。疑問符を浮かべつつも水珂はあとに続いて2階に上がる。
「ここに座って。」

男性の意図が読めずに戸惑うが，指定されたとおりグランドピアノの前の椅子に座る。男性は何食わぬ顔でふたを開け，ピアノの音の調子を弾いて確かめる。特別気になった点がなかったのか弾くのをすぐに止め，水珂に鍵盤に手をのせるように言った。

「何をするの？」

先が見えない不安に，表情がこわばる。けれど，男性はそれを当たり前とみなしているのか気にした様子もなく，サッと指揮棒を上げた。

「俺がこのタクトを振るうと経験がなくても演奏が出来るんだ。」

水珂は止まる。あまりのことに。

「嘘じゃない。今から君に体験してもらうから。プロ並みに弾けるよ。」

突然実験台にされるような思いもしたが，男性が言うことに惹かれないわけがない。練習なしに，この男性の力でプロ並みに弾けるのならば，弾いてみたい。

「何も考えるな。じゃ，曲はショパンの別れの曲で。」

男性は呼吸を整えてから，ゆっくりと指揮をし始めた。すると。

「嘘。」

ピアノを弾いたこともない水珂の手がしなやかに別れの曲を奏でる。それも，男性が言うとおりプロ並の音色を。信じられない。それでも水珂の手は，本人の意思とは別に動いている。このことを信じるのみだ。

水珂は演奏に合うよう，身体を動かしてみる。それを見て男性は納得したのか，軽く笑ってから指揮を続ける。

それから約5分後。男性が指揮棒を下ろすと，水珂の手は一気に力が抜け，ダランと鍵盤に下ろしてしまった。そのため，不協和音が。

「あ。」

「もったいない。」

「ごめんなさい。」

「いーけど。凄いだろ？」
得意げに，鼻高々と言う。だが，それには嫌味はなかった。むしろ，尊敬したくなる。
　それほど魅力的な力だ。
「弾けないのに，貴方の指揮でプロ並みになるなんて。本当にすごいね！！」
「どーも。でも，代償がある。」
「え？」
もう遅かった。男性がニヤリとした笑みを見た瞬間に，息が詰まった。
「これでまた生きられる。」
手にしていた指揮棒が水珂の心臓を貫き，背から突き出ていた。
「どうし…て？」
「この力を使うにはかなりの命を削る。代償が多いんだよ。君の命は貰ったから。」
ニヤッと笑み，指揮棒を抜く。水珂はこと切れて倒れ，床は血の海に変わっていく。
「いい獲物だったな。」
ペロッと指揮棒に付いた血を舐め，ニタッと薄笑いを浮かべた。

乾杯

古めかしい，けれども頑丈そうな扉に付けられたドアノックをたたき付けると，すぐに扉は開かれた。誰もいないのにだ。

それは，この家では不思議なことではない。いたって普通のことである。だから，俺も驚きはしない。

俺は玄関に入り，扇状の広間の真ん中に立ち，皮製のアタッシュケースをそっと置く。その音ですらこの部屋に響いた。

（相変わらず音響はいいね。）

響きに納得し，深呼吸をする。かび臭いのとは違う，古い空気が肺に送られる。それとともに，血のにおいが鼻をかすめた。

（またか。）

肩をすくめ，それから大きく息を吸った。

口から流れるのは先日のコンサートで独唱した歌曲で，感情が溢れ出る調子のいい声だった。

突然声が耳に入った。

「相変わらずだね，その声は。」

バルコニーのように突き出ている2階から顔を覗かせて言ったのは，黒いロングコートを着た男性であった。

「まぁね。お前も相変わらずだろ？」

ロングコートを着た男性はニヤリと笑み，指揮棒を舐めて見せた。

「まったく。」

「ひさびさだな，お前が来るのは。」

俺はアタッシュケースを持ち，2階に上がる。

「掠夜（りゃくや）のコンサートの批評をしに来たのさ。」

「批評だなんて，悪趣味だな。」

ロングコートを着た男性・掠夜は顔を顰めて見せるが，声は笑っている。

「で，どうだった？」

「パーフェクト。」
掠夜は当たり前と言うように笑み，俺は鼻で笑った。
「いつでもお前はそういう奴だよな。」
「まぁね。立ち話もなんだ，こいよ。」
掠夜はロングコートをサッと脱ぎ，壁に投げるける。ロングコートはまるですべきことが分かっているようにふわりと飛び，壁掛けに下がった。俺もそれに習ってコートを投げる。掠夜のロングコートと同様，隣の壁掛けに下がった。
掠夜と俺は応接間に行き，ソファーに座る。するとどこからともなく赤ワインのボトルとグラス，そしてチーズやチョコレートなどが盛られたお皿が出てきてアンティーク調のテーブルに置かれた。
「相変わらず働くやつがいるのか。」
「ああ，俺を気に入ってくれてるからな。」
「何言ってるんだよ。お前のタクトだろ。」
そう言いながらグラスを掲げる。それに合わせて掠夜も同じようにする。
それから俺たちはコンサートのことを話し合った。
程よい酔いが回った頃，俺は今日の獲物を聞いた。掠夜はいつも選り好みをしていないと言うが，やはり今回も２０代の女性だった。
「やっぱ狙ってんじゃん。」
「そんなことはないよ。相手が来るだけさ。」
関心ない様子でグラスを口に運ぶ。
「俺の魅力が分かるのが，その位の年齢ってことさ。」
「いたずら心のあるおば様ってやつも来そうなんだけどな。」
「そう言うお前はどうなんだよ？」
掠夜が俺のグラスにワインを注ぎながら聞く。これを待っていたんだよな。
俺はアタッシュケースから札束を出した。全部で２０００万は下らないはずだ。
「またたくさんだね。」

「当たり前だ。」
「お前の声は人を惑わすからな。」
クスリと陰のある笑みを向ける。
「まぁな。」
「今回はどうやって？」
俺はニヤッと笑み，状況を語り始めた。

Voice

とあるコンサート会場を出て，俺はある人に声を掛けられた。その人はすらりと背の高い，綺麗な女性であった。
「今日のコンサート，とっても良かったです。独唱の時なんか涙が思わず出てしまったくらい。」
そう言う女性のアイメイクはまったく崩れていなかった。だが，それに気付いていない振りをして微笑んだ。
「それはありがとうございます。」
「あの，よろしかったらご一緒に食事でもいかがですか？」
思わぬ誘いに驚きつつ，チラリと相手の薬指を見る。その視線に気付いたのか，彼女はサッと隠した。
「あの……。」
「失礼。あらぬ疑いをかけられたら，と心配しただけですよ。構わないのですか？」
「ええ。」
あまりにもきっぱりと言うので苦笑しそうになったが，俺は決めた。
ある事を。
思いついた自分に思わずニヤリと笑んでしまいそうになるが，軽く柔らかな笑みを作って見せる。
「じゃあご一緒いたしましょう。」
エスコートするように彼女を促し，近くのホテルへ入った。
有名なホテルだけあって，味は格別であった。彼女との話もよく，ワインも結構進んでいた。
会計はあっさり彼女がして，俺はホテルを出るときに頭を下げた。
「ごちそうさまでした。」
「いいえ。あの，お時間は？」
「まだ平気ですが。」
「じゃあ，家にいらして下さいな。」

プライベートなら困った表情を浮かべるのだろう。だが，このときの俺は女性には分からないようにクスリと笑み，女性にはやわらかく微笑んで見せた。
タクシーで２０分ほどで着いた彼女の家はやはり大きかった。警備も万全な様子を窺える家である。いわゆる，裕福な家庭というものを容易に想像出来る家だ。
普段は家政婦でもいそうだが，今この家には俺たち2人だけだ。彼女自らコーヒーを運んでくれた。
「美味しいです。」
「まぁ，ありがとうございます。」
「いえ，こちらこそ。お礼に短めの曲でも。」
俺はそう言うなり立ち上がり，少し離れてから歌いだした。ただし，声は出ていない。しかし，彼女の耳だけには聞こえている。その彼女は段々とうつろな瞳になり，ゆっくりと歩んでどこかへ消えた。
しばらくするとお盆のようなものに札束を山積みにして現れた。彼女はそれをいったんテーブルに置き，俺の皮製のアタッシュケースを開けて中にあった偽札を全部取り出し，持って来た札束を綺麗に入れた。そして偽札を山積みにしたお盆のようなものを持って，先ほどと同じようにゆっくりと歩んでどこかへ消えた。
戻ってきた彼女は何事も無かったかのようにソファーにゆっくりと座り，歌を聴きこんだ。
そう，コレが俺の能力。歌うことでその人の意思をなくし，自由に操れるのだ。
俺が歌い続けると彼女はまぶたを閉じ，眠り始めた。それを見取ってから歌うのを止め，彼女の横に座ってコーヒーを飲んだ。
３０分ほどしてから彼女は目を覚ました。
「やだ，お客様がいらっしゃるのに。すいませんでした。」
真っ赤に照れながら謝る彼女に手を振る。
「いえいえ。こんな時間ですし，失礼します。ゆっくりお休み下さい。」

「本当にすいません。ありがとうございましたわ。また機会があったら来て下さいね。」
旦那のいる身で大胆な誘いだが，俺は臆する事も無く頭を下げて家を出た。もちろん，偽札ではなく本物の札束をアタッシュケースに詰めたままだ。
「いい獲物だったな。」
ニヤリと笑み，薄暗い街灯の少ない住宅街を去って行った。

数日たってからニュースで流れるようになった。現金がそっくり偽札に摩り替わっていたというニュースである。
当然，犯人はこの俺。だが，捕まる事は決して無い。
理由は簡単。記憶も操作したからである。俺に関する記憶を一切消したのだ。
方法はもちろん，俺の声で。
「次は誰にしようかな？」

Violin

マンションの屋上に立ち，夜空を見上げる。漆黒の空には満月が住んでいた。淡く，黄色く光る月を見ていると，自然と落ち着いていく。

私はケースからヴァイオリンを出し，肩に当てる。それから弦を数回弾き，納得する音を引き出す。

深呼吸してから弓を引く。奏でられるヴァイオリンが月光を受けて浮かび上がる。

それがまた，美しくて妖しい。

その音色に誘われてきたように，中年の男性が後ろに現れた。それを感じ取り，鼻先で笑ってから弾く手を止める。

「あなたはどういった御用件で？」

ひんやりとした空気とともに耳に入る言葉。とても冷たい声である。

それに対しての返事は無かった。

軽く舌打ちをし，再びヴァイオリンを弾き始めた。古典調の緩やかなメロディーが空気の中ですべり，人の心に侵食する。

その証拠に，男性の表情がほころび始める。それを見てから手を休め，同じ質問をした。すると，今度は返事があった。

「死にたいんだ。」

表情が一気に苦渋へと変わり，声には苦いものが混ざっていた。だが，私はそんなものを気にせず，冷めた目で見返した。

「なぜ？」

「それは……！」

男性は膝をつき，頭を抱えた。薄くなった頭髪をかき乱し，小さく呻いている。

「世話が焼けるわね。」

私はヴァイオリンを奏で，その辺一体を柔らかな空気で囲んだ。

すると，男性は吐き出すように話し始めた。

会社の金で愛人を囲み，それがばれてクビになったこと。警察沙汰となり，家庭崩壊したこと。身寄りが無いこと。仕事に付けないこと。金が尽きたこと。
どれを取っても，負の事ばかりだ。
「で，あなたはどうしたいわけ？」
「おれは，死にたい…！でも……。」
私は苛立った。その証拠に顔が険しくなり，曲調も鋭くなった。それに反応して，男性は縮こまって頭を抑える。
「人に散々な事をしてきて，家族に除け者にされて，仕事も無くて金も無い。それで，どうして生きたいわけ？」
「それは，あああ…！」
惨めな姿のまま，屋上の汚い床に顔をするようにして泣く男性。
私は大きくため息をつき，曲調をゆったりとした優雅なものに変えた。
優しい空気が男性を包み，涙が引いていった。それとともに，表情が苦しみから快楽へ変わっていった。
「愛人が産んだ赤ちゃんがいるのね。」
ハッと顔を上げる。
「なぜそれを？」
「あなたの心はそれで埋まっているからよ。落ちる？」
引くのを止め，弓で屋上の橋を示す。すると男性は大きく首を振った。
「そう。じゃあ真っ当に生きる事ね。」
「はいぃ。すいませんでした。」
土下座して謝る男性をつまらなそうに見て，それから月に視線を向けた。
「次は止めないから。むしろ，落としてやる。」
「はい。心得ておきます。」
男性はもう1度深く頭を下げ，階段を駆け降りていった。
残った私はヴァイオリンで子守唄を奏でた。

「自殺したい人はあとを絶えないわ。止めるのも，気持ちを聞きだすのも容易じゃないわね。」
子守唄は優しい響きを持ってかなたへ流れていった。
その音はどこかで，誰かの気持ちを暴いている。
それは，私の能力。
ヴァイオリンの音色で人の気持ちを引き出し，時には心を覗く。
そして人を裁く。
それがヴァイオリンを弾く私。

引き出された気持ちと，覗かれた心。
それが吉と出るか，凶と出るか。
ヴァイオリンの微笑みのままに。

オセロ

広々とした玄関を抜け，2階に上がり，コートを脱ぐ。コートが勝手に壁掛けに下がるのを確かめ，私は奥に進んだ。

明かりが漏れる部屋のドアをノックしようとしたら，その前に開かれ，中にいた男性2人と目が合った。

「いらっしゃい。」

掠夜が屈託の無い笑顔で迎え，その向かいに座る声楽家・醒（せい）は軽く微笑んで迎えてくれた。相変わらずいい男たちだ，と思いつつソファーに座る。

「調子はどうだい？」

掠夜の質問にため息をつき，ヴァイオリンのケースをそっと足元に置いた。

「うざいオヤジでやな感じよ。」

2人が軽く笑う。相当私の声は嫌な雰囲気を醸し出していたようだ。

「ま，飲みなよ。」

グラスが空中を滑るようにして私の前まで来て，赤ワインが注がれる。便利よね，掠夜って。

「じゃあ1杯目はワインを戴くわ。」

軽く乾杯する仕草をして喉に流す。年代物の，渋さが喉に沁みる。それがまた美味しい。

「今回はオヤジだったのか？」

醒の問い掛けに肩をすくめる。

「ここのところオヤジばっかりよ。たまには若い人がいいわね。」

「この御時勢だから仕方ないんだろうな。」

「でも，醒は相手を選べるからいいじゃない。私は来た奴しか出来ないんだから。いっそ落としちゃえば良かったわ。」

あっさりと毒々しいことを言う私を見て，2人は笑う。

「それでも助けてやったんだろ？」

「今回はね。」
「それだけでも優しいんじゃないか。」
私はしばし2人をねめつける。
「消そうとする私のどこが優しいわけ？」
「一応は生かしてあげるでしょ。それだけでも優しいよ。」
掠夜の微笑みとセリフに苦笑する。
「掠夜は食べないともたないからね。生かしてあげられないんでしょ。」
「まぁね。今回の人はあまりに素直に来るから生かそうかと思ったけど。でも，使っちゃったからね。」
悪びれる事もなく，当たり前のように言ってワインに口を付ける。
血と似通った色が唇に触れるだけで，私はゾクッとした。
全てのものを黒にする人だ。

私はそこまでなっていない。
まだなりきれない。

ワインを飲みながら，醒のコンサートの話を聞いた。正確には，コンサート後に食事をともにした女性の話だ。
「見ていたのか？」
「あら。偶然よ，偶然。ホテルで対談の仕事があったからね。珍しいなーと思ったのよ。恋人？」
醒は鼻で笑った。
「誰が。」
「あっそ。で，いくら？」
彼が冷たく言う女性は必ず獲物と知っている私は，すかさずそれを聞いた。その素早さに呆れた様子ではあったが，アタッシュケースを開いて札束を見せてくれた。
いつ見ても，いい気持ち。
「いいとこの人だったみたいね。」

「社長夫人って感じだった。おれにとっちゃあいい獲物なんだがな。」
媚びる女性を跳ね除けず獲物として喰う。その流れに苦笑した。
「どうするの，これ？」
「別に。」
「じゃあ頂戴。エルメスのバッグが欲しいのよ。」
さばさばとねだる様子に苦笑しつつも，醒は私に札束を5つ投げて寄越した。
素敵な重み。
丁重に受け取り，そっとフェンディーのバッグに入れる。ニコニコしながら立ち上がり，醒の頬にそっとキスを落としてから座る。
「サンキュ，醒。」
「いや。元々おれのものじゃないし。」
「でも，醒の力のお陰だからな。」
そう言う掠夜にも札束を投げる。
「またワイン買っとけ。」
軍資金のように分け与え，醒はゆっくりとグラスを傾けた。

ワインを飲み終えた私は日本酒を掠夜にねだった。ワイン好きな掠夜のこの家には揃えてないだろうと思っていたが，運ばれてきたのは（例によって，空中を滑ってきた），八海山と美濃天狗と一の蔵。どれも私の好きなものだ。
意外な目を掠夜に向けると，にっこり笑い返され，それを見た醒はくすくすと笑む。
「お前の好みは熟知している，だってよ。」
それを聞いて思わず照れてしまった。
「可愛いな，お前は。」
「だってぇ。」
「いーから選べよ。」
醒のぶっきらぼうさにカチンとくるが，いつまでも待たせるのもな

んだので，私は一の蔵を選んだ。
一の蔵をちびちび飲みながら，今度は掠夜の獲物を聞く。彼とお似合いなれそうな年頃の人だった。醒もお似合いになれそうな年頃だったわよね。いいわねー，2人とも。どうせオヤジ受けのいい女ですー。
心の呟きが聞こえたのかどうかは不明だが，2人は微笑んで私の手を取り，そっと口付けた。
「どうしたのよ？」
「綺麗だから拗ねるなよ。」
「大人びているから未熟な人は近寄れないんだよ。出来た人が似合うからね。」
思ってもみない展開に目を丸くするが，数秒後にクスリと笑んだ。
「まったく。扱いが長けているんだから。何がお望み？」
その微笑みと声は，底冷えするものであった。だが，2人はお構いなく口を開いた。
「あいつを入れたい。」
「きっと仲間になるだろうからな。」
翳のある声に笑いそうになる。
「狙いは一緒ね。」
3人の目が合い，ニヤリと笑んだ。

Cello

交響楽団に入団してまだ1ヶ月。新米中の新米だが，期待の星としてされている。実際色々なコンクールで賞をとっているからだ。自分で言うのもなんだが，実力はかなりある。

それでも追いつけない部分はある。

弦楽器で有名な音楽大学をトップで卒業しても，やはり世界は広い。

今日も飽きることなくチェロを弾く。

防音室から窓を覗くと，空はうっすらと青黒く染まっていた。

僕はチェロを手入れしてから片付け，身体を引きずるようにして部屋から出た。1日中弾いていれば，かなり体力を消耗するものだ。これを何度も経験しているのに，いつまでたっても昼食を入れる事は出来なかった。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り，喉に流し込む。ひんやりとした感覚が心地よかった。

でも，まだ足りない。

練習用でも，本番用でもない，もう1つのチェロを担いで家を出た。夕食の団欒を思わせる笑い声を聞きながら，公園へ急ぐ。

通勤客や学生が多く通る公園の真ん中にある噴水の縁に座り，優しくチェロを出す。

街灯に照らされたチェロの表面が綺麗に光り，魅惑的だ。

僕は周りを見渡してから弦を確かめ，弾き始める。

かの有名なチェリストがアメリカの公園で弾いていたように，僕も弾く。人に構わず，ただひたすら弾く。

コンサートホールではないから響くはずはないのだが，どことなく響いているような音色が美しい。余韻を心に残していく音だ。

しばらくするとちらほらと立ち止まって聴きいる人も出てきた。早くも酔っている人は微妙なダンスをする。それでも僕は弾き続けた。

得るために。

次々に曲を弾き，潤す。

僕も，みんなも。

小1時間弾いた頃，救急車のサイレンが耳に入った。

時間を悟った僕は適当に曲を切り上げ，チェロを大切にしまってその場をあとにした。

その時，かすかにヴァイオリンの音色が耳に入った。

いつも寄るショットバーのカウンターに座り，チェロをそっと自分の横に置く。すると，バーテンダーがいつものを用意してくれた。キールだ。

「しばらくだね。」

「ええ。音合わせとか色々ありまして。元気でした？」

「景気はよくないけど，元気だよ。」

バーテンダーはそう言って笑った。僕もつられて少しだけ笑う。

「ちょっと痩せたか？」

「そんなことはないですが。」

「やっぱ交響楽団ってのはキツイのかね。おれのところで弾いてくれりゃあもっといい金集るよ？」

僕は困った表情を浮かべ，それから首を振った。

「ここはお気に入りだから，仕事まで持ち込みたくなくて。」

「そっか。まぁ，ゆっくりしていきなよ。」

軽く会釈をして，バーテンダーの背を見送る。

僕はキールを少しずつ飲み，ぼんやりと過ごす。

グラスが空いた頃，バーテンダーが来てサッとグラスを渡してき

た。キールのあとはカーディナルと決まっていたのに違う。ハンターを差し出され，怪訝そうな顔で見上げると，僕の右手側を示した。
「あちらの方からです。」
びっくりした。こんなの初めてだ。
「どうも。」
戸惑いながら返事する僕にバーテンダーがクスリと笑みを向けてから席をはずした。
「いいえ。そろそろ大丈夫かしら？」
その声は優しくて。それでいてひんやりするものがあった。
言外の意味が伝わったせいかもしれない。
――そろそろ体力が戻ってきたかしら？
なぜ彼女は分かったのだろう。
「そちらにいい？」
「はい。」
女性はヴァイオリンを持って僕の右側に座った。
「私は玲（れい）よ。」
「僕は葵（あおい）です。」
ドキドキするのを隠したくてハンターに口を付ける。が，別の意味で見事に仮面がはがれた。
「初めて飲んだの？」
表情を見て小さく微笑んだ彼女に，小さくうなずく。
「ハンターはウイスキーの苦さとチェリー・ブランデーの甘さがマッチして美味しいんだけど。慣れていないと，舌がびっくりするのよね。」
そう言って彼女もハンターを口に含んだ。それは美味しそうに飲んでいるものだから，思わず見とれてしまった。
「そんなに見ないでよ。恥ずかしいじゃない。」
「あ，すいません。こんな事って初めてだから，落ち着かなくて。」
見栄を張っても意味が無いと思って正直に言うと，彼女は納得したようにうなずいた。

「驚かせてすいません。ただ，弦楽器を持っているから気になっちゃったのよ。」
「いいえ。玲さんはどのくらいヴァイオリンを弾いているんですか？」
「２０年以上は。」
「僕と同じ位ですね。」
「ほかの意味で弾き始めたのは５年位よ。あなたは？」
肘をついて僕を見上げるその表情は，凄くなまめかしく感じた。それと同時に，背筋に氷が滑った。
「何のことですか？」
こわばった声しか出ないのが情けなく感じる。だが，彼女は気にしていないようにクスリと笑んだ。
「しらばっくれても意味ないわ。私も似たようなものだから。いらっしゃい。」
そう言って僕の分も支払い，指でついて来るように促した。僕はどうしたらいいのか迷ったが，なぜかバーテンダーが背中を押してきたのでついて行く羽目になった。

彼女と一緒に歩いて着いたところは，僕がチェロを弾いていた公園であった。
「葵さんはチェロで人から取っていたわね。」
まっすぐ見つめられながら言われ，激しく動揺する。
初めてばれた，僕の能力。
チェロの音色で人から色々なものを奪う能力。
僕が無言でいると，玲はクスクスと笑い出した。
「どうしてばれたのか気になったの？」
「はい。」
「私も力を持っているのよ。人の気持ちなどを引き出す力をね。葵さんがチェロを弾いているとき，私も離れた所で弾いていたの。だから，あなたの事が分かったのよ。」

チェロを弾きながら思っていたこと・人の生気を奪って自分を生かすことがばれていた。そのことが恐ろしく感じて，身震いがする。
自分のことなのに。
だが，彼女は気にした様子もなく笑っていた。そんなことを気にするなと言っているような笑顔だった。
「さっきは生気だったけど，人の才能だって奪えるんでしょ。」
さらりと恐ろしいことを口にしているのに，まったく嫌な感じがしなかった。むしろ，安心する。
「同じ香りを持つ人に，安心した？」
顔に出ていたのだろう。彼女の言う通りだ。
「はい。」
「狙った通りね。仲間になりましょ。」
明るく言ってから差し出した手。
綺麗な手。
でも，血塗れな手。
それでも，僕は手を差し出した。

Piano

初めてかわされた，この指揮棒。
相手は恐れることなく，笑みを浮かべている。
この俺の力で踊らされ，俺の獲物となるはずの相手なのに。
その相手は俺の間合いから逃れ，生きている。

掠夜は息苦しいのも分からなくなるくらい，私の顔を驚愕の面持ちで見ていた。私はそれを余裕の笑みで迎える。
「驚きました？」
彼の口は開くが，言葉が出てこない。
時間としてはたった数秒だが，掠夜は自分を支えきれず，床に倒れこんだ。
時間が無い。
私が彼をこのままにしていたら，補うモノがなくて，死に至る。
私は手にしていたトランペットを置き，掠夜のそばに座って背中をさすった。
「諸刃の剣なんですね，貴方は。」
そう呟き，2階に上がってピアノに向かった。そして，呼吸を整えてから鍵盤に手を置く。
「グラナドス作曲，スペイン舞曲第2番，オリエンタル。」
曲名を言い，弾き始める。私はそんなに上手くない。むしろ，下手な部類だ。だが，好きな曲は別。熱の入れようが違うのが歴然としているが，そんなのは構わない。
弾きたいのを弾きたいときに弾く。
曲が流れるにつれて，掠夜の身体から力が抜けていった。
（これで死ぬのか？俺が？）
散々人を自分の獲物としてきたのに，糧としてきたのに。そう思う

ことに苦笑する掠夜。
だが，彼は気付いた。
これは死ではない。
生である。
曲の終盤。息切れは嘘のように無くなり，掠夜はすくっと立ち上がった。力を使った倦怠感は全く無く，身体どころか心までもが癒された気持ちであった。
「どうですか？」
私は立ち上がって不思議そうに手を握り締めている掠夜に声を掛けた。掠夜は2階から見下ろす私を見てうなずく。
「上手いね。」
「ありがとう。でも，そういう意味で言ったわけじゃないんですけれど。」
掠夜は薄笑いを浮かべた。
（こいつを手に入れる。）
「君の音は癒しを含んでいるんだね。しかも，死んだ人を蘇らせるほど強い癒しだ。」
私はにっこり笑う。掠夜の評価が気に入った。
「もちろん，逆も出来ますけれどね。でも，基本的に貴方にした事の方を多く使います。」
掠夜は朗らかに言う私に，卑しい雰囲気の全く無い真っ当な笑顔を向けてから2階に上がってきた。
「そういう人も欲しいね。仲間にならないか？」
私は皮肉めいた笑みを浮かべる。
「貴方の力を見破り，貴方の魔の手から逃れ。でも殺しはしなかった私です。黒にはなれません。」
そばにあったチェスの駒を投げる。黒いチェスの駒だ。それを受け取り，掠夜はニヤッと笑む。
「全てが黒にならなくてもいい。」
そう言い，チェスの駒を投げてきた。ただし，今度は白いチェスの

駒だ。
「チェスにだって，黒と白があるんだ。もちろん，君にも。俺は微妙だけどね。」
「限りなく黒に近い気がしますけど？」
クツクツと笑む掠夜。
「本当にそうかどうか，側で見ていないか？」
手を差し出してきた。私はその手と顔を交互に見る。
この人は取るに足る人であろうか。
私は数分考え抜き，差し出された手を無視して掠夜の首に腕を回した。彼は驚くこともなく，相変わらず微笑みを浮かべていた。
蜘蛛の巣に引っかかった蝶のような気持ちになるが，それもいいのかもしれない。
「そこまで言うのなら，なりましょう。」
もったいぶるように言い，それから彼の唇に自分のを重ねた。
「自分で癒しておきながら，俺から奪うとはな。」
唇をはなした瞬間，掠夜がそう言った。その言葉に苦笑する。
「私だって力を使えば疲れるんです。元気な人から分けて貰うのは，当然でしょ。」
悪びれた様子もなく言う私に，掠夜はキスをしてきた。
どちらが獲物なんだか。

視線

窓の外を見ると，いつの間にか夕暮れになっていた。

夢現な表情を浮かべる彼女の髪を撫で，ふと気になっていたことを口にした。

なぜ力を見破ったのかと。

彼女は笑った。

「見れば分かりますよ。普通の人とは全然違う雰囲気を醸し出しているじゃないですか。」

「だが，それだけじゃどういう力なのかは分からないだろ？」

彼女は髪の先をいじる。

「そうだけど。あとは勘ってとこですね。」

「そうか。」

こざっぱりと言う彼女に，これ以上は突っ込んで聞けなさそうであった。

「そう言えば，まだ名前を聞いていなかったな。」

「玻紅璃（はくり）。」

どういう字を書くのかと聞くと，ピアノを弾くわりには小さい手を広げ，そこに指で書いて見せた。

「珍しい字だな。」

「貴方の名前はなんていうんですか？」

掠夜は玻紅璃の小さな手に書いて見せる。

「人のことは言えないと思いますが？」

「まぁな。」

そう言い，また彼女の髪を撫でる。気持ち良さそうに目を閉じる玻紅璃にキスをしようかと思ったら，邪魔が入った。

「来たか。」

そう言い，服装を整える掠夜。

「この間新しい人が入って，今日紹介して貰うことになっていたんだ。玻紅璃も紹介するからおいで。」
「同じように，力を持つ人たちが来たってことですか？」
「ああ。」
玻紅璃はだるそうに起き上がり，服を着る。
「そういえば，掠夜っていくつですか？」
「２６歳。」
「若いんですね。この前テレビで海外演奏のを見たから，結構上かと思ってました。」
眉をひそめて玻紅璃を見る。
「老けて見えるとでも言いたいのか？」
あからさまに不機嫌な声なので，玻紅璃は思わず笑う。
「そんなことないですよ。」
「そう言う玻紅璃はいくつ？」
「２２歳です。」
「幼く見える。」
「若く見えるとでも言ってくださいー。」
あからさまに拗ねた声なので，掠夜は仕方ないようにため息をつき，それから彼女の頭を撫でた。
「可愛いってことだよ。おいで。さ，行こうか。」
上手く流されたような思いがしたが，玻紅璃は素直について行った。

応接間にはまだ誰もいなく，その中をワインボトルとグラス，カナッペなどが乗ったお皿，日本酒と杯などが空を滑るように進み，テーブルに収まった。
「すごーい。これも掠夜の力なんですか？」
「まぁね。何を飲む？」
ソファーに座りながら問われ，思わず笑みを漏らす玻紅璃。
「なんだかホストクラブに来ちゃった感じですね。行ったことはないんですけれど。」

掠夜は軽く笑う。
「玻紅璃が行ったら丸裸で帰されそうだな。」
「失礼ね。」
「で，何を飲む？」
拗ねやすい彼女に笑いつつ再度尋ねる。
「日本酒で。その中のだったら美濃天狗がいいです。」
「へぇ。若いのに日本酒か。」
「私っておじ様うけがいいんです。だから，お付き合いで飲むとなると大体ビールか日本酒。だから，私も好きになっちゃったんですよ。」
「あら，私と一緒におじ様うけがいい子なの。」
突然聞こえた声にびくっとしてドアを見る玻紅璃。一方掠夜は気にすることなく玻紅璃に日本酒を渡し，声の主・玲を見る。
「いらっしゃい，待っていたよ。」
「可愛い子と一緒なのね。醒は？」
「まだ。どうぞ，新しい方。」
玲の後ろにいる男性に席を勧める。
「葵です。初めまして。」
硬そうに挨拶をしてソファーに座る。その横に玲が座り，早速自分で美濃天狗を注ぐ。
「掠夜だ。よろしく。」
グラスを渡し，真っ赤なワインを注ぐ。
「チェリストだったね，確か。今度アートホールで演奏会があったんじゃなかったかな？」
「ええ。」
ワインに口を付けながら周りを窺う。
「珍しいかい？」
「当たり前じゃない。初めて来た所ですもの。」
「ところで，葵の本質はなんだ？」
———持つ力はなんだ？

ごくりと喉を鳴らす葵。陰の入った声に少し緊張する。それを見取った玲は葵の肩を軽く叩く。
「掠夜はいつもこうなのよ。気にしない方がいいわ。それに，同じ匂いでしょ。少しは安心なさい。」
同じ陰を持つ匂い。安心する匂いでもある。
葵はまだこの雰囲気に呑まれている様子ではあったが，自分の力とやり方を話した。それを聞いて掠夜は軽くうなずき，彼を入れたことを満足しているようであった。
玲は自分の杯に美濃天狗を注ぎ，次に玻紅璃の杯にも注いだ。初めて会う人にお酒をついで貰って恐縮している玻紅璃を，玲は大人の笑みで見ていた。
「そんなに硬くならなくてもよろしくてよ。私は玲。貴女は？」
妖艶に微笑む彼女に一瞬目を奪われるが，玻紅璃はにっこり笑って返した。
「玻紅璃です。ヴァイオリンの調子はいかがですか？」
玲の表情が一気に驚きに変わる。
「今日は持って来てないのに，よくヴァイオリニストと分かったわね。私は掠夜や醒，葵と違って，たいして表舞台には立っていないのよ。ホテルのバックミュージックとか結婚式とかで弾いているくらいなんだけど。どこかでお会いしたのかしら？」
「いいえ。なんとなく分かったんです。」
朗らかに言う彼女の横で，掠夜は軽く笑う。
「たいした勘だな。お見事。」
頭を撫でられ，嬉しそうに彼を見る玻紅璃。それを見て，玲はクスリと笑った。
「掠夜の意外な面を見た気がするわ。」
「そうか？まぁ，獲物と思っていたのに，獲物にされたから，玻紅璃は特別なんだろうな。」
「玻紅璃さんを獲物にしようと思っていたんですか？」
葵が驚いて声を上げる。そんな彼に掠夜は冷ややかに笑う。

「簡単についてきたからね。」
「へぇ。詳しく話してくださらない？」
掠夜と玻紅璃は視線で会話するが，玲の強い視線に阻まれて，折れる形となった。
「まぁいいか。」
そう呟き，掠夜は玻紅璃と会ったところから話し始めた。

掠夜の話が終わるとほぼ同時に，応接間のドアが開かれた。
「そんな事もあるんだな。」
そう言って入ってきたのは声楽家の醒。空いているソファーにどっかりと座り，いつものように皮のアタッシュケースを足元に置いた。
「廊下で立ち聞きとは。」
「話の腰を折りたくなかっただけだ。ワイン。」
グラスとワインボトルがまた空を滑るようにして醒の前に行き，ワインを注いだ。
「これ，新しいやつだな。」
「この間お金を貰ったからね。」
「そうだったな。あんたが玻紅璃だな。掠夜をかわすなんて，いい勘しているな。ま，以後よろしく。それから。」
醒は葵に向かってグラスを掲げた。
「ようこそ。俺は醒。一応名の知れた声楽家だ。」
「初めまして。僕はチェリストの葵です。よろしくお願いします。」
陰をおおった様子の薄い様を，醒は驚き顔で見る。
「どうしたんですか？」
自分が不興を買ったのかと，少し不安そうに醒を見る。その横で玲がクスクスと笑い出した。
「まったく。醒，葵は礼儀正しいのよ。」
「けど，白に近い感じじゃねーか。」
「いつも黒を纏っているのは，ひよっこって事でしょ。彼の能力は熟練したものよ。だから，醒だって仲間に入れたかったんでしょ。」
「まぁ，そうだがな。」
醒も葵の力量を見抜いていたからこそ欲しがっていたのだが，実際対面すると物足りなく感じたのだ。
「いいじゃない。ここにいるってことは，本物なんだから。」

そう言って美濃天狗をスッと飲み干す。
「今度は何がいいかい？」
すかさず聞いてくる掠夜をチラリと見て，それから玻紅璃を見た。
「玻紅璃ちゃん，貴女は何がよろしくて？」
「私ですか？えっと…八海山がいいです。」
「掠夜，お願いね。」
玲が人を気にして注文するのを珍しく思いつつも，掠夜は手を一振りする。すると，すーっと2人の前にガラス製の徳利が現れた。
「ありがとう。」
「ありがとうございます。あの，今更って感じなんですけど，聞いてもいいですか？」
遠慮がちに言う玻紅璃に視線が集り，その主が全員うなずく。
「仲間になろうって言われたけれど，何か大事でも起こすんですか？」
「あ，確かに。」
葵の呟きから少し間があったのち，玲が笑い出した。
「あはははは。なんだか分からないのに手を取ったの？」
醒は鼻で笑う。
「少しは察して入ったのかと思いきや。掠夜，話してやれよ。」
掠夜は呆れた表情を浮かべて肩をすくめたが，玻紅璃と葵にじっと見られ，口を開いた。
「大事をするにはメンバーが少ないからまだしないよ。するかどうかも，微妙だけどね。とりあえず今のところは，自分の手柄とかを話すくらいだ。誰にも話せないと，つまらないからね。」
「なるほどぉ～。確かにこの事は誰にも言えないから，なーんかスッキリしないんですよね。ふふ，入って良かったです。」
玻紅璃はにっこり笑って言う。逆に葵はホッとしたようにため息をついた。
「あら，どうしたのよ？」
「あ，いや。僕の力を使って何かしろって言われたらどうしようか

と思っていたので。」
「ふふ，可愛いわね，まったく。私たちはそんな事をしなくてよ。」
「ああ。俺たちに上下はないからな。一応掠夜がトップって事にしているが，命令するようなことはない。俺たちはあくまでも対等だ。」
「そういう事だ。安心したかい？」
掠夜が葵にワインボトルを傾けると，葵はホッとした表情を浮かべてグラスを持った。
「ええ。すいません，くだらないことを。」
「そんなことはないさ。俺たちは全員陰を持つからね。何かしら構えてしまうのは当然だ。まぁ，安心しておいで。」
葵に注ぎ，醒にも注ぐ。
真っ赤なワインを。
注がれる様子を見て，玻紅璃は少し悲しい表情を浮かべながら掠夜を見た。視線に気付いた掠夜は玻紅璃の横に座って頭を撫でるが，玻紅璃は何も言わずにお酒を口にした。
夜も更け，終電間際になった頃，洋館の主以外は席を立った。
「そろそろ帰ります。」
「醒，今度カクテルドレス買うから，またお願いしていい？」
別れ際に玲がおねだりし，醒は苦笑しながらもうなずいた。その様子を見た葵と玻紅璃は首をかしげる。
「醒はよくお金を持って来てくれるのよ。もちろん，声を生かして頂いてくるんだけどね。」
「なるほど。」
「お前たちも欲しいものあったら言っていいぞ。これくらい安いもんだ。」
一緒に話しているとさほど感じないのだが，このように言われると，改めて醒が1番の年長である事を感じた。1番年少の玻紅璃は年の離れた兄に懐くように，喜んでお願いをしていた。それを見た葵は，真似できない，というふうにため息をつく。

「言ったっていいのよ。まぁ，人それぞれだけどね。じゃあまたね，掠夜。」
「ああ，気を付けて帰れよ。」
それぞれ挨拶をして，洋館をあとにした。

Trumpet

コートなどいらなくなり，緑がまぶしくなって来た頃となった。
掠夜はいつものようにふらりと付いて来た女性に力を見せ，美味しく頂いていた。指揮棒についた血をすぅーっと舐め，それと同時に玄関の扉を見る。コンコンとドアノックがなり，自然と扉が開く。来たのは玻紅璃と男性であった。特に変わった様子のない，中肉中背の男性だ。
知らない人が隣にいる事に少し眉をひそめるが，すぐに玻紅璃が髪の毛を切った事に目を奪われた。
「ずいぶんとばっさり切ったんだね。」
腰まであった黒髪を２０ｃｍほど切ったので，ずいぶんと印象が違う。
「すっきりしたくなったんです。掠夜も伸びてきたから切ればいいのに。」
と，手を伸ばして言うが，それでも足らずに少し背伸びをして髪に触れる。
身長１５０ｃｍの玻紅璃が１８０ｃｍ以上ある身長の人の髪に触れるのは，ちょっと辛そうに見えた。
「かがんであげれば良かったかな？」
玻紅璃はすぐに拗ねた顔になる。
「どうせチビですー。」
いつも通りの反応に苦笑し，彼女の頭を撫でる。それから横にいる男性に目を向けた。
「君は？」
「その前に，応接間に行きたいです。匂いが……。」
若干青ざめたような表情を浮かべていたので，掠夜はすぐに２階にある応接間に誘導した。
応接間に入ると同時に，日本酒と酒盃，塩せんべいなどが空を滑

ってきて，テーブルに着地した。その様子を男性は目を丸くして見る。
「この位は慣れておくもんだよ。」
苦笑交じりに掠夜がいうと，男性は一瞬鋭い目を向けるがすぐにうなずいてソファーに座った。
「あ，美味しい。」
早速飲んだ玻紅璃は嬉しそうに声を上げる。
「それは良かった。それでは改めて。俺は掠夜。君は？」
「侑（ゆう）です。」
「そう。玻紅璃，一体どうして連れてきたんだ？」
「お仲間になれる人だからに決まってるじゃないですか。」
眉を上げる。そういう感じがしなかったから，なおさら怪訝そうに見る。
「勘…か？」
「ううん。見ちゃったんです。ね？」
笑って侑を見ると，侑は複雑な表情を浮かべてうなずいた。
「見られてるとは思わなかった。」
「で，侑の本質は？」
———持つ力は？
「気持ちを変えること。」
掠夜はちらちと玻紅璃を見る。どんな状況を見たのか，話して貰うためにだ。
「侑君がトランペットを吹いたら，あっさり大学教授が単位を上げたんですよ。それまで落第を突きつけていたのに。」
侑は視線を逸らす。自分の実力のなさに恥じたのだ。だが，そんな事には構わず，掠夜はうなずいてみせた。
「嫌がる人をうなずかせることも出来，逆に言い寄って来る人を一生来ないように気持ちを反対にすることも出来るのか。いいね，それ。」
「それはどうも。」

「それで，入るかい？」
戸惑いを浮かべる表情を掠夜に向ける。
「オレ，下手なのに。」
「私も下手ですよ。」
「けど，使える力が強いじゃないか。」
「侑君も強いですよ。優劣なんてないです。」
「だけど。」
目の前で痴話げんかのような雰囲気をされ，ちょっと面白くない掠夜。だが，そこは年長の意地もあったのか，侑に手を差し伸べた。
「演奏の上手い下手は関係ないんだ。力を持つ者が集って話をするくらいだしね，今のところは。損をすることはない。どうだ？」
玻紅璃は侑がどうするのかハラハラと見ていたが，その杞憂はあっさりと払われた。
「オレはまだ駆け出しの１９歳だけど，いいのか？」
「年齢は関係ない。力さえあればいいんだ。」
「ならいいよ。」
手を結ぶ。
　事の発展に面白がって笑みを浮かべる侑に，掠夜はしっかりと握手を交わした。見た目では感じ取れなかった黒の部分を，握手をすることで感じとったのだ。
　段々と増えていく仲間に，掠夜は笑みを浮かべずにはいられなかった

一線

この日は珍しく昼間から掠夜の洋館に集っていた。それは，3年振りに掠夜が作曲した曲を試すためである。メンバー全員が集ってもパートとしては少ないのだが，おおよその流れを掴むには良かった。

「楽器が少ないから全体の雰囲気はあまり掴めないが，どうだ？」

今回は声を取り入れていないので，観客気分で聴いていた醒が掠夜をチラリと見ながら言った。見られた方は少々難しそうな表情を浮かべている。

「まぁまぁだが，もう少しキレがあるといいかな。ありがとう，参考になったよ。」

ヴァイオリニストの玲，チェリストの葵，トランペッターの侑は軽くうなずいて楽器を丁寧にしまう。2階にあるグランドピアノを弾いていた玻紅璃は拍手を送った。

「単独での演奏も魅力あるけど，やっぱり重なるといいですね。曲も好みです。」

「ありがとう。」

恥ずかしがる様子もなく受け取り，スッと視線を玄関の扉に向けた。その数秒後にドアノックが玄関ホールに響いた。

全員の視線が集中する。

一体誰が来たのかと。

ここに来る人は決まっているのだ。

知っている人ならばドアノックを鳴らすだけですぐに開けているが，今回はそうはいかない。掠夜は扉を通して相手を感じ取った。

白ではない。

でも，黒でもない。

今までない感じに眉をひそめるが，思いたってメンバーを見る。1階にいた者は皆，掠夜の判断を任せた表情をしていた。しかし，

２階にいた玻紅璃は困惑した表情を浮かべていた。
「どうした？」
「何がどうだって事もないんですが，なんとなく不慣れな雰囲気を持っているように感じて。」
玻紅璃の勘がよく当たる事を知っているメンバーは怪訝そうに扉を見る。
「掠夜，どうする気よ？」
「ヴァイオリンを弾いてくれるか？」
――気持ちを引き出してくれないか？
玲は宙に視線を巡らすが，視線を掠夜に戻してうなずいた。
「高くつくわよ？」
「醒，頼むよ。」
思わぬところで名指しされ，首をすくめる。
「まぁいいだろう。」
「交渉成立ね。」
玲は醒にニッコリ笑ってヴァイオリンを出し，弾き始めた。
ほかのメンバーは応接間で待機し，掠夜は玄関の扉を開けた。
そこに立っていたのは，４０代に見える女性であった。掠夜は舞台上でする笑顔を向けた。
「どちら様ですか？」
「あの，さっきまで音楽が聞こえていたので。誘われて来ちゃったんです。」
「そうでしたか。もう終わってしまったんですけれど。何か？」
相手に隙を与えないようにスラスラと言う掠夜に対して，女性はやはりすぐには口を開かなかった。しかし，ヴァイオリンの音が段々と強くなってくると，まっすぐに掠夜を見て話し始めた。
「私がフルートを吹くと，聴いた人全員が気を失うんです。最初は聴いている人が疲れているせいだと思って取り合わなかったんですけれど，この間ホームパーティーで吹いたらみんな倒れちゃって。どうしてこんなことが私に出来るのかしら…。もうどうしたらいい

のかと悩んで歩いていたら，音楽が聞こえたのでつい入って来ちゃったんです。すいません。」
「いえ。ですが，それだけではありませんよね。」
女性は思い切り視線を逸らす。後ろめたい証拠だ。それだけは言うまいと思っていたようだが，玲がきつく演奏したのを聴いて身を縮こまらせた。
「怖いんです。聴いていた息子がまだ意識を取り戻さないんです。ああ，どうしたらいいの…！！」
掠夜はうざったそうに女性を見て，それから玲にうなずいて見せた。玲は心得たように柔らかい音色をたてながら応接間に行った。
　しばらくして，玲の変わりに葵が来た。
「頼むよ。」
掠夜はそれだけいい，葵はうなずく。そして，椅子を引っ張り出して来て座り，チェロを出した。
　かすかな緊張感はあったが，掠夜の手を取ってからはずいぶんと使ってきたこともあり，すんなりと弾き始めた。優しい音色が玄関ホールに響き，耳を刺激する。だが，女性にとっては耳だけではなかった。身体の中心から抉り取られるような感覚が走った。
　1分後。女性は倒れ，葵は汗だくになって弦を下ろした。
「ずいぶんと強いですね。でも，本人はそれを認めたくはなかった。その上，こなせる力がなかった。だから周りに影響が出たんでしょう。」
「そんなところだね。この人は路上に置いて，俺たちは応接間に行こう。ご苦労さん。」
「いいえ。」
無情のようだが，ここで面倒を見るわけにもいかないので外に放っておく。力をなくし，演奏をしても誰も気を失わないようにしただけでも，この女性にとっては得であろう。
「手綱を掴む事も，力の内だよ。」
陰を含んだ声が，玄関に響いた。

血の色ワイン

掠夜と葵が女性を路上に置いて戻ってくると，玻紅璃の伴奏に合わせて醒が歌っていた。2階から放たれる声が洋館に反響し，落ち着かせている。だが，その声は『声』として耳に入らなかった。直接脳に働きかけているような，優しい波長を醸し出していた。

歌い終わったところで掠夜と葵は拍手し，醒は軽くうなずいて見せる。そして伴奏をしていた玻紅璃に握手を求めた。

「初見なのに結構弾けたもんだな。凄いね。」

手離しに褒められ，玻紅璃はにっこりして握手する。

「ありがとうございます。ちょっと緊張しちゃいました。」

「玻紅璃は腕が上がったんじゃないか？」

2階に上がってきた掠夜がそう問いかけると，首をかしげた。

「掠夜作曲のを弾くために相当頑張りましたけど，まだまだですよ。」

「でも，成長の可能性はかなりあるよ。鍛え甲斐があるね。」

「え？掠夜さんが教えていたんですか？」

驚きの声を上げる葵に，掠夜は軽く微笑む。

「まぁね。醒，ご苦労様。」

「いや。ここらへんの人の記憶を消しておかないと，あとあと大変だからな。こっちは請求させて貰うよ。」

「了解。」

4人が応接間に戻ると，すでに玲は日本酒を飲んでいた。

「ご苦労様。」

「いや。玲もご苦労さん。」

「いーえ。醒，よろしくね。」

「へいへい。」

全員が席に着き，グラスを傾ける。

「何を食べたい？」
掠夜が注文を取り，サッと指揮をするように腕を動かす。すると３０分後にはそれぞれの食べ物が配られてきた。
「便利ですね。」
「これも力の内だよ。」
「やっぱり掠夜さんが１番強いんだな。」
恨めしそうに侑が言うのを聞いて，掠夜はクスッと笑む。
「そんなことないよ。以前，玻紅璃にかわされちゃったからね。」
侑は目を広げて玻紅璃を見るが，見られた方は恥ずかしそうに身をすくめた。
「勘が働いただけですー。強くないですからね。」
「あら，そんなことないでしょ。」
「そんなことありますよー。」
酒盃を抱えながら抗議すると，玲は妖しく微笑んだ。
「ここに集っている人たちは力を操り，自分の物として持っていられるのよ。強いに決まってるじゃないの。」
「力を自分の物とすることが，強い証拠であるからな。」
掠夜はニヤリと笑んだ。

その後。残った玻紅璃と洋館の主の掠夜はまだお酒を飲みかわしていた。
「強いな，玻紅璃は。」
「飲みたい気分なんですよー。ね，今度は真っ赤なワインが欲しいなぁ。」
酔いの回った声で言われ，掠夜は苦笑する。
「明日潰れるぞ？」
「いいんですー。ねー，ちょうだ～い。」
駄々っ子のように掠夜にワインをせがみ，彼は仕方なしに運ばせる。
「１杯だけだよ。」
「やったぁ。」

アンティーク調のグラスに注がれる様子をじっと見て，満たされたワインに口を軽く付けた。
「美味しい。」
掠夜も自分に注ぎ，口を付ける。年代物ではあるが，渋みは少なくて口にちょうど合う。
２人ともしゃべらず，静かな中でワインを傾ける。香りだけでも心地よいワインだが，喉に流すと格別である。上質なワインをゆっくり味わって飲み，グラスを空ける。
グラスが空になったところで，掠夜は口を開いた。
「今日はどうしたんだ？」
もたれかかってくる玻紅璃の頭を撫で，真意を引き出そうとする。だが，玻紅璃はまだ口を開かず，ワイングラスを眺めるだけであった。ちょっぴり残った真っ赤なワインがグラスの中を泳ぎ，目を遊ばせる。
「玻紅璃？」
呼びかけるが返事はなく，まだグラスを眺めているばかりであった。
痺れを切らした掠夜はグラスを取り上げ，玻紅璃に正面を向かせた。
「いったいどうしたんだ？」
こんなに人に執着を見せた事がなかっただけに，自分の今の姿に呆れ返ってしまう。だが，そんなのはお構いなしだった。玻紅璃の様子が気になって仕方がない。
「真っ赤なワインだよね。」
テーブルに置かれたワイングラスを取って傾け，ちょっぴり残っていたワインを掌で受ける。
「痛かったよね，きっと。」
掠夜は眉をひそめる。
「何の事を言っている？」
玻紅璃は掌に乗ったワインをぺろっと舐める。
「水珂のことよ。」

「は？」
掠夜の記憶にない名前を出され，軽く混乱する。だが，玻紅璃は酔っているはずなのにしっかりとした視線を掠夜に向けていた。
「海外演奏から帰って来た頃に，掠夜は女性に力を見せたでしょ。その人が水珂。」
半年ほど前の話だが，記憶には薄れていない。確かに，掠夜は海外演奏から帰って来たその日に連れ込んだ女性を仕留めていた。
「それが？」
「私の友達だったのよ。」
玻紅璃は掠夜の膝の上に乗っかり，首に手を掛ける。
「ね，掠夜。」
愛しそうに呼ぶ声。だが，冷え切った声でもあった。

手を掛けて

これほどまでに重く圧し掛かる声を，未だかつて聞いたことがあるだろうか。
玻紅璃は首に手を掛けただけで，力は入れていなかった。だが，掠夜は凄く苦しい思いをしていた。表情には出さなかったが，縛り付けられているような思いをしていた。
「玻紅璃？」
「私の大事な友達だったのよ。なのに掠夜が……。」
玻紅璃は手を掛けたまま，掠夜の胸に額をコツンとあてた。
「掠夜の力とか，水珂の無用心さとか。そんなことは分かっている。だけど…！！」
涙が溢れる。

水珂の死を悼んだ涙。
彼女を助けられない痛みの涙。

掠夜は無表情で，ただ玻紅璃の背中をさすっていた。弁解も，説得も，謝罪することすらもする気は全くないようだ。
「赤ワインを見て悲しそうにしていたのは，友達の死を思うからか？」
コクンと小さくうなずく。
「じゃあさっきの赤ワインは？」
「水珂への手向けよ。」
「ふ～ん。けど，本当に俺がその水珂って人を食べたと思うのか？」
そう言ったとたんに，玻紅璃の手に力が込められた。
「クッ」
息が詰まる。
「水珂は散歩中に攫われたとかお母さんたちは言っていたけれど，

そんなわけないじゃない。そんな形跡もないのに。散歩道に怪しい所なんて，ここしかないわ。そして，貴方。それから，私の勘。」
ほかの誰でもない。掠夜が手を掛けたとしか思えない。玻紅璃はそう強く思っていた。
だが，それに反して徐々に手の力が弱まる。
「俺に黙って付いて来たのも，水珂に関係すると思ったからか？」
「そうよ。」
掠夜は軽く息を吐く。
「素晴らしい勘だね。で，俺をどうする？殺すなら今の内だけど。」
玻紅璃は何も言わずに首から手を放し，抱きついた。
「殺してやるって思っていたけれど，許せないって思っていたけれど，無理ね。水珂が残っているのならまだしも，もういないし。殺したところで水珂が戻ってくるわけでもないし。それに，同業者を消すのはやめているから。でも――――」
抱きついていた手をいったん放し，掠夜の右手を掴む。
「私が殺されるのは，許せないわ。」
一転して暗い，冷ややかな声で言う。それから掠夜の顔を見る。彼は表情を一瞬崩すが，すぐに口の端を吊り上げて軽く微笑んだ。
「玻紅璃の勘には勝てないな。もう手を掛けないよ，君にはね。」
「それが掠夜のためでもあるわ。」
「どういう意味だ？」
「私のピアノの音。掠夜には生かす方で弾いたけど，少し細工をさせて貰ったの。私に手を掛けたら，掠夜も死ぬから。」
目を細めて彼女を見る。
「本当よ。試してもいいけれど？」
数秒，玻紅璃を見つめる。玻紅璃は見つめ返し，このあとの展開に気を付ける。
だが，掠夜の表情からは何も読めなかった。読み取ろうとしても，遮蔽されているようで感じ取れなかった。‘食えない人’と思っていると，その表情が一転して笑いに変わった。闇の，陰のある笑み

に。
「油断も隙もあったもんじゃない。なかなかだよ，玻紅璃は。」
「あの時，私にとどめを刺しておけば良かったんじゃない？」
皮肉めいた笑みを浮かべて言う。それには首を横に振られた。
「仲間にして良かったよ。今までで最高だね，玻紅璃は。」
そう言い，玻紅璃の顎に手を当てて唇を重ねた。

賽

玻紅璃が目を覚ますと，窓からは明るい朝日が差し込んでいた。
その爽やかな空気とは裏腹に，身体はふらふらと，宙に浮いているような感じであった。
（二日酔いかな？）
今まで潰れるほど飲んだ事はないが，昨夜の記憶は微妙に途切れがちだ。
（昨日は何していたんだっけ？）
思い出そうとしても，浮遊感が邪魔をして上手く引っ張りだせない。
　なんとか引き出したのは，昨日いた場所。昨日の記憶の終わりにいた場所は応接間。だが，ここは掠夜の寝室。正確に言えば，ベッドの上であった。その証拠に，掠夜も隣で眠っている。
（うわー。掠夜の寝顔，初めて見た。男のくせに可愛いなぁ。）
まだ酔いが続いているような頭で考えたことは，頬をつねる事。
（私より肌が綺麗じゃないか？）
なんだか悲しくなる思いをしながらも，頬をつねる。
　3回して，ようやく掠夜が目を覚ました。ご機嫌斜めな視線を玻紅璃に向け，むっくりと起き上がる。
「なにをするんだ？」
ほや～っと気の抜けた笑みを浮かべる玻紅璃。
「なんとなく♪」
掠夜はその答えを聞いてそっとため息をつく。
「酔っているんだな。」
「そんなことないですよー。」
「じゃあ昨日どれだけ飲んだか覚えているか？」
数秒沈黙。そして，テへっと軽く笑う。
「覚えてないです。」
「まったく。玻紅璃，昨日は日本酒5合と赤ワイン1杯を飲んでい

たんだぞ。」
「ワインも。あ……！！」
一気に記憶が戻ったようだ。そして，掠夜に視線をしっかりと向ける。だが，その視線は寂しさをたっぷりと含んでいた。
「水珂を食べちゃったんですよね。」
「あの人が水珂という人ならね。」
昨日と同様，無関心に答える掠夜。
「憎たらしい。」
掠夜にまたがり，昨夜のように首に手を掛ける玻紅璃。だが，力は全く入っていない。
「でも，憎めない。それだけ言えればいいです。」
そう言い，手を離してゴロンと横になる。
「そうか。で，話は変わるが二日酔いだろ？」
「んー，ちょっとかったるいだけですから。」
「ちょっと？」
含み笑いをする。
「なんですか？」
拗ねた口調。いつも通りの玻紅璃だ。だが，いつもよりはパワーダウンしているようだ。
「昨日は俺とキスしているうちに寝たくせに。ちょっとの酔いとは思えないな。」
玻紅璃は一瞬で真っ赤になる。
「えぇ！？」
「覚えてないのか？」
「いや，キスした事は覚えてますけど。」
その後の記憶はない。暗にそう言っているのを読み取り，掠夜は微笑む。
「今日は寝ておけ。俺は仕事に行くけど。」
「行っちゃうんですか？」
「作曲したやつのＣＤ製作でスケジュールがいっぱいだからね。適

当に過ごしていな。」
「はぁい。」
眩しい朝日の中，掠夜は部屋をあとにした。

その日の夜，醒が物をつっかえたような，あまりよくない表情を浮かべながらやってきた。仕事の疲れかと思っていたが，どうやら違うようだ。ワインに手を付ける前に，ゴシップ雑誌の切抜きを掠夜に差し出した。
「とりあえず読んでみろ。」
言われるままに目を通す。横から玻紅璃も顔を覗かせて読む。その表情が段々と疑惑に満ちてくる。
「これって本当に起こったことですか？」
「多分。」
ワインをひと口飲んで落ち着いた醒は言った。
記事の内容は，某交響楽団の団員の半数がコンサート後に事故にあったということである。しかも，バラバラにだ。数名ならばこの記者はもとより，誰も気に掛けなかったであろう。だが，被害にあったのは団員の半数である。数十人にものぼる。
「誰かが故意にしたってことか？」
醒は首を軽くかしげた。
「分かるのは，俺たちの誰かってことじゃないくらいだな。」
「私たちの知らない力の持ち主ってことも分かるんじゃなくて？」
横から声を入れたのは，玲であった。お決まりのように，葵と一緒に来ていた。
「やぁ，いらっしゃい。」
掠夜は軽く笑んで迎え，サッと手を振って日本酒とグラスの追加をした。
「いつも一緒に来るんだな。」
「付き合っているのか？」
思いもよらない質問に玲は目を丸くし，葵は少々慌てた表情をした。

「付き合ってませんって。こんな僕と釣り合いませんし。」
「そんなことはないと思うけどな。似合っているよ。」
半分は本当にそう思い，半分はからかっている掠夜。面白がっているその様子が気に食わなかったのか，玲はキラッと狙いをすました猫のような視線を向ける。
「そう言うのなら，掠夜と玻紅璃だって付き合っているんじゃなくて？」
2人が顔を合わせる。色めいた雰囲気は欠片もない。
「付き合ってはいないな。」
「そうですね。」
あまりにあっさりとした反応。更に面白くなく，玲は肩をすくめて席に着いた。
「私たちもそれが気になって来たのよ。」
「ゴシップ雑誌だから真偽は微妙ですけれど，ここまで大きいと無視出来ませんから。」
この記事を巡って5人は話し合う。玻紅璃の勘ではこの記事内容は本物のようだから，一体誰がしたのか。また，何のためにしたのか。あてもないところから探っても仕方がないのだが，やはり気になる。しかし，結論としてはやはり様子を見る，ということであった。
　その後，教授の特訓にほとほと疲れた侑もまざった。疲れきってはいたが，この話に食いついてきた。あまりない様子に，全員の視線が集る。
「それは本当のことだ。教授が，教え子がコンサート後に突然死んだって話していたから。」
「どこの楽団だ？」
某交響楽団とは，地方の交響楽団であった。だが，知名度としてはかなり低い。そんな交響楽団だからゴシック雑誌に取り上げられたのだろう。
「ま，さっきもそうだったけど，やっぱり様子を見るしかなさそうだな。」

醒が掠夜に視線を向ける。向けられた彼はすました表情であったが，唇を片方吊り上げて鼻で笑った。
「そうだな。また何かあれば出てくるだろう。」
掠夜がまとめてしまえば，他の人は何も言わない。
それからは，最近の手柄の話や掠夜のＣＤ製作の話に移って言った。

彼らの知らないところで，うめき声をあげて倒れた人がいた。全身を強く打ち，血が流れている。それに気を取られることなく，その場から離れて行った人がいた。
コンクリートの地面に，ハイヒールの音だけが響いていた。

Witch

夏休みに入った。友達は海外へ勉強しに行ったり，バカンスしているというのに，俺は相変わらず朝っぱからか教授の猛特訓の毎日であった。

冷房が入っているとはいえ，密閉している防音の練習室に1日缶詰にされるとたまらない。でも，甘えられない。

時計の短針が4に振れたとき，ようやく教授から解放され，カフェテリアに足を向けた。

綺麗に整えられている庭園を眺めながら，アボガドとサーモンのサンドイッチを頬張る。考えてみれば今日初めての食事だった。上手い。ここのコーヒーもおかわり自由のわりに味がいい。金のない大学生にとっては良心的だな。

なんて思っていたら，声を掛けられた。

「ここ，いいかしら？」

声を掛けてきたのは，40歳に近いくらいの女性。ショートカットで，キャリアウーマン的な雰囲気を持っている人だ。

ただ，上手く言えないが嫌な雰囲気が身体を走った。

空いている席はありそうだが，なんで俺の隣なんか来たんだか。ま，関係ねーや。

「どーぞ。」

残りを食べ，コーヒーを飲み干す。うん，充電満タン。

トレーを持って立ち上がったとき，また声を掛けられた。

「あなたはトランペットを吹いているのよね？」

質問だが，確信を得たような口調。なんなんだ？

「はぁ。専攻はトランペットですけど，何か？」

「いいえ。ずいぶんと上手になったんだと思って。頑張ってね。」

上手になった？俺，この人知らないぞ。なんで俺のこと知っているんだよ？

薄気味悪い思いをしながらも，軽く頭を下げてその場をあとにする。ずっと視線で追われている事に気付かずに。
練習室に戻り，再び猛特訓。こんなにしごかれているのは俺くらいだ。まぁ，それだけ下手だってことなんだけど。実際，落第させられそうになったし。力持ってててどれだけホッとしたことか。それを玻紅璃さんに見られたのはまずかったけどさ。
「うん。よし！」
今までにない位力の入った褒め言葉。少ないけど，俺にとってはかなり嬉しい。
「ビリからトップのレベルだ。頑張ったな。」
えぇ！？まじで！？
「ありがとうございます！」
「なに，お前の頑張りが良かったんだ。これで気を抜くなよ。これからも精進だ。」
「はい！」
信じられないほど嬉しい。自分じゃ分かんなかったけど，かなり上達していたんだ。ラッキィ。

その日の夜。気分が良くて，葵さんに教えて貰ったバーに足を運んだ。２０歳になったお祝いに教えてくれた店で，時々一緒に来る。２０歳代があまりいないバーなのでちょっと浮いてしまうが，味のよさを考えればここを離れたくない。そんな店だ。
ゴッドチャイルドを少しずつ飲み，時間を過ごす。
３０分ほどたった頃だろうか。奇遇にも，葵が入ってきた。重そうな様子はなく，チェロを持って俺の隣に座る。
「侑も来ていたんですね。」
「ええ。飲みたくなったんで。」
葵は目を開く。
「嫌な事でもあったんですか？」
俺は，思わず鼻で笑った。自棄酒するよーな俺じゃねーよ。

「トランペットの腕が上がて，嬉しかっただけ。初めて教授に褒められたもんだから。ガキっすよね，俺。」
自分で言っておきながら，自分の幼さを感じてちょっと恥ずかしかった。だが，葵は優しく微笑んだ。
「上達して良かったですね。侑は頑張っていたから。」
「葵さんは十分上手いじゃないか。そういう葵さんは何で来たんだ？」
軽くため息をつき，キールに口を付ける。
「知らない女性にチェロについて色々聞かれてうんざりしたんです。いわゆる自棄酒ですよ。」
ん？俺の記憶に何か引っかかった。
女性だ。
昼に会った女性。なんとなく寒かった。
「自棄酒っすか。よければ付き合いますよ？」
なんて冗談を言ってみる。前の俺だったらこんなこと絶対言わなかったね。褒められるって，人を変えるもんだな。
「珍しいですね。じゃあ付き合ってもらいましょうか。」
そう言って，葵はグラスを掲げた。

楽器を持った男性2人がカクテルを飲む姿を，じっと見ていた女性がいた。マンハッタンを口に付け，微笑む。
赤いカクテルに妖しく写っていた。

New Moon

空は暗く，都市の明かりで見えにくい小さな星が，精一杯の光を出している。その中で，夏の大三角がひときわ目立って見えた。それから視線をはずし，ヴァイオリンケースをゆっくりと開ける。

生暖かい風が頬を撫でる。昼間の熱の余韻が纏いつくように感じて，鬱陶しいわ。

弾く時としては，不釣合いな時。

弦も弓も，しけって重い。

それでも私はヴァイオリンを肩に当て，調律をする。悪くないわね。

私はゆっくりと弓を引いた。

暑さを忘れるような，浮遊感漂う音色。大音量ではないのに，当たり一面に響き渡る。

それがまた，妖しくも，美しい。

しばらくして，１０代の女性が来た。最近はオヤジばかりだったので，珍しいと思いつつ彼女の顔を見る。頭の軽そうな感じ。

「あなたはどういった御用件で？」

「信じらんねーよ。」

言葉遣いもなってないのね。うざったいわ。

「だから？」

嫌な気持ちが大っぴらに出ている声に，彼女は少しだけすくむ。面倒臭いわね，まったく。

私は緩やかな曲調を弾く。だが，彼女には通じなかった。

怒鳴られて育って来た子のようだ。そこで，激情な曲をきつく弾いた。それはもう，脅すような雰囲気で。すると，最初はビクッと身を縮めた彼女が焦って話し始めた。

「だって，イキナリ別れるとか言うんだよ。しかも，新しい彼女と寝ながら！！信じらんないよ！なんであんな年増に寝取られなきゃ

ならないわけ！？死んで祟ってやる！」
あーあ，なんか嫌な感じ。寝取られて悔しいからって死ぬの？くだらないわ。
さっさと落とそうかしら。
「年増の女性に彼を取られたのが嫌だから死ぬの？」
呆れ返った口調に，彼女はカッとした。
「悪い！？なんで私が別れなきゃならないのよ？あんな年増のどこがいいわけ！？」
だから死ぬの？あーもう，馬鹿な生き方ね。
さっさとケリを付けてあげるか。ヴァイオリンを弾く手を止め，弓でマンションの端を指す。
「さっさと落ちなさいよ。死んで祟るんでしょ？何迷っているの？」
冷たく，あっさりと言われ，彼女は堅く口をつぐんだ。
これだけ喚いているのに，肝心なところでは踏み込めないのね。だらしない。さっきの意気込みはどうしたのよ？
世話が焼けるわね。
再び弦に弓をあて，息を深く吸う。そして，滑らせるように手を引く。
その瞬間，何かが引っかかった。
背筋がざわざわとする。ひんやりしたものが這って行ったように。
嫌な予感。
強い何かを感じ，手を下ろす。
私は急いでヴァイオリンをしまい，屋上の入り口階段を目指す。
「ねぇ！なんで行っちゃうのよ！？」
忌々しい。なんであんたなんかに付き合わなきゃならないの。
「この先は自分で決めることでしてよ。他人なんかを当てにして甘えるんじゃないわ。さっさと落ちればいいじゃない。」
漂って来るどす黒いい雰囲気が強くなるにつれ，自分の口調も切り刻むような冷たさがあった。それを身に沁みた彼女は絶句する。
口も身体も動かせぬ彼女を尻目に，私はその場を去った。

先程までいたマンションの前の公園に来て，深呼吸をする。ここなら大丈夫。

さっきのはなんだったのかしら？ふと気になって屋上を見上げる。うざったい彼女が屋上の端に危なそうに立っているのが見えた。いざって時は，震えるみたいね。私があのまま弾いていれば，夢見心地で落ちれたのに。かわいそうにね。

あと2歩ほどで落ちる所まで来た彼女。どれだけ時間を掛ければいいのかしら？

そう思った瞬間。人影が見えた。

彼女以外の人影が。

そして，彼女はまっ逆さまに落ちて行った。

何，今の！？

自分の手で下したのならこんな思いはしない。むしろ清々としているわ。でも，今のは明らかにおかしいじゃない。

翌日，新聞に自殺の記事が載った。もちろん，あの彼女だ。失恋の末に，なんていう題が付けられていた。

それが間違えということは，私しか知らない。

影法師

玲が掠夜の応接間の扉を開けると，すでにそこには醒と侑が来ていた。いつになく刺々しい雰囲気がおおっぴらに出ていることに気づいた3人は，伺うように彼女を見つめる。

その視線に気づいた玲は，ため息をついて席に着いた。そして，愛用のヴァイオリンを足元に置き，出されたグラスを手にする。いつものように掠夜が赤ワインを注ぐ。

「今日はずいぶんと荒れているな。」

「失礼よ，掠夜。」

肩を竦める掠夜。

「事実を言って怒られるとは思わなかったね。」

すげなく返され，玲は眉をひそめる。その様子を見て，醒がグラスを持って玲の横に座った。

「どうした，お前らしくもない。」

空いた片手を伸ばし，玲の肩を撫で，頭に触れる。人を落ち着かせる手つきであった。見ていた掠夜はごく普通にしていたが，侑は大人な香りを感じて目を背けたがっていた。

玲はむっつりしていた表情を次第に和らげ，醒にもたれる。

「これよ。」

玲が差し出したのは新聞の切り抜き。

あの，玲が仕留めようと思っていた彼女の自殺が書かれたものだ。もちろん，真相は自殺ではない。

「これがどうした？」

「私の獲物だったのよ。」

「先を越されたって言いたいのか？」

断固としてフルフルと首を振る。

「対面して，ヴァイオリンの音色も聞かせてやったわ。でもね，最後の最後って言うときに寒気がして。」

それでその場を離れ，下で様子を見ていた話を続ける。彼女が落ちたことを。そして，何より言いたかった，落ちる寸前に見た陰のこと。
「人影？」
強くうなずく玲。
「そう。間違いなくてよ。明らかにその陰の人が落としていたわね。」
男性3人の表情が渋る。
誰がその彼女を押したのか。
何のために？
なぜ，仕留める直前に現れたのか。
玲は両腕をさする。思い出しただけでも，少し寒気がよみがえる。
「すっごく寒く感じたのよ。嫌な感じだったわ。」
「寒くて嫌な感じ…見えた人影って女性っぽかった？」
目を大きく開いて侑を見る。見られた方はドキリとして3人を見回す。
「あ，いや，あの…。」
「どうしたのよ？何かあったわけ？」
3人の視線，とりわけ玲の射るような視線に負け，侑は口を開いた。
「大学のカフェで相席になった人が来たとき，そんな感じがしたんだ。だから，女性かどうか気になって……。」
掠夜は眉をひそめる。
何かがおかしい。
自分たちは人と違う力を持っている。
白よりも，黒に近い，真っ当ではない力を。
その自分たちが感じる感覚は，やはり人と違う。
何かが琴線に触れている。
漠然とする何かを感じるのだが，それが何であるのか，何を意味するのか，全く分からない。
「2人が同じような気を感じるのも，気になるな。」

「そうだな。」
「まさか，交響楽団の事故の犯人とか？」
「侑，先走り過ぎだ。」
醒に釘を打たれ，少しむくれる侑。
「でも，最近の怪しいことって言ったら，それしかないじゃないか。」
「だとしても，安易に繋げるもんじゃない。白黒はっきししていないだろ。」
大人の忠告。侑はしぶしぶうなずく。
「掠夜はどうよ？」
「その人物は明らかに怪しいと思う。ただ，同一人物かどうかは分からない。下手に手を出さない方がいいね。」
「それが妥当って言いたいの？」
あの寒気を身に感じた玲にとっては物足りない気分なのだろう。だが，掠夜はそれを気づきながらもうなずいた。
「疑心暗鬼だよ。」
闇を含んだ声。それは，踏み込むなという意味が込められているような気がする声であった。
　気分を変えるためにも，掠夜はにっこりと微笑んで見せた。
「日本酒を用意しようか。何がいい？」
「越の寒梅。」
即座に返されたのに苦笑しつつも，注文通り用意する。
　出された越の寒梅を多めに一口飲んでほっと息を吐く玲。度数の高い日本酒がのどを通し，身体を熱くする。そこでようやく今の状況にも目を向けることが出来た。
「あ。悪いわね，醒。」
もたれかかっていた自分の身体を起こす。
「いや，落ち着いたみたいだな。」
「ようやくね。参ったわ，もう。」
侑が苦笑をもらす。

「玲さんと葵さんもお似合いだけど，醒さんともお似合いなんだな。」
「まぁ，ありがとう。でも，この人ったら私に目もくれてくれないのよ。」
醒のネクタイを引っ張って言う。
「おい，首を絞める気か？」
「こんなことでは死なないくせに，何をおっしゃるの？」
「そういう問題じゃないだろ。それから，玲は俺みたいなオヤジが嫌いなのに何を言っているんだ。」
「あら，真に受けちゃったの？冗談に決まっているじゃない。」
「冗談じゃないと困るね。」
2人はそれから飽きもせず，あーだこーだ言い合っていた。
掠夜は2人のやり取りにあきれつつ，侑に視線を向ける。
「侑は教授にベストだって言われたらしいね。」
「ああ。あれ？俺，話したっけ？」
「葵から聞いてね。それはおめでとう。」
「まぁ，駆け出しだから頑張らないと置いていかれるだけだし。みんなに負けてらんねーし。」
貪欲な向上心に掠夜は微笑む。
「腕が上がれば力も強まる。いいことさ。」
「だから，玻紅璃さんにピアノを教えているのか？」
鋭い突っ込まれように，豆鉄砲を食らったような表情を浮かべる掠夜。その顔を見て，侑はあはは，と明るく笑う。
「図星？掠夜さんが表情崩したの初めて見た気がする。」
「いや，図星ではないが驚いたね。」
思わず苦笑をもらす。
「ピアノを教えなくても，玻紅璃の力は結構強いよ。勘がよくあたるから，甘く見てられないしね。」
「面白いっすね，掠夜さんと玻紅璃さんの関係。」
「そうだな。それは確かに思うよ。」

「私も思いますけれどね。」
いきなり本人の声が混ざったものだから，掠夜と侑は固まる。それを見て笑みを漏らす3人。
「こんばんは。今日は遅くなっちゃってすいません。」
「いいえ。どうぞ座ったら？」
いつも通り掠夜の横に座り，玲から酒盃を受け取る。なみなみと注いでもらった日本酒に軽く口をつけ，ほっと一息をつく。
玲と侑は自分が感じたあの奇妙な寒気のことを玻紅璃に話して，勘はどうか聞いてみたかったのだが，掠夜が無言のうちにそれを制していた。あまりに短絡的に繋げるのを良しとしないのは醒も同じで，その話題には触れさせず，自分の手柄の話を続けた。

とあるコンサート会場で椅子のセッティングし終え，上から眺める人がいた。あたりに人はいなく，その人だけが会場に残っていた。それは，スタッフでセッティングした椅子の位置を変えたかったからである。
「これでよし。」
少しずらした椅子を見て，ニヤリと笑む。
「これで明日は……。」
明日起こりうることを頭で描くと，笑みが止まらない。
「楽しみね。」
そう呟くと，コツコツとヒールの音を響かせてその場を去っていった。

Boad

醒は冷めかけたコーヒーをすすった。主に紅茶を扱う喫茶店の割りにはコクがあって美味しいコーヒーをのどに通し，時計を見る。約束の時間まであと１０分。

ふと視線を上げて入り口を見ると，着飾った彼女が来たのが分かった。軽く手を上げると彼女も手を上げ，微笑みながらテーブルに駆け寄ってきた。

「遅くなってすいません。」

「いや。まだ時間前だよ。」

軽く首を振りながらメニューを渡す。さっと目を通し，近くを通ったウェイトレスに注文をしてからきちんと座り直した。

「綺麗だね。」

「そんな。」

彼女・玻紅璃は照れて首を振る。その表情が可愛らしい。

「いつもと雰囲気が違うから，驚いたよ。」

「醒さんって，口がお上手ですね。」

「ん？本当のことを言っただけだよ。」

「それは…ありがとうございます。」

注文して来たチャイティーを飲み，照れながらお礼を言う。

「黒のワンピースって大人な女性が着るって感じがするから，なんか恥ずかしいんですよ。」

「玻紅璃だって立派な大人だと思うけどね。」

「まだまだお子様ですよー。今日は醒さんがコンサートに連れて行ってくれるからこれを着たんです。」

醒は苦笑する。

「おじさんって言いたいのか？」

「やだ，そんなつもりじゃないですよ。醒さんの横に立つから背伸びしようと思ったんです。醒さんって紳士的なんですから。」

玻紅璃の偽りのないコメントに，醒は人を落ち着かせるような表情を浮かべる。
「十分淑女だよ。」
「中身が伴っていないですけれどね。」
大人な女性の外見と幼い感じの内面のギャップが面白く，醒は思わず笑みを漏らした。
　開場の時間となったので喫茶店を出て，アートホールに向かう。そのとき，玻紅璃は思いつきで醒の腕と組んだ。組まれた方は慌てて玻紅璃を見る。
「おい。」
「だめですか？」
背の低い玻紅璃による，無意識の上目遣いに醒は呆れてしまう。
「そういうわけじゃないが。まぁ，今夜はいいとするか。」
「傍から見れば，お似合いな２人に見えるかしら？」
「不倫と思われるかもよ？２０歳以上離れているしね。」
「こんなに堂々とした不倫は出来ないでしょ。」
「それもそうだが。なんか掠夜に悪いな。」
玻紅璃は目を丸くする。
「なんでですか？」
「掠夜はお前を気に入っているからな。なんで付き合わないんだ？」
首をかしげる。
「なんででしょうね。この関係がいいみたいです。」
「面白い２人だ。」
玻紅璃はふふっと軽く笑う。
「私自身もよく分からない関係で戸惑うことはあるんですけれどね。それより，今日はありがとうございます。」
チェリストの葵が出るコンサートを醒から誘われたことに，玻紅璃は嬉しい笑みを浮かべながらお礼を言った。
「構わないよ。運良くチケットが手に入ったからね。」
傍から見れば親子とも恋人同士とも見れない状態だが，２人仲良く

会場に入って席に着く。S席と言うこともあり，舞台がよく見える。舞台上ではすでに3，4人音ならしをしていた。
「始まる前の空気も好きなんですよ。チューニングしている時から，わくわくしちゃって。」
「そうだな。」
パンフレットを見ながらしばし話しているうちに，開演となった。
今夜の曲目はドヴォルザーク作曲交響楽9番ホ短調作品95『新世界より』である。普段からクラシックに慣れている2人ではあるが，生の演奏は格別。夢中になって聴き入る。
だが，しばらくたって，玻紅璃の様子がおかしくなった。かすかに震えている。不審に思った醒は彼女の手を握り，顔色を窺う。それに気づいて彼を見るが，すぐに舞台へ視線を向けた。
「休憩になったら言います。」
その声も，かすかに震えていた。
休憩になり，玻紅璃は何も言わずに醒の手を引いて誰もいない廊下に出た。そこでようやくひと息をつく。
「どうした？」
「感じませんでしたか？音全体に力を。」
醒は眉をひそめる。
「いや。舞台がちょっと歪んで見える気はするが，ほかにはなにも。」
「これが終わったら，きっと何人かは自殺します。演奏者だって，殺されるかも……。」
不穏な空気。玻紅璃はそれから逃れたいように，深呼吸を繰り返した。
「誰かが操っているってことか？」
「そんな感じです。でも，楽器じゃないんですよ。音全体に感じるんです。」
「そうか。うん……おいで。」
今度は醒が玻紅璃の手を引き，舞台袖まで来た。そこに入るドアに

はもちろん警備としてドアマンがいたが，醒の伝手でこっそり入れてもらったのだ。
「葵は…？」
舞台袖に集まっていた交響楽団員の合間を縫って彼に近づく。気づいた葵は，驚いた表情をした。
「どうしたんですか？」
「すまんな。ちょっと。」
2人は彼を隅に連れて行き，感じた力のことを伝えた。
「いったい誰が？」
「誰かは分からない。ただ，音全体に感じるそうだ。玻紅璃，なんか感じるか？」
玻紅璃はじーっと誰もいない舞台を見つめる。譜面台と椅子が並べられているだけで，特に変わった様子はない。
だが，見える人には見える。
見えない目で。
黒い力の目で。
玻紅璃は少し悩んだようだがうなずき，2人に向いた。
「椅子と譜面台の位置がおかしいです。」
「そんなはずは。僕たちが昨日並べて，今日確認しているんですよ。」
すかさず言い返す葵に，玻紅璃はゆっくりと首を振った。
「ほんのわずかですが，ずらされている感じがします。そこに座って譜面を見て演奏をすると，聴いた人の脳に刻まれて，きっと……。」
「それは玻紅璃の勘か？」
確信は持てないがうなずく。
「いったい誰がしたんだか…。」
「それはあとだ。なんとかしないと，おれたちも被害を受けるかもしれないからな。」
「でも，どうするんですか？」

「んー，そうだなぁ……。」
醒はあごに手を当て，考え込む。数十秒後，頭の中で考えたことに納得したのか2度うなずき，2人を見た。
「きっと1つでも力がほころびれば，効果は無くなるだろう。葵，席に着くまでにいくつかの椅子や譜面台を自然にずらしてくれ。」
この要望に，葵は目を丸くした。
「自然にって…難しいですよ！？幕はないし，入場するのにバタバタしていたら目立つし，怪しいです。」
「だから，自然にするんだよ。そこは葵の演技力次第だな。」
面倒なことを押し付けられ，呆れ返る葵。
「本当にするんですか？」
「おれたちは死にたくないしね。気づかない程度に俺も歌って気を紛らわしておくよ。」
「本当にしてくれるんですか？」
醒は安心させるように微笑み，強くうなずいた。
「分かりました。」
「葵さん，あの，弾いている時にちょっと出来たらこの力を吸い取ってみてください。少しは弱まると思いますし。」
玻紅璃のお願いに，これまた葵は呆れ返った。
「難題を吹っかけるんですね。分かりました，何とかしてみましょう。とりあえず，もう席に戻って下さい。時間だし，スタッフが困っているじゃないですか。」
2人が周囲に視線を向けると，早く出て行って欲しい眼差しを強く向けられてしまった。明らかに関係者以外の存在に，ほとほと困っていたようだ。彼らに頭を軽く下げ，葵の肩を応援の意味で叩いてその場から出た。
　席に戻るとちょうど休憩が終わったアナウンスが流れた。醒は声にならない，力の歌で周囲の意識を舞台からそらして葵のバックアップをする。
　玻紅璃だけが見守る中，葵はいくつかの椅子を少しずつずらし，

席に着いてからも自分の椅子と周囲の譜面台を整える振りをしながらほんの少しずらしていた。
これでよし。
その後，お客の心を湧かせる音楽が奏でられた。しんと静まり返った会場に波紋する音色が心地よく，誰もが聴き惚れている。
醒は玻紅璃の手を握って様子を確かめる。先ほどとは違ってドキッとした玻紅璃であったが，優しく握り返した。
もう大丈夫，と意味を込めて。

この演奏を舞台袖で聴いていた女性は，自分の手が白くなるほど強く握り締めていた。
自分の仕掛けた罠がほころんだことに。
力を消されたことに。
見破られたことに。
それらが悔しくて堪らなく，握り締めた手は怒りで震えていた。
「どうかしました？」
部下に声を掛けられ，ハッとして我に返る。それと同時に微笑を向けた。
「大丈夫よ。演奏があまりに素敵だったから。」
「本当にここの交響楽団はいいですよね。私，好きです。」
「そうね。私も好きだわ。」
獲物としてね。そう心で付け加えていた。
次に心を占めていたのは，ただ１つ。
見破った人を手に入れたい。

Chain

コンサート後の打ち上げに出て，呆れ返ってしまった。人にではなく，自分に。

前々から睨んでいた人がいる。

彼がいる。

私はコントラバス奏者と話している彼を遠くからじっと見つめた。あのとき，困り果てるまで聞かれてうんざりしていた表情とはまったく違う，達成感が滲み出た晴れ晴れとした表情が眩しく感じる。

だが，私はこのとき気づいていなかった。彼が疲れきっていたことを。同時に，彼も私に気づかなかった。

私は何気ない様子を装って声を掛けた。

「お疲れ様でした。あのときはありがとうございました。」

そう切り出されて一瞬目を丸くしたが，すぐに思い出して苦笑をもらした。

「いいえ，どういたしまして。ここのスタッフだったんですね。」

「ええ。急にこっちへ部署を変えられてしまったので，音楽のことを身に付けようと焦っていたんですよ。聞いておいて良かったです。あのときは有名な葵さんとは知らず，失礼致しました。」

神妙に頭を下げて見せると，葵は焦って手を振った。

「有名だなんて…。僕はまだまだですよ。」

「そーだな。まだひよっこだよな。」

コントラバス奏者が葵の頭をがしがしとなでぐりまわしながら言った。それに思わず笑みをもらす。

「あら。でも，コンクールでは何度も優勝なさっているのでしょう？」

「だとしても経験値はまだ低いからね。でも，伸びるぜ，こいつは。」

「そうでしょうね。期待してます。」

微笑んで頭を下げ，その場をそっと離れる。
おかしい。前に話しかけたときは，うっすらと感じていたのに。
今はまったくの白。
私の勘違い？
そんなはずはない。だって彼は接点の全くない侑と一緒にいたもの。無関係なはずはない。
そして，この間のヴァイオリニストとも……。

アートホールから出た2人は，その足で掠夜の家に向かった。
「やっぱり玻紅璃の勘は凄いね。」
「いいえ。葵さんと醒さんのお陰ですよ。」
「でも，最初に気づいたのはお前だからな。震えていたときはびっくりしたよ。」
玻紅璃は明るく笑って醒の腕にすがりつく。
「手を握っていただいて，だいぶ安心したんですよ。ちょっとドキドキしちゃったけれど。ありがとうございました。」
「いいや。」
恋人とは違う，ほんわかした空気を漂わせていた。
掠夜の応接間に行くと，すでに玲と侑が来ていた。2人の組み合わせに驚いていたが，1番驚いたのは掠夜であった。
「こんばんは。」
「なんだ，掠夜。その顔は。」
ニヤニヤして醒が聞くと，ハッとして表情を隠す掠夜。その様子がたまらなく面白かったのか，玲は笑い出す。
「あんたにもそういう感情があったのね。おっかし～。」
「玲……。」
「掠夜って結構独占欲強いんだな。」
侑も肩を震わせて笑っている。普段すましたような，静かな表情しか知らない人にとっては，笑える状況であった。本人にとっては少し不機嫌になる状況ではあったが，いつも通りワインと日本酒を持

ってこさせ，2人をもてなした。
掠夜から始まり，玲，醒，玻紅璃，の順で手柄を語った。最後に侑の手柄を話したのだが，状況を聞いて4人は眉をひそめた。
「コンサートのオーディションでやるとは，結構大胆だな。」
顔の割には口調が笑っているが，それでもいぶかしんでいるのが滲み出ている。
「ワーストからベストの腕前と言われたんだ。力なんて使わなくても，受かるだろ。」
「それに，周囲の目が多いときは少し控えなさい。ボロが出ても，知らなくてよ。」
「私に見られちゃったこともあるんだから，気をつけてくださいよ。」
4人4様のコメントに，侑は困った表情を浮かべた。
「平気っすよ。心配性だなぁ。」
（前はもっと大人数の前で使ったんだけどね。）
「玻紅璃さんのときはちょっと油断してたけど，大丈夫っすよ。」
「まぁ腕前が上がってきたことだし，コントロールは自分でしろよ。」
醒が親心を持ってまとめた。
5人の話が終わり，ようやくコンサートの出来事を3人に話した。玻紅璃が感じたこと，醒が見た舞台のこと，葵の対処など，詳しく話した。聞いている3人は始め，にわかに信じがたいような表情を浮かべたが，玻紅璃の勘があるだけに重く受け止めていた。
「椅子と譜面台の位置で力を出すのね。まるで魔方陣みたいな感じ。」
「でも，置いたのは団員だろ。葵さんに気づかれないように置けるかな？」
「力があれば，造作もないことだよ。それに，団員が置いたあとに動かした可能性だってある。まったく，何が目的なんだか。」
醒は肩をすくめて見せる。

「それは分からないね。誰がやったのかも分からないし。ただ，今回のことで分かったことはあるぜ。」
「なんですか？」
「前に起きた，地方交響楽団の事件。あれは楽器じゃなくて，今回と同じことだろう。」
2ヶ月前の，あの不可解な事件が蘇る。
「あの被害者数なら，楽器だとかなり無理がある。ほかの楽器の音を巻き込んで力にするのも，奏者が持たないだろう。数人と手を組むというのも考えにくい。だけど，今回みたいに椅子と譜面台をセッティングするだけで力を発揮するのなら，納得出来るな。」
4人がうなずく。
「醒さん。そうしたら，この間と今回に関わっている人が犯人ってことですよね？」
「そうなるね。まぁ，楽団が違うから奏者じゃないことはハッキリしたな。」
「指揮者かスタッフってことよね。ふふ，面白くなってきたじゃない。」
玲が妖しく微笑む。彼女は今回の件にいたく興味を引かれたようだ。
「きっと力を見破られて心底腹が立っているだろうね。次にどう出るのか，見物だな。」
掠夜も陰の入った笑みを浮かべた。侑はそんな2人を見て，少し呆れていた。
「確かに気になるけど，俺たちは俺たちだろ。邪魔さえしてこなけりゃいいや。」
「結構さっぱりしているんだな，侑は。」
「しつこい男に見える？」
からかい口調で返すと，玻紅璃が笑い出した。
「なんだか普段話していない親子が，お互いに驚いているみたいですね。」
醒は思い切り顔をしかめる。

「親子って…こんな息子はいやだぞ。」
「こっちだってこんな親父は願い下げっすよ。」
「ふふ，今日は醒さんの意外な1面を見た感じで楽しいですね。」
それを聞いて，今度は掠夜が顔をしかめた。
「ずいぶんと楽しんできたんだな。」
「葵さんの演奏を聴けてすっごく良かったし，醒さんとの話も面白かったんですよ。」
「ふ～ん。」
明らかに不機嫌になる掠夜。だが，それに気づかず玻紅璃はニコニコと微笑んでいた。
　見ていた3人はそろそろと腰を上げる。
「もう帰ろっかな。」
「そうだな。明日は打ち合わせが入っていたし。」
「私も明日は朝早いのよ。じゃ，失礼するわね，掠夜と玻紅璃。」
そそくさと帰り支度をして立つ3人を，玻紅璃は目を丸くして見上げた。
「終電までもう少しあるのに。今日はお早いんですね。」
「ふふ，そうね。」
「とばっちりも食いたくないしな。じゃあ，またな。」
「玻紅璃さん，あとをお願いします。」
「あとって…？」
疑問符を浮かべながら玻紅璃は3人を見送った。
「みんな今日は早いですねぇ。」
「玻紅璃。」
いつになく固い声の彼を見上げる。
「なんですか？」
返事をせず，軽くキスを送った掠夜。されたほうは驚きだ。
「どうしたんですか？」
「醒とずいぶん仲良くなったんだな。」
これを言われ，ようやく玻紅璃にも感じた。

「そういうのは，付き合っている恋人に言うものだと思いますよ。」
掠夜はため息をつく。確かにそうかもしれない。実際掠夜と玻紅璃は付き合っていない。自分の気持ちを伝えたこともない。こういう感情を抱くのもおかしい。でも，ぶつけたくて仕方がなかった。
「そうだけど。嫌か？」
玻紅璃は首をかしげ，それから微笑みながら掠夜を見た。
「嫌ではないですよ。」
「じゃあ遠慮なく。」
すっぽりと自分の腕の中に玻紅璃を収め，ぎゅっとする。
「今日は黒のワンピースで，大人っぽいな。」
「格好だけですけれどね。」
「似合っているよ。」
そう言い，軽く彼女の耳をついばんだ。

Frame

アートホールでのコンサートが終わったその次の日から，私は力を使う者を，特に力を見破った者を捜すようになった。自分も持っているだけに目星はつけやすいのだが，そう簡単に明かす人なんかいない。いたとしても興味は湧かないだろう。むしろ，黒い雰囲気を出さない人を捕まえたかった。そちらの方が，何倍にも興味を持てた。

トランペッターの侑はたまたま見つけたのであった。自分の中にある黒い力に戸惑っていた頃であったが，彼を見て，人に使う事によって快感を得ることを知った。

ふとそれを思い出し，私は侑の身辺から洗っていった。そこからチェリストの葵に繋がり，さらにはヴァイオリニストの玲にも繋がった。そして，新しい人にも。

その人はあのコンサートにも来ていた。

写真を1枚1枚丁寧に見る。

まず1枚目は20歳の頃の彼。こげ茶のくせっ毛が特徴的な，身長170ちょいの生意気そうな侑。音大に入れるくらいだから裕福な家庭なのか，着ている服は年齢の割にはいい品物であった。

初めて力を目にしたのは，侑が公園で練習をしていたときだ。だが，ただの練習ではない。遊んでいる人の気を引き，おひねりをたくさん出すように仕向けていた。あの演奏では貰えるはずはないし，迷惑と思われるはずだ。それが，彼の用意した箱には山のようにおひねりが重なっていた。

自分の力とは違う使い方を目にして，チェックを入れたのだ。

2枚目の写真は，チェロを演奏している葵が写っていた。くたびれたシャツにジーンズというラフな格好で弾いているが，演奏は格

別であったのを思い出す。２０代後半に向けての大人らしさが醸し出てきているが，どことなく幼さも感じた。
彼は演奏し始めた頃，ひどく疲れているようであった。弓を引く力も，弦を押さえる手も弱々しかった。しかし，だんだんと活気が満ちてきたのだ。そして，逆に近くにいた高齢の人が急に弱り，倒れた。生気を吸っていたのだと気づいたのは，葵が片付けてそそくさと走り出したとき。
他人から奪う力を見せ付けられ，その力に魅了された。自分には出来ないことだけに，うらやましくも感じたものだ。
３枚目の写真は，侑と葵がバーで飲んでいる様子。隠し撮りだから少しピントがずれてしまっているが，確かに２人であった。たまたま隣の席にいた，という雰囲気ではなく，凄く親しく打ち解けた様子を不思議に思ったものである。
楽団や大学など，様々な点から彼らの接点を探したが見当たらなかった。それで辿り着いた結果は，力。
４枚目の写真は葵と玲がバーで飲んでいる様子。これも隠し撮りであるがピントはずれておらず，はっきりと２人だと見えた。
始めは恋人かと思っていた。しかし，雰囲気がどう見ても甘くない。楽団仲間と思ってあまり気にせずにいたが，彼女が大事そうに置いているヴァイオリンを見てふと気づいた。侑も葵も楽器で力を出していた。
ならば彼女も同等か。
その直感は当たった。
５枚目の写真は玲が写っていた。３０代前半の彼女は綺麗と言うより，可愛らしい顔つきであった。背も低く，おじ様受けするような雰囲気であった。
だが，ヴァイオリンを弾いている姿はそこからかけ離れている。底冷えするような目に，見下す表情を浮かべていた。あの力を使っているときの姿は，正視しづらいものがある。それだけ強い力であったので，接してみたくなった。

最後の６枚目。そこには玲と一緒に歩く男性が写っていた。醒だ。１８０センチほどの長身。４０代という落ち着いた雰囲気を醸し出していた。年齢相応のかっこよさがにじみ出ている。
彼の実力がいかほどなのかは知らない。ただ，なめてかかったら倍返しをされる雰囲気はある。
シャッターを押したあとに気づかれたのか，こっちを数秒見ていたのを思い出す。あれは気まぐれではなく，気づいていたのだろう。だが，接触してくる事はなかった。
６枚の写真を見て満足に浸る。これほどまでに情報を引き出せた侑に感謝し，力を持つ者に早く会いたかった。
とりわけ醒に会いたかった。あのコンサートにいたので，力を見破った者だと思われる人の最有力候補なのだ。いや，彼が見破ったのだろう。そう直感が働きかけていた。
写真をフェンディーのバッグにしまい，視線をカウンターに座っている侑と葵と玲に向けた。前の私ならば，どこに接点があるのだろうと不思議に思っていただろう。いや，気にも掛けなかっただろう。だが，もう黒の力を見抜いている。その接点を持つ彼らにほくそ笑む。
他人にはない，黒い力を持つ者。
これを操れたらどんなに楽しいことか。
下に置いて手足とすれば，どれだけ自分の力が増幅することか。
想像すれば想像するほど，欲しくてたまらなくなっていた。
マイタイをのどに通し，ひたすら彼らを見る。持っている力が強いだけに，その力を隠すのも上手い。かすかに力の目を凝らしてみても，薄ぼんやりとしていてよく分からない。
本物という事を実感し，ますます欲しくなる。
いや，欲しいのではもう済まない。
手に入れる。
見破った人だけでなく，周りの人も。
それだけの事をこれからするつもり。楽しみね。

Crash

残暑の厳しい日々も終わりを告げ，初秋の風が街中を駆け抜けた。青々とした空も，今はどこかぼんやりと薄くなり，綿飴のような雲も消えた。鬱憤を晴らすような鋭い日差しから，柔らかい日差しになっている。

毎日変化はする。

某地方交響楽団の事件，アートホールでの事。それらからも時間はたっている。

その間にも起きていた。

名が売れ始めた作曲家の死。有名音楽評論家の自殺。ジャズブームを起こしたヴォーカルの大怪我。美人カルテットと噂されていた人たちの事故死。　片手では収まらないほどの事件が起きていた。

それもすべて音楽家が関わっている。

怪しいこと，この上ない。

だが，誰の仕業なのかは全く分からない。

日中の暑さがかげると，朝夕の気温はぐっと身体に沁みた。ひんやりとした風が頬を撫でる。醒は腕をさすり，そのついでに時計を覗く。このまま行けば８時には掠夜の家に着きそうだ。ただ，その前に気になることがあった。

ふと立ち止まり，くるっと１８０度振り返り，目的の人を見据える。年は４０近い。背は１６０ｃｍ以上あり，女性としては高い方であろう。高いヒールをコツコツと音立てて歩いていたが，見据えられて立ち止まる。

彼女も分かっているはずだ。だが，何も言わなかった。何かをする様子もなかった。

でも，密かに構えている。
醒は声にならない声を出して歌おうかと思った。だが，彼女の目的がなんなのかが気になった。
「何か御用ですか？」
「はい。」
意外にも彼女ははっきりとした声で返事をして来た。それも，恐れる様子もない。むしろ，待ち構えているハイエナの雰囲気だ。
「声楽家の方ですよね。いつもコンサートで拝見させて頂いております。」
「拝聴の間違えでは？」
皮肉を込めて言うと，彼女はクスクスと笑い出した。
「そうですわね。あなたの声をじっくりと聴かせて頂きましたわ。筋の通ったバリトンの声で，凄く好きなんです。」
「それはどうも。だが，それが御用とは思えませんが？」
「ふふ，分かっていらっしゃるのね。ずばり言わせて頂きますわ。あなたの声が欲しいんですの。」
言った内容は色気からかけ離れているが，艶容な笑みを浮かべながら言われると妙な感じであった。
だが，それに嵌る醒ではない。
「歌って聴かせる事は出来ても，そのものをあげる事は出来ませんね。出来たとしても，他人に譲る気など毛頭ない。」
「その声で稼いでいるから？」
「稼いでいる気はない。」
彼女は皮肉めいた表情を浮かべた。
「その声で幾人も騙しているくせに，よく言えたものね。」
「なんのことだか。そう言うあんたはずいぶんと派手にしているじゃないか。」
ピシリと音を立てるかのように表情が凍る。
「ま，関与する気はないけどね。失礼。」
醒は侮蔑の眼差しを彼女に投げつけ，掠夜の家に向かった。

いつも通りドアノッカーを叩きつけて入り，いつものように応接間のソファーに身を沈めた。
「なんだか疲れているな。」
ワインを注ぎながら掠夜が聞いた。醒は小さく息を吐き，それから一気に赤ワインを飲み干した。
「俺の力をどこからか知って，探りを入れられたんだよ。そう言う彼女も妖しい空気いっぱいだったがな。」
掠夜はニヤリと笑む。
「女性といられて嬉しかったんじゃないのか？」
茶々を入れる彼にむすっとした表情を向ける。
「玻紅璃みたいに可愛い子ならいいけどね。刺々しい高慢な雰囲気の女性はいらないね。」
「色々とありそうな女性だな。チェックしておきたいが…？」
チラリと醒を見ると，彼は肩をすくめた。
「また接触してきたら捕まえろってか？」
「いや，それは醒に任せる。」
掠夜は決して押し付けたりはしない。相手の出方次第で動き，相手の気持ちに合わせる。相手の領域には入ってこない。そういう点を知っているから，年長の醒も話していて苦にならないのだろう。
「まぁいいか。一応見ておくよ。」
そう言い，2杯目の赤ワインに口をつけた。
赤ワインからロゼに転向した頃，玻紅璃以外のメンバーが集まった。それぞれ好みのアルコールをのどに流し，掠夜お勧めのチーズなどを口にする。話題はやはり手柄だが，それよりも続いて起きている事件の事の方が割合を占めていた。
ロゼを飲みながら新聞を読んでいた醒が顰め面をした。不思議な記事に目が止まったのだ。見出しは，『コンサート後の集団自殺？』である。内容は，作曲家，またコンサートで披露するヴァイオリンの腕前も有名な河相ヤスユキのコンサートに行った４０名が帰り道，

あらゆる交通手段を使って自殺を図ったということ。
「妙だな。またか？」
醒が呟くと，隣に座っていた侑が記事を覗きこむ。
「何がですか？」
「これさ。」
トントンと示した所を読む。侑の眉間にしわが寄る。
「怪しいな。」
「どれでして？」
玲と葵も首を突っ込む。掠夜は口に付けていたグラスを置き，記事に群がるメンバーをチラリと見た。どの表情を見ても，解せないことが表れている。
「掠夜，読んでみろよ。」
醒に渡され，半ば仕方なく目を通す。彼は今，玻紅璃がなかなか来ないことに気を取られていた。だが，それは記事にすりかえられる。
「力か？」
「きっとね。でも，使ったのは河相ヤスユキとは限らないでしょ？」
５人の表情が引き締まる。
（一体誰が？）
誰の仕業なのか見当もつかないが，おそらくコンサートで演奏していた人だろう。
「怪しいな。」
侑のセリフを繰り返すと，音もなく応接間のドアが開かれた。玻紅璃かと思って視線を全員向けるが，そのまま硬直する。
彼女はそこにいなかった。
女性が立っていただけだ。３０代後半に見える女性は，微笑みながら全員を見回した。

Hand

ドアを開いた女性を知っていたのは3人。そして，名前まで知っているのは葵，1人のみであった。

「綾子さん！？」

私は驚いた声を発した葵に笑みを向ける。

「こんばんは。」

「何でここに…？」

「ええ，ちょっと。それから，醒さん，先程はどうも。」

柔らかく会釈してみせると，醒は探るような視線を向けた。

「どうぞこちらに。お客様を立たせたままでは申し訳ありませんから。」

掠夜が空いているソファーに誘う。誘導されながらも，私は置時計や燭台など興味があるように装って触っていった。

私はこの人と初めて会った。テレビや雑誌では見かけるが，実際に会うのは初めて。このメンバーの中にいるということは，彼もそうなのかしら。位置関係から見て，彼がナンバーワン，つまりトップに立つものと考えられる。でも，こんなに近いのにもかかわらず黒い感じがしない。

「ありがとうございますわ。」

営業用の笑顔を向けてお礼を言うと，掠夜は軽く微笑んだ。それがどことなく冷たい。それなのに感じない。

不思議そうに見上げる私に掠夜はグラスを渡してくれた。

「何がお好みですか？」

「好みを聞いてくださるなんて，お優しいんですね。でしたら白ワインを頂きたいですわ。」

希望通りに白ワインを注ぎ，またソファーに着く。その姿が優雅に見えた。

欲しい。

単純に私はそう思った。力関係なく，欲しくなった。
だが，まずは見破った人が欲しい。
「私は綾子と申します。インターホンがなかったものですから，勝手に上がってしまってすいません。」
「ドアノッカーに気づきませんでしたか？」
私は目を見張って掠夜を見る。
「気づかなかったです。それをすれば良かったんですね。」
だけど，本当は気づいていた。それを無視して無理やり入ったのだ。
「あんた，何しに来たんだ？」
侑が単刀直入に聞く。ひどく警戒しているわね。無理もないわ。大学のカフェで声を掛けていたからね。その人がこうして現れるとは思わないもの。
私はくすっと笑みを漏らす。
「取って食べようなんて思ってないから，安心して下さい。私はただ，あなたたちの力が欲しいだけ。」
「あら，音楽の才能をどうやって渡せというのかしら。」
高飛車に，たっぷりと嫌味を持って玲が言う。
癪に障るいい方ね。
「そうじゃなくてよ。黒い力を持っているでしょう。」
確信を得た言い方に，４人は少しだけ硬直する。騙そうと思えば騙せたはずだが，そこまで気が回らなかった。彼女から冷たさを感じ取っていたからだ。
だが，硬直しない者もいた。掠夜だ。掠夜は不思議そうな表情を浮かべ，首をかしげる。
「黒い力って，なんですか？」
私は眉をひそめる。本当に何にも知らない様子が広がっていて，上手く言い返せない。
それを見取ったのかどうかは分からないが，掠夜はまわりに説明を求める視線を向けた。だが，誰も言わなかった。
正確に言えば，言えなかった，である。

私の力で身動きを封じられたからね。
ふふっと鼻で笑い，優越心を持って5人の顔を見回した。
「アートホールではお世話になったわ，葵さんと醒さん。」
返答しようにも出来ない姿を見て，また笑みを漏らす。
「声にならない声で歌っていたでしょう。それを利用させてもらったわ。」
醒は視線をそらす。
確かに醒は歌っていた。綾子のやり方が気に食わず，動けなくしようと思って歌っていた。だが，それを逆手に取られてしまったのだ。
私は置く位置を変えただけで，逆手に取ったのだ。
舌打ちしようにも出来ない。もどかしさが醒の身体を駆け巡る。
「私の力は，物の位置と音楽によって作用するのよ。死にたくないのなら，私の下に入りなさい。」
侮蔑の視線をぶつけてくる4人。でも，ここでも掠夜だけが無関心にいた。
おかしいわね。彼は何を考えているのかしら。
私は不思議に思いながらも，置時計を少しだけずらす。すると，4人がほっとしたように息を吐いた。だが，身体はまだ動けない。話すことしか許されていない状態だ。
「貴女の下に入る？嫌だわ。絶対にね。」
「あら。貴女が落とすはずだった獲物を横取りしたのがそんなに嫌だったの？」
蔑んで言うと，玲の顔がカッと赤くなった。
「貴女だったのね…！」
「ええ。何か文句でも？貴女の力を見たかったから，あそこに行っただけよ。でも，途中で逃げちゃうんですもの。獲物が中途半端でかわいそうだから，代わりに押してあげただけじゃない。」
悪びれた様子は全くない。
「過ぎた事はどうでもよくてよ。さ，死ぬか私の下につくか決めて

頂戴。」
「誰がつくか！」
侑が怒りの声を上げる。その瞬間，虚空を見つめる羽目になった。
私が撃ったのだ。彼の額を。
サイレンサーを通して放たれた弾丸を受けた彼は崩れ落ちる。それを間近で見てしまった葵の顔が引きつる。
力を持っているくせに，他人の生気を奪っているくせに，弱いのね。
「綾子さん…！！」
搾り出すような声を掛けられたが，無視。こんなことで動揺しちゃ，黒い力を保持していられないわ。
「さぁ，貴方たちはどうするの？」
「あんたの目的は何だ？」
醒が静かに問う。侑の死を悼むわけでもなく，ただ，彼女の動向を気にしていた。
「私の目的？楽しければよくてよ。気に入らない人を排除したり，貴重なものや良いものを持っていたいの。そういう点は貴方たちとたいして変わらないと思うけど？」
「だったらてめぇ1人でやってりゃいいだろ。」
「今のままじゃ物足りないのよ。貴方たちを使いたいの。」
文字通り，使役したいのだ。私の力を使えば，彼らを意のままに操れる。もっともっと，自分のしたいように出来る。
だから欲しい。
醒はため息をつく。
「俺はあんたの下になんかつかねーよ。」
やぁね，まったく。
でも，彼の能力は魅力よ。もう少し様子を見なきゃ。
自分自身を静め，葵に目を向ける。彼は侑が死んだ事によって，殺された事によって，ひどく青褪めている。私を見上げる視線も震えるように怯えている。

「葵さん，貴方はどうかしら？私の下に付いた方が楽よ？」
「なぜ侑を？」
あーあ，要らない人間にそこまでこだわらないで欲しいわ。分からないの？反抗的な人がいても，役に立たないもの。
いいわ。葵の腕は惜しいけど，いらない。
私は引き金を引いた。ほとばしる弾丸が彼の胸を貫く。
あ，ちょっと血が飛び出ちゃったわね。アンティークもののいいソファーなのにもったいないことをしちゃったわ。
「私は本当に殺すからね。死にたくないでしょ？私の下につくとおっしゃい。」
威圧的な声をさせるが，醒も玲もきつく，鋭く睨み返す事しかしてこなかった。
良いものを持っているくせに，選択は間違えるのね。
なりふり構わず引き金を引く。それも，空になるまで。
４人がソファーに身を沈め，血を流す。
「おりこうさんなのは貴方？」
あまり視線を向けていなかった掠夜は普通に見返していた。人が死ぬ様をまざまざと見ているはずなのに，動揺してなかった。慌てる事もなく，ただ私を見ていた。
「貴方の下には今誰がついているんですか？」
静かな声で聞かれ，私は一瞬彼を見つめてしまった。ここまで正常にいられるのが不思議で仕方がない。
もしかしたら，１番使える人なのかもしれない。
私はニヤリと笑み，掠夜が注いでくれた白ワインに口をつけた。のどを通ると，甘い香りが広がった。
「誰でもいいじゃない。」
「質問を変えます。誰が貴方の上についているんですか？」
眉をひそめる。どういうつもりで聞いているのかしら？
「そんなこと，どうでもよくてよ。さ，貴方はどうするの？」
「でも，俺は黒い力なんて持っていませんよ。何ですか，それって

？」
「そうかしら？人が殺されるのを平然と見て，普通にしていられる人なんてそうそういないわ。持っているんでしょ？」
ここまで平気でいられるのなら，持っているはず。そう確信していた。
「本当の事を言ってちょうだい？」
甘えるような声で問われ，ここで初めて掠夜がふわりと醸し出した。見えない黒い風を。
「甘いな。」
掠夜の両手が振るわれる。
私は見惚れてしまった。それと同時に，身体の自由がきかなくなった。
そんな私の耳に流れ込んできた。

Skeleton

綾子の耳に入った音は，ピアノの音。曲はベートーヴェン作曲『テンペスト』第3楽章であった。『嵐』という題名だけに，曲調は激しい。

荒波がぶつかり合い，木々が横倒しになる。そんな強さを感じる音色であった。プロの腕前ではないことは明らかだが，惹きつけられる音。綾子は掠夜が普通に動ける事に気づかず，聞こえてくる音に気を取られていた。

だが，それはすぐにほかの事にすりかわった。

自分が確実に撃ち殺した醒，玲，葵，侑の身体から弾丸がポトリと抜け落ち，傷跡が消えたのだ。そして，頬に赤みが増し，ゆっくりと瞼が開いた。

（なぜ！？）

死んだ者が蘇る様を見せられ呆然としてしまう。慌てて我に返り，また撃ち殺すために拳銃を持ち上げようと力を込めた。だが，出来るわけがない。掠夜が見えないロープで締め付けているのだ。身動きが取れず，4人が生き返る様を見る羽目になった。

「うー，変な感じだ。」

侑が撃たれた額を撫でる。その横で醒は肩をもみ，硬直した身体をほぐす。

「やぁだ。服に血が付いちゃったじゃない。困るわ。」

「洗濯してもおちないでしょうね。」

拭き取って血が消える段階が過ぎてしまった服をもったいなく思ってため息をつく玲と葵。

「サンキュ，掠夜。」

「いや。玻紅璃だ。」

「そうね。」

「テンペストですよね。強い…。」

耳を澄ませばまだ聞こえるピアノの音色。最初から最後まで吹き荒ぶ雨のように，人の心の窓を叩きつけていた。
掠夜が片手を振ると，綾子は崩れるようにソファーに沈んだ。拘束を解いたのだ。
「なんて人たちよ…！！」
この言葉を聞いて，その場にいる全員が顔をしかめる。確かに，自分の持つ力が世間的には悪いとみなされることは自覚している。だが，その力を乱用して，挙句利用したいから同業者を扱き使おうとした人の口からは言って欲しくない。
「これでもまだ利用したいのか？」
呆れた声で言った醒を睨む。
「だから私は——」
「見捨てられたくないだけですよね？」
開けられたドアに視線が集まる。玻紅璃だ。４人を生き返らせただけに，ひどく疲労感を窺える。それでも彼女はしっかりと立って綾子を見据えた。
「あなたの力に目を付けた彼から見捨てられたくないんでしょ？」
ビクリと肩を震わせる綾子。図星の証拠だ。
「あなたの彼は記者。あなたが起こした一連の記事を書いていますよね。ゴシップ雑誌の売り上げを上げるために，あなたに頼んでいたんじゃないですか？」
「どうして？どうして分かったのよ？」
今の綾子は，始め見た強さも余裕も全くなかった。追い詰められた小動物のように，弱々しい。
「記事には必ず記者の名前が入ります。その９割が同じ名前でした。あとは勘です。」
「たったそれだけで？」
「あなたは全く私たちを知らない。知ろうともしてない。頭から私たちを丸めることしか考えていなかった。それは，彼に指図されていたからだと思います。私たちを知ろうとしていれば，‘下に付け

，なんて言えないはずですから。」
綾子は眉をひそめる。
「上に立てば，楽に操って力を使えるじゃない。」
「分かりませんか？私たちは対等に付き合っているんです。誰かが上に立つ事もなく，誰もが卑下する事もなく。命令することは絶対にしません。何かあるときは，頼むことしか出来ないんです。断られても，それは仕方ありませんから。」
それが私たちであると，全員が頷いて綾子を見る。
こうなれば，綾子の完敗である。
玻紅璃はゆっくりと綾子に近づき，泣き崩れる彼女の手から拳銃を取り上げ，肩を撫でた。
「彼に見捨てられたくない気持ちは分かります。でも，他人を消してまでするのはおかしいですよ。」
優しい言葉。だが，それは一切届かなかった。
「あんたなんかに分からないわよ！！」
綾子の荒んだ激しい気持ちをぶつけられ，伸ばしてきた手に首を掴まれそうになる玻紅璃。
しかし，その手は届かなかった。
綾子は虚空を見つめてソファーに倒れ込んだ。何が起こったのか分からなかった。分かったのは掠夜だけ。
指揮を振り，彼女の精神を破壊したのだ。
腕の振り具合で楽器を操る以外にも出来ることではあったが，これは極みに近いことであった。その証拠にひどく辛そうに息をしている。
「掠夜……。」
「その女をこの館から追い出してくれ。」
「ああ。だけど，お前…？」
駆け寄ろうとする醒の腕を掴む玻紅璃。
「私が弾いてきますから，早くその女性を。」
「そうか。じゃあ頼む。」

死んではいないが，魂をも抜き取られたような綾子を醒と葵で運び，玲と侑は応接間を片付けた。
その間に玻紅璃はグランドピアノまでなんとか行き，ベートーヴェン作曲『月光』の第2楽章を弾いていた。4人も生き返らせていただけに，弾く力は若干弱かったが，それでも掠夜の力を戻すには十分であった。
弾き終わると，玻紅璃はゆっくりと椅子から降りて床に伸びた。息は短く，汗も掻いている。そんな彼女を抱き上げ，ゆっくりとキスをしたのは掠夜だった。
「ありがとう，玻紅璃。」

Keep

目が覚めると，真っ先に目には言ったのは真紅のバラや雪のようなカスミソウであった。
手を伸ばして触ろうと思ったが，腕に力が全く入らない。腕どころか，身体に力が入らない。力を使い過ぎたのは自覚していたが，ここまで気だるくなるとは思わなかった。
この全身から力が抜けた状態に，思わずため息が漏れる。そのあと，コンマの差で覗いてくる顔があった。掠夜だ。ひどく心配している様子で，玻紅璃の頬に手を当てた。
「起きたのか？」
「たった今だけど。」
ただそれだけを言うのも億劫。しかしたったそれだけでも，掠夜は嬉しそうに微笑んだ。
「丸1日眠っていたよ。」
そう言うなり，掠夜は玻紅璃に覆いかぶさるようにもたれた。正直に言えば重いのだがあえて言わず，そっと目を閉じた。
「久々に使いすぎちゃった。」
舌足らずのような言い方に，クスリと笑みを漏らす。笑える自分にホッとして，使い過ぎによる死を間切れたことに感謝した。
「分けて？」
そう言うと，掠夜は当たり前のように優しい口付けを贈ってくれた。

玻紅璃が再び目覚めたときには，すっかり起き上がれるようになっていた。手を伸ばしてバラに手を触れさせる。なめらかな花弁。
「綺麗。」
「醒からのお見舞いだ。玲からは日本酒。葵と侑からは本だよ。」
そして，掠夜からは……。
「玻紅璃のお陰で助かったよ。」

「そんなことないよ。あの空気に気づいていなかったら，入って私も餌食にされていたよ。」
掠夜はくしゃりと玻紅璃の頭を撫でる。
「やっぱりドアの向こうで聞いていたんだな。」
「ばれてた？」
「気づいたのは俺だけだと思うけどな。」
玻紅璃はそれを聞き，少しだけ拗ねた。
「気配を消してたのになぁ。やっぱり掠夜の力は1番強い。」
眉を上げる掠夜。
「その俺の手から逃れたのは玻紅璃だろ。」
「まぁね。でも，昨日は掠夜に助けられたもん。ありがとうね。」
玻紅璃がにっこり笑って言うと，掠夜は微笑んで頭を撫でた。
柔らかい雰囲気であったが，それをぶち壊す着信音。
♪♪♪
その音で，玻紅璃は青褪める。
「どうした？」
「丸1日寝ていたのよね。」
「ああ。それがどうした？」
空を仰ぐ。
「無断外泊だ。怒られる～。」
気分は，メス熊に餌を取られて頭を抱えて悶えるあのオス熊だ。
「こうなったら徹底的に無視してやれば？」
それが出来れば後悔しない。玻紅璃は恐る恐る携帯電話を手に取り，通話にする。それと共に，突っ切る怒号。玻紅璃が返事をする暇なく続けられ，それは徐々に泣きに入っていった。
約5分こちらから言うことなく通話が続き，最後に玻紅璃が謝って電話を切ることが出来た。
「苦労するな，玻紅璃も。」
「よそから見れば，ボックス娘らしいのよ，私って。」
変な言葉が出てきて掠夜の眉がひそむ。

「ボックス娘…？」
「訳せば，箱娘。つまり，箱入り娘ってこと。前に言われたの。」
変な造語に呆れたため息が出る。
「俺にはそう見えなかったけどな。」
「私だってボックス娘の気持ちはないもの。」
そう言ってため息をつく。押し付けられた通話にほとほと疲れた様子だ。
玻紅璃は横にいる掠夜に寄りかかる。
「どうした？」
「帰る気ないからいいかなって。」
「そうか。」
恋人ではないから爆弾発言のようだが，当の本人たちはいたって普通に甘い空気に酔っていた。

次の日の朝。さすがに玻紅璃はこれ以上の叱責&泣き言を聞きたくなかったので，おとなしく帰って行った。
その後，掠夜は醒とともに記者をはじめとしてその編集部全員の記憶を操作した。
そして，玲は綾子の知り合いの振りをして部屋に入り，自分たちの写真やメモを押収した。

自分たちの自由を侵させないために。

自分たちの役目を終え，掠夜の館に集まる。玻紅璃はさすがに出て来れず，それ以外のメンバーが集まれた。やはり一昨日の夜に殺され，生き返っただけに全員の表情がにごっている。
「玻紅璃さんがいて良かったですよ。」
誰もが心の中で思っていることを葵が口にする。綾子を仕事で知っていただけに，あの変わりように頭が追いつけなかった。
「あの子は平気なの？」

「ああ。力も分けておいたから，しばらくすれば元通りになる。」
醒はチラリとからかいの視線を向けたが，今日ばかりはこの場にそぐわないので茶化すのはやめてワインをのどに流した。
「あの女。本当にやな感じだった。会ったときも寒かったし。」
「侑もなの？」
気だるそうに頷く。
「私もそうだったわ。なんか引っ掛かるわね。この先も何か起こりそうで。」
酒盃に口をつけ，思案し始める。だが，それはすぐに自分で首を振って中断させる。
「やめた。考えるのも嫌になっちゃうわ。」
「確かに。掠夜，どうする？」
醒に問われ，質問の意味を視線で問い返す。
「この分だと，力を持つのはおれたちだけじゃないはずだ。だけど，気軽に声を掛けるわけにもいかない。探り合いのようになるかもしれないし，おれたちにそぐわないやつがまたかき乱すかもしれない。」
その場合はどうするのか。ここにいる誰もが気に掛けていた。
掠夜がリーダーではないから方針を決めるわけではないが，誰もが掠夜の方向性を知りたがっていた。
「そうだな。」
全員の視線が集まる中考え，赤ワインを一口飲んでから全員を見回した。
「気になる奴がいれば声を掛けてもいいし，掛けなくてもいい。それは個人の判断に任せる。だが，俺たちのやり方にそぐわない場合は消すか，記憶を操るか，後腐れのないようにする。かき乱すような奴がいれば，みんなに知らせる。そっちの方が誰もがそいつと当たったときに消せるからな。これでどうかな？」
根本的には，個人に任せている。それがこのメンバーの掟みたいなものだ。

「それならよくてよ。」
それぞれが頷く。
「ただ，少し抑えた方がいいかもな。」
突然の自重自戒な意見に驚きが出る。
「もちろん，あとに残さなければ好きにすればいい。だけどこれだけ事を起こされているから，少し慎重にしておかないと玻紅璃みたいに勘のいい人に気付かれる。その点を踏まえて欲しい。」
いくらあとを消しても，見えない尻尾を見られる可能性だってあるのだ。今の自由を持続するには，抑えることも必要だ。掠夜はそれを言いたいのだ。
本来なら年長の醒が言うようなことだが，全員が納得して頷いた。
力を抑えることもまた，その人の実力。

引っかき傷

綾子のせいでざわついていた音楽界が落ち着くまで，約半年も要した。あれだけのことが連続して起きたのだ。無理もない。

だが，犯人は結局分からずじまいである。

もちろん，掠夜たちが公表できるわけがない。する気もない。

このまま迷宮入りすることを願った。

季節は冬から春になり，街中にある木々が芽吹いて緑鮮やかになる。それまでの間，メンバーは仕事を中心に生活をしていた。コンサートや海外公演，ＣＤ製作など。陰の力を潜め，日常に精を出していた。

醒はいつも通りに仕事をこなしていた。

賞はあまり取っていないが，海外での評価や観客を魅了する美声のお陰で仕事はあとをたたない。数枚出しているＣＤも売れ行きは好調だ。

目下の困りごとは，声ならぬ声で歌っていないことだ。

掠夜の指示に従っているわけではない。

止められているわけではない。あれだけの事があったのだ。彼なりの思惑で歌っていない。

だが，そろそろ歌いたくなって来た。

玲は自分の手を見ながら掠夜の館まで歩いていた。いつもは気にしないのだが，最近はどうも気になる。

この手は血塗れどころか，死神のように白骨となっているのではないかと。

以前，掠夜のようにすべて黒くなるのは嫌で，血のようなワインを平気で飲む姿から目を背けたかった。キツイことを言っても，あ

そこまで黒くはなれないと思っていた。だが，それに馴染んできている。
あれから1年以上たっている。
進んでいるものだ。
落とす瞬間を気にしていたのが，今では普通になっている。慣れとは怖いものだ。
それが選んだ道でもある。
今更戻る気はない。

葵は優勝経験もあり，練習熱心でもあるから楽団の中でもかなり目立った存在になりつつあった。実際，チェロではソロを任されたこともあった。それも1度や2度ではない。かなり早い昇進である。
それだけに周りから疎ましい目で見られることもあって気に病むこともあった。だが，メンバーが，特に玲が後押しをしてくれたお陰で仕事には影響しなかった。
以前ならば力で色々なパワーを吸い取っていたが，今はお世話になる必要もない。
健全的になっていた。
それでも，そろそろ疼いて来ていた。

玻紅璃は社会人2年目となっていた。新人が入ってきた事もあって前以上に忙しい日々。だが，おじ様年代の先輩に可愛がられているせいか，そこまでハードではない。
ボランティアに行く余裕もあり，休日には病院や施設に行って演奏することもあった。以前ならば癒したり，時には施しようがない人を苦しませずに終幕を下ろすことをしていた。
今はしていない。
自分の勘が冴えるだけに，今はしてはいけないときであった。
それは分かっているけれど，何かが燻っている。

侑は腕前が上がってきた事が自信へと繋がり，今は留学を目指している。
いつぞやのオーディションのように力を使うのではなく，実力一本勝負に掛けているのだ。それだけに，練習には熱がこもる。当然周囲もワーストからベストとなった侑に対抗しようと必死だ。学内にある留学枠はたったの３つ。
勝ち取るために，彼は黒い力どころではなかった。
それでも，ふとした瞬間に蘇るあの感覚があった。

掠夜は今年初めに出したＣＤの売れ行きがよく，雑誌の取材に引っ張りだこであった。
今までは若手指揮者として活動していたが，これからはＣＭやドラマなどの音楽にも声が掛かりそうだ。
指揮以外にも仕事が出来たことで，顔が広くなりそうである。黒い力を使うに当たって障害となりそうではあったが，獲物を惹き付ける力は抜群に伸びる。
発揮するときを待ち構えていた。

「そろそろ行こうか。」

迷い込んだ鳥

若葉の季節は終わり，今は梅雨の終わり頃。終わりといっても雨は降ることは降る。毎日じめじめした日で，なんとなく憂鬱。だけど，今日は久々に太陽が力を発揮してカラッとした気持ちの良い日であった。

それなのに憂鬱な人がいた。

着ているのは振袖。鮮やかな朱が全体に広がり，花を縁取っている金糸が煌びやかだ。着ている服が華やかなのに，表情は一転して暗い。目は伏目がちで，口はきゅっと閉じられている。

明らかに，楽しくない表情。頭の中でウジウジと悩んでいる表情だ。

ふと顔を上げる彼女。

『ピアノの音かしら？』

耳に入ってきたのは，確かにピアノの音色であった。誘われるように歩いて行くと，大きな洋館にたどり着いた。

掠夜の館だ。

普段何気なく通る道なのに洋館があることに気付かなかった彼女は，吸い寄せられるように門に近付いた。自分の家が和風なだけに，この洋風な家はとても魅力的に目に映っていた。

『誰の家かしら？』

門扉に手を掛け，じっと中を覗く。

『この曲…？』

『モーツァルト作曲，キラキラ星変奏曲。』

彼女はハッとして振り返る。そこにはジーンズに白のシャツを羽織った醒が立っていた。

『キラキラ星変奏曲。知ってるのか？』

『ええ，綺麗な曲ですもの。』

醒が重そうな門を手軽に押して開き，女性を手招く。

『え？』
『来なよ。』
女性はちょっと考え込んだが，軽く頷いて醒のあとについて行った。
古めかしい玄関のドアノッカーを叩き，音もせずに開いたところでさっと女性の手を引いて入った。手を引かれた方はドキリとしてしまうが，醒は至って冷静。そのまま2階にあるグランドピアノまで連れて行った。
グランドピアノの前に座っているのは，ワインレッドのバラがプリントされたワンピースを着ている玻紅璃。その横には暑いというのに黒のワイシャツにワインレッドのネクタイを締めている掠夜が立っていた。
『いらっしゃい。』
何食わぬ顔で掠夜は言い，玻紅璃にひと言囁いてこの場を離れさせた。
掠夜は醒に目配せし，それから彼女を上から下までじっくりと見た。強い視線に身じろぎし，醒にすがろうとする彼女。それを見て，掠夜はクスリと笑みをもらした。
『失礼。醒が女性を連れてくるのは珍しいので。』
『あ，いえ。』
『どうぞ。』
掠夜は醒から引継ぎ，彼女を応接間までエスコートした。
コロンの香りが彼女の鼻をくすぐり，ドキドキさせた。それだけでなく，後姿だけで彼女は惹かれていた。

応接間では玻紅璃がお茶の用意をしていた。
『こちらにお座り下さい。』
『ありがとうございます。』
掠夜に指定されたソファーに座ると，玻紅璃がマイセンのティーカップに紅茶を注ぎ，全員に差し出した。
アールグレイの香りが部屋に広がり，部屋の装飾と相まって，こ

こが外国のように感じられた。
　この中で唯一の部外者はドキドキしながら3人を見た。年齢がバラバラで，外見も似ていない3人だから，どんな関係なのか気になったようだ。
それに気付いて，醒が咳払いをして口を開いた。
『音楽仲間だよ。』
『そうなんですか。えっと……。』
自己紹介すべきか，お邪魔させてもらった事にお礼をすべきか，迷って口を濁す。それを見て，振袖を着た楚々としたお嬢様風の彼女に玻紅璃はニコリと笑みを向けた。
『私は玻紅璃です。こちらが掠夜，あちらが醒さんです。』
『はい。わたくしは都と申します。』
手を揃え，しっとりと頭を下げる。その動作だけで，作法を習っている事が窺えた。そして，着ているのが振袖となると，お見合いをしてきたのでは，と3人は思った。
『ピアノの音が気になって門の前に立っていたそうですね。』
いつもの掠夜と180度違って，爽やかな青年振りを醸し出している。
　いつもと違うことを知らない都は，彼の様子に安心してかすかに笑みを作る。
『はい。綺麗な音だったので。』
『ありがとうございます。弾いていたのは，私なんです。』
『そうでしたか。ピアニストの方なんですか？』
あまりに真面目に問われ，玻紅璃は一瞬ぽかんとしてしまう。その様子を見て笑う男性2人。
『あ…。』
恥ずかしくなり，顔を下に向ける都。だが，掠夜が横に座って肩を撫でてやるとおどおどしながらも顔をゆっくりと上げた。
『悪いね。玻紅璃はプロのピアニストではないよ。まぁ，ピアノを弾くからピアニストには変わらないけれどね。』

『都さんは何か音楽をなさっているんですか？』
急な話題転換に意表をつかれて目を丸くするが，すぐに悲しそうに下を向いた。
『あ，ごめんなさい。変なことを聞いちゃって。』
玻紅璃が慌てて謝るが，都は涙目になりながらも首を振った。
『いいえ。変なことじゃないです。ただ……。』
視線をそらすと，掠夜が落ち着かせるように頭を撫でた。都は掠夜の行為に励まされたのか，ハンカチで涙を拭き取って顔を上げた。依然として悲しい顔のままだが，胸の内に燻っているものを吐き出したい表情が強かった。
『わたくしの家は代々琴の師範でございます。わたくしも小さい頃から習っております。』
『由緒あるお宅なんですね。』
『ええ。ですが，わたくしには重荷でしかありません。師範としてのお墨付きも父から賜りましたが，継ぐ気持ちは全くないのです。』
表情が暗かったのは，このことがあるからであった。
自分の意思とは関係なく，継ぐ者として，次代として成長させられた自分が嫌でたまらなかったのだ。
　それから。
『私には兄弟・姉妹はおりません。ひとり娘でございます。選択の余儀なく，わたくしの家に相応しいと両親の言う方とお見合いもさせられました。』
自分の気持ちを察してくれない両親。ただ単に血を残し，家を守って行くことしか念頭にない両親。
　そんな両親は，都を押しつぶすだけであった。
『もしかして，お見合いから抜け出してきたんですか？』
コクリと強く頷く彼女を見て，掠夜は思わず笑いをもらしそうになったが，そこはいつものごとく上手く隠した。そして，都に微笑を向ける。
『だったら，しばらく俺の家にいないか？』

『え？』
目を見開いて掠夜を見る都に柔らかな笑みを浮かべながら3人は頷いた。
『行く当てもない。だが，家には帰りたくない。違うかい？』
首を縦に振る都に，玻紅璃は頷いて同意を示す。
『じゃあここにいたらいいと思いますよ。ここにいたら見つかる心配もないし，ここには掠夜しか住んでいませんし。』
ある意味でドキッとして掠夜を見つめ返すが，好ましい笑みを向けられて都は安心させられた。
『わたくしなんかがお世話になってもよろしいのですか？』
『構わないよ。日中は仕事でいないし，好きにして貰えばいいからね。』
目線で是非を問うと，都はここでようやく肩の荷を降ろしたように微笑んだ。
『それではここにいさせて下さい。出来ることは致しますから。』
それを聞いて掠夜は手を差し出した。都は一瞬戸惑ったようだが，素直に手を差し出して握手を交わした。
それを見て2人は微笑んだ。
黒い笑みで。
だが，それは都には見られなかった。

籠から逃げ出した鳥よ。
この手は自由への道か？

ひとしずく

都には部屋が与えられ，そこで生活がスタートした。おそらく都の両親が捜索願を出すだろうが，それをかいくぐることは容易である。

都自身も戻りたくない一心で，行動を制限していた。

掠夜が家に帰ると，都は玄関まで迎えに出てきた。やめてくれと言っても，一向にやめてくれない。結局掠夜はこれ以上言うのをやめた。

『お帰りなさいませ。』

『遅くまで起きていていいのか？』

『厄介になっているのに，先に寝てしまうなんて……。』

半ば侍女か家政婦のように暮らしている都に正直うんざりしている掠夜。

だが，そんな顔は微塵も出さずに笑って見せた。

『別にあんたは俺の奴隷じゃない。好きにしていればいいさ。』

それだけ言い，さっさと自室にこもった。

（あれは嫌なものだ。）

翌日，掠夜は都に持っている楽器を一通り紹介しながら奏でさせた。だが，琴以外はどれも不器用な音しか出ず，あまり期待を持てなさそうだ。

『綺麗に鳴らそうと思っても，結構難しいものなんですね。』

苦笑しながら言う都。

『それ相応の練習が必要だからな。』

その練習をしたくなければ，俺のタクトでしてやる。

もちろん，代償は頂くがな。

都はその日から掠夜の許可を貰って楽器を色々と鳴らしてみた。琴以外の楽器に触れたことがないだけに，どれも楽しく感じてしまう。ピアノやマリンバ，ドラムなど弾き方が色々とあるのは手が付けられなかったが，タンバリンやカスタネットなどは比較的手を付けやすかった。単にリズムをうっているだけだが，それだけでも面白みは出てくる。

『どうだ？』

急に声を掛けられ，慌てて振り返る。そこには掠夜が立っていた。

『お帰りなさいませ。』

いつもの調子で言うと，掠夜は苦笑をもらした。

『そんなに堅くならなくても良いだろう。気に入った楽器でもあったか？』

「そうですねぇ。これは他のカスタネットと違って楽しくなるのですね。』

そう言って持っているのは，フラメンコを踊るときに持っているカスタネットだ。

通常のカスタネットと違って片手打ちで，甲高い音が出る。

『古典的なお嬢様にはあまり似合わないな。』

つい本音を口にするが，彼女は気にした様子もなくにっこりと笑った。

『私もそう思いますわ。』

それがなんとなく，引っ掛かるような笑顔であった。

渦

都が来て1週間。掠夜の家に慣れないと思って玻紅璃は毎日少しの時間でも来ていた。別に世話を焼くわけでもないし，逆に世話に焼かれるわけでもないが，都は同性が来てくれることに安心したようでずいぶんと警戒心を解いたようである。玻紅璃は生活していく上で必要な服や日用品などを持って行き，様子を伺っていた。

お嬢様育ちな都と話が微妙に噛み合わないときもあるが，年が近いせいか打ち解けてきてはいる。

ただ，玻紅璃はちょっと調子を狂わされていて帰宅すると，必ずしっくりしない気持ちが広がっていた。

醒はバーボンを口にしながら待っていた。都がいるために，いつも通り掠夜の家で集まれないので，急遽バーで落ち合うことにしたのだ。

しばらくすると，玲と葵がいつものように一緒に来た。

『年下趣味だったのか？』

そうからかうと，露骨に嫌そうな顔をしたのは玲だ。その横で葵が慌てている。

『違うって言っているでしょー。葵にも失礼よ。』

『からかいがいがあって面白いやつだな。よ，元気か？』

玲に笑いかけ，後半では葵に向けた。

『ええ，相変わらずですよ。醒さんは今度記念講堂で演奏があるんですよね。頑張って下さい。』

『ああ，まぁな。』

玲と葵が注文をしてから醒の隣に座る。

『で，何でこんな所に集まろうって言ったわけ？』

『まぁ待てよ。侑も来たらな。』

『玻紅璃は来ないの？』

バーボンで濡れた唇を舐め，それからうなずく。
『もう知っているからな。』
『へぇ。何かあったの，彼女と？』
茶目っ気たっぷりの上目遣いに，醒はハァッと軽く息をはく。
『掠夜に怒られるぞ。』
『あら，怒られないんなら手を出したわけ？』
『玲。』
あくまでからかう玲に冷めた声で呼びかける。さすがにこれは効いた。
『はいはい，分かったわよ。もう言わないわ。あ，侑！』
ドア付近でキョロキョロと見回す彼を見つけ，手を上げて合図する。
侑は慌てて3人の所まで来て，息をついた。
『遅れて悪い。』
『いいから座れよ。』
醒に促されて座り，バーテンダーに注文する。
『さ，醒。話して頂戴。』
先程のに拗ねているのか尖った声ではあったが，醒は肩をすくめて話した。
掠夜の家に居候として都がいることと，なぜ彼女を引き入れたかと言うことを。

単に家に帰りたくない女性の保護をしたくてしたわけではない。
そんな偽善には全く縁のないメンバーだ。
では，なぜ彼女に掠夜の家で過ごすように言ったのか。
それはもちろん。同じ香りがしたからである。
都自身は気づいていないようだが，微かに漂っていた。
黒い力が。
なお確率が高いと言えば，玻紅璃のカンである。

話し終わると，玲は胡散臭そうな眼を醒に向けた。心境としては

葵も侑も同じであろう。自分たちがいかに不思議な，闇の力を持っていたとしてもすぐには納得できない。
『本当にその子に力があるんでしょうね？』
『その見込みがあるからこそ，引き入れたんだよ。ま，本人は力をどう思うか分からんがね。』
『だけど，力がなかったらどうするんですか？』
『どうにでもなるさ。』
消す方法などいくらでもある，そう暗に語っていた。
『けど，掠夜んちでいいんすか？玻紅璃だったいるのに。』
そう言う侑に大人3人の視線が突き刺さる。
　さすがにこれには参り，慌てる。
『な，なんすか？』
『玻紅璃は掠夜の家に住んでないわよ。』
『そりゃ知っているよ。』
『じゃあ，2人が付き合っていると思っているのか？』
『え？』
侑は眼を丸くする。
『まだ付き合っていないのか？』
驚く侑の横で，葵は深くため息をついた。
『付き合っていませんよ。』
『はぁ！？』
葵はもう1度深くため息をつく。
『やっぱり付き合っているように見えますよね。前にそう思って聞いたけど違うと言われるし，そういう予定もなさそうだし。』
『あれで付き合っていないのか？』
『まぁ，やることはしているんじゃないか。』
意外とあっさりと醒は言うが，玲は微妙にしかめ面をしている。
『どうした？』
『別に他人の事情に首は突っ込まないけれど，ハッキリして貰いたいわね。』

『え？玲って掠夜のことが好きなのか？』
あまりに直球な問いかけに，玲はテーブルに突っ伏したくなった。
『あのねぇ。そんなわけないでしょ。見ていて中途半端だから苛々するだけよ。』
『お前はそういうことが多いな。』
苦笑しながら醒がいうと拗ねたように口をつぼめたが，軽く息を吐いてシェリーに口をつけた。

掠夜は玻紅璃だけを部屋に呼んで，都の黒い力について話していた。
出てきそうなのに，閉じ込められているようで表に出ていないということを。隠しているのでは，とも思えるがそれらしき痕跡も見えない。
『もっと強いと思ったのに。勘がはずれちゃったかな。』
掠夜は玻紅璃の頭を撫で，軽くキスを贈る。
『たまにはそういうことだってあるだろ。』
『うん。ね，いつまでいさせるの？』
掠夜は首をかしげてみせる。
『すぐにでもと思ったが，もう少し様子を見たい。』
玻紅璃は一瞬顔を曇らせるが，軽くうなずいて見せた。
　それから2人は応接間に行き，都が用意してくれた酒肴に手を伸ばした。
『口に合いますか心配ですけれど。』
出してくれたのは手作りのカナッペであった。琴＝和風のイメージがあるだけに，意外だ。
『悪くないな。』
口にした掠夜が評すると，都はホッとしたように微笑んだ。
『どうぞ。』
赤ワインを掠夜のグラスに注ぎ，自分は烏龍茶を口にした。それだけでもなんとなく雰囲気が出来上がっているような気がして玻紅璃

は視線を逸らしたかった。
『玻紅璃さん，あの，以前私の家の前を通ったとお聞きしましたが。』
『通ったけど何か？』
都は視線をさまよわせ，迷っているような仕草をした。それが鬱陶しく感じるが，それを出さずににっこり笑って見せた。
『ご両親のことが心配なんでしょう？』
『ええ。』
『都さんのことは捜索願を出されたようです。でもご両親ともに元気そうですよ。』
たったそれだけだが都は安心したように息をついて微笑んだ。
『良かったです。すみません，厄介事に巻き込んでしまって。』
『いや，お前を入れたのは俺たちが誘ったこともあるしな。気にするな。』
『はい，ありがとうございます。』
きっとここが和室ならば三つ指ついて頭を下げただろう。そのくらい丁寧に頭を2人に下げた。
しばらく話してから，いつもよりだいぶ早い時間に玻紅璃は腰を上げた。
『もう帰るのか？』
『うん。都さん，またね。』
都に手を振り，バッグを肩にかける。
『玄関まで送ろう。都，後片付けしといてくれ。』
『はい。』
都が立礼するのを目の端で見てから退室し，ゆっくりと玄関に向かう。
『醒たちはどうしている？』
『今日，3人に醒さんが説明してくれるって。』
『そうか。玲には文句を言われそうだな。』
『うん。』

掠夜は横を歩く玻紅璃をじっと見た。視線を感じた玻紅璃は一瞬身体を硬くさせるが，それでも歩き続けた。
『言ってごらん？』
『え？』
思ってもいない問いかけに，立ち止まって掠夜を見上げる。彼はいつものとは違う，優しい目を向けていた。
『なんだかよそよそしい気がするが。』
玻紅璃は自嘲するように，ただし他人には苦笑しているかのように笑って見せて歩き出した。
『そんなことないよ。』
サラリと言い，そのまま玄関のドアに言ってドアノブに手を伸ばす。だが，それを掠夜が止めた。
『何かあるのか？』
『何もないってば。また来るね。』
改めてドアノブに手を伸ばすと，今度は後ろから抱きしめられた。
『何もないっていう顔じゃない。本当にどうしたんだ？』
耳元で囁かれゾクッとする。さすがにこれに抵抗は出来なかった。
『どうしたってわけじゃないの。私もよく分からなくて。自分で言ったことなのにね。』
何に対して言っているのかが見えてこなく，掠夜は何も言えなかった。玻紅璃は掠夜の腕をぽんぽんと軽く叩いて離し，ドアを開けた。
『また来るわ。』
パタンと重いドアの割には軽い音を立てて閉まったドア。
掠夜はスッキリしない面持ちでそれを見つめていた。

芽生え

侑は通知を持ってバーに来た。葵と何度か来ているし，友達とも来るようになってからはバーテンダーとも顔なじみになった。いつも1杯目は何も言わなくても出してくれる。おれのお気に入りのゴッドチャイルドを飲み干し，それから通知を開いた。

この通知は，推薦留学の合否の通知である。

ワーストからベストに登りつめたとはいえ，腕の良い精鋭揃いの友達から留学枠を勝ち取るのはかなり難しい。おれ自身，受かるかどうか不安であった。もちろん力を使えば合格間違いなしだが，そんなことで勝ち取ってもこの世界では意味がない。

自分の腕でやっていかなければならないのだ。

ドキドキしながら内容を見る。裏から透かせば文字がやたらと書いてあって余計に緊張した。

息を吐き，覚悟を決めてから目を通す。一瞬見間違えじゃないかと思った。だが，書かれている文字はなぞっても消えない。合格だ。

『やったっ…！』

小声で感激し，ガッツポーズを小さく決める。

（これで行ける…！）

飲みながら通知を見てニヤニヤしていたら，バーテンダーがやってきた。

『なんだかご機嫌ですね。ラブレターですか？』

明るく笑い，通知を見せた。目を通したバーテンダーは驚いたように声を出し，それから笑顔を向けた。

『素晴らしいですね。おめでとうございます。』

そう言い，お祝いとしてマリネとゴッドチャイルドを出してくれた。

『さんきゅ。ほんと嬉しいよ。』

『いつからウィーンに？』

『9月に入ってからだな。』

それからまた通知を見る。何度見ても気持ちの良いものだ。
しばらくして，葵と玲がやって来た。この2人もよく一緒にいることが多い。掠夜と玻紅璃の関係も怪しいが，こっちも怪しく感じてしまう。それを言うと不機嫌になるから絶対に言わないけど。
『珍しいな。』
『いや。祝い酒なんで。』
照れくさそうに言うと，玲が目を丸くした。
『誕生日だったの？』
『違うよ。留学が決まったんだ。』
『あら。それはおめでとう。』
あっさりとした祝辞だが，心はこもっていた。侑は軽く頭を下げる。
『1年間の留学でしたよね？』
『ああ。上手くいけば，延長出来るんだけど。そこまでは無理かなぁ。』
自分の実力は分かっている。そこまで楽観は出来ない。だが，葵はにこやかに首を振った。
『きっといけますよ。聞くたびに音の質が変わってきているから。』
さすがは楽団の1人。耳が良い。侑は葵の評価に満足し，グラスを空にした。
『じゃあ，今度みんなでお祝いをしましょうよ。そうね…掠夜の家はダメだから，醒の家でいいでしょ。』
『醒さんに了承を取らなくていいんですか？』
玲はアドニスをのどに流し。クスッと微笑んだ。
『私が言えば平気よ。じゃ，いつにする？』
玲はすっかり楽しみ，3人で予定を合わせて日取りを決めていった。

玻紅璃は綾子が起こした事件の記事を読んでいた。
『相次ぐ音楽家への受難…アホらいいタイトル。』
いくらアホらしいタイトルでも，内容はどす黒い。
自分たちの力がいかに人様から見れば得体の知れないものである

か。また，犯罪に当たることや倫理観から外れていることなど。それらは全て承知していることである。それでも使っているのは，その人個人の思惑があるからだ。ただそれも，表面に出すのではなくあくまで裏でのこと。

表には決して何も残さない。

しかし，こうして大々的に表に出し，悪びれることなく使って人の生命をクズとしてきた行為。もちろん，綾子個人の思惑があってしたことは分かる。分かるが，それを許せるわけがない。

今まで隠してきた意味を消されたのだから。

『持ってる力を使うのはいいけど，その方法と考えがダメだったのね。』

玻紅璃は蔑むように呟いて雑誌を閉じた。

『同じような人が出なければいいけれど。』

そう言いながらも，都を思い出した。彼女は確実に持っている。その勘は外れていない。ただ，問題は彼女がどう思うかだ。掠夜からはもう少し様子を見ようと言われたが，これ以上待てるような気はしていなかった。

きっと自分の力を知れば，殻に閉じこもるだろうと思っていた。

鳥籠から出たのに，また籠に戻ることはない。

掠夜は初めての楽団と打ち合わせをしていた。クリスマスコンサートということで今回は合唱も入るのだが，今日はオーケストラのみ。曲調やイメージの意見交換をしてその楽団としての味を理解し，そこに掠夜のスパイスを仕込んでいく。楽団員はまだ３０歳にも満たない指揮者に戸惑っている様子だが，話し込んでいくうちに掠夜の天才肌に感嘆してのめり込んでいく。

そこが掠夜の強みでもあった。

ただ，今日はどことなくいつもの力が出ていなかった。昨夜の玻紅璃との別れ方が気に引っかかっているのだ。

それに気付かれることなく終え，釈然としない気持ちで車を走ら

せて家に向かう途中，ある人に気付いた。都だ。なるべく家にいようとしているのでどうしたのかと思って声をかけようとしたが，あることに気付いてそのまま車を走らせてパーキングエリアに停め，都のあとを追いかけた。
　都はあとをつけられていることに気付く以前に，どことなくボンヤリとしている。
　どこに向かうのかと，この辺りの地図を頭に浮かべる。この先には公園と病院しかない。さらに歩くと，浄水場があるだけだ。いったいどこへ向かっているのだろうか。家の中では見ない行動を不審に思いつつあとをつける。
　着いた所は病院であった。
　そして，不思議なことに，病院が近くになるにつれて都の周りに見えない黒い靄が漂っていた。
　やはり芽吹いていたのだと思うのと同時に，本質を知りたくなった。だが，さすがに病院内まで付けていくわけにも行かず，掠夜はそこで引き返した。

　ＣＤや楽典を買いに行ったりしたので，掠夜が家に着いたのは２１時に近かった。さすがに都は帰っており，いつも通りに玄関まで迎えに来ていた。
『暑いので，そうめんを茹でておきましたけれど。』
『ああ，じゃあ少しだけ貰うか。』
食べる気はなかったが，話をしたかったので承諾した。
　ダイニングに行くとテーブルにそうめんや付け合わせが並べられていた。
少しだけ口にし，都を見る。
『茹で加減が悪かったのでしょうか？』
味に文句を付けられると思った都が先制して言うが，掠夜は肩を竦めて首を振った。
『今日どこかへ出かけたか？』

思いもよらぬ質問に，都はハッキリと反応していた。怯えているような，後ろめたいような。そんな反応。
『別にお前がどこへ行こうと構わないが，似た人を見かけたからだよ。』
少し優しい口調で言うと，都は軽く息をはいて力を抜いた。
『病院へ行っていたんです。』
『病院？どこか具合でも悪いのか？』
『いいえ，違いますわ。えっと，その…友達のお見舞いと思いまして。』
掠夜はとっさの嘘であることを見抜いていた。
『へぇ，そう。何か聞いてきたのか？』
『え？』
都はドキリとして掠夜を見つめる。
（なぜ？）
『ま，いいや。ご馳走様。』
都の反応だけを頼りに推測し，掠夜は満足そうに微笑んで自室へ向かった。
　残された都は片付けながらも，テーブルに置いてあるカスタネットを見た。

Step

掠夜は醒と玲を誘ってレストランに来た。先に2人は来ていて，既にワインを飲んでいた。

『待たせたな。』

そう言って座ると，ウェイターが来て掠夜にもワインを注ぎ，それからメニューを差し出した。

『2人は？』

『まだ決めていなくてよ。』

『そ。』

掠夜はウェイターと話しながらコースを決め，それからワインを掲げてから飲んだ。

『決めたのは醒か？』

『あら，残念でした。私よ。』

珍しく掠夜がミスったことに，玲は気をよくしてコロコロと笑う。個室だから気にしなくて良いが，それにしても愉快そうだ。反面，掠夜は少しムスッとしたが肩をすくめて流した。

『玲が選ぶにしては良いな。』

『あんたはそういう生意気な口しか利けないのかしらね。玻紅璃とはどうなのよ？』

ワイングラスを置き，不思議そうに玲を見る。

『なんで？』

『好きな女性には違うんじゃないの～？』

掠夜は気にする様子もなく，軽く息を吐いた。

『女ってそう思うのか？俺は関係ないと思うけどね。』

『さらに憎たらしい答えだこと。』

10倍返しをしようと口を開いたが，あいにくオードブルが運ばれてきたので玲はおとなしくした。それを見て醒はクスリと笑む。

掠夜が選んだレストラン。コースのどの品も隙がなく，掠夜らし

い。
　美味なる食事とワインを楽しみ，デザートを出されたときにようやく本題を出した。
　都にあった力が芽生えてきて，自覚してきていることを。
『都に力が出た？』
『本当なの？』
2人とも懐疑的であった。特に醒は都を知っているだけに，信じがたいようだ。
『確かに力はありそうな感じだが，自覚しているのか？』
『それっぽい様子はあったよ。ま，これからどう使っていくかが楽しみだけど。』
洋ナシのムースにヴァニラアイスを乗せて口に運びながら，玲は冷たく掠夜を見た。
『その子に会ったことがないからハッキリとは分からないけど，想像で言わせてもらえれば，使い方を教えてあげた方が楽なんじゃない？』
『調教か。』
玲は露骨に嫌な顔をする。
『醒が言うとエロい。』
思わずコーヒーを噴出しそうになる。
『お前の頭の中はどうなってるんだか。』
『だって。』
『その辺にしとけよ，玲。で，使い方を教えるって？』
玲は残りを平らげ，コーヒーを飲んで息をつく。
『だから，ほら，名前はなんだっけ？』
『都だ。』
『そうじゃなくて，前に邪魔して来た人。』
『あーなんだったかな？』
醒は空を仰ぐ。
『俺も忘れたね。』

掠夜もあっさりと言う。玲は2人の様子に思わず笑みを漏らすが，その点には触れずに話を戻した。
『とりあえず，前に邪魔して来た人がいたでしょ。その人のようにはなって欲しくないわけよ。』
『つまり，俺たちのように染めろってことか。』
玲はまたしても露骨に嫌な顔をするが，今回は口にせず諦めたようにうなずいた。
『なるほど。で，どうする？』
『どうするって，掠夜がするのが1番じゃなくて？』
掠夜は乗り気ではなく，視線を夜景へ変える。
『嫌だね。』
2人はあっけにとられたように掠夜を見る。こうまで拒否する彼も珍しく，また，あまりにもそっけない。
元々掠夜は他人に執着をしないが，こうまでも寄せ付けないのも珍しい。
『けど，1番都がなついているのは掠夜だろ？』
『でもやりたくないね。』
醒と玲は顔を見合わせ，首を傾げる。ここまで拒否されたのなら，もう無理である。
『じゃあ教えるのは止めましょ。その子がどう考えるか見ていればいいんだし。』
『そうだな。俺たちに合わなけりゃぁ，消せばいいだけだ。』
『ああ，それでいいよ。』
お互いに押し付けない，と言うのは分かっているが，今回は2人が譲歩する形で方針が決まった。

　玻紅璃は洋服を出しながら，悩んでいた。掠夜からレストランでの食事に招待されたが，改まった席で会うのはこれが初めてなのだ。外で2人が会うのも初めて。いつもと違うだけで，緊張が違う。また，渦を巻いていた心境も続いていたので気持ちが落ち着かなかっ

たのだ。しかし，自分たちの関係を思えば相応ではない心境なだけに，玻紅璃はそれをきっぱりと捨て，招かれようと思っていた。と言っても，慣れない場で会うのはドキドキする。
　クローゼットから洋服を出してはため息を付く。
『これじゃあカジュアルすぎるしなぁ。』
クローゼットをひっくり返すかのように探すのだがなかなか良いのは出ず，ため息とともに片付ける。
『買いに行くって言うのもなぁ。あ，そうだ。』
葵のコンサートへ行くときに来た黒のワンピースを出す。特に飾りがあるわけではないのだが，アクセサリーで雰囲気が変わるワンピースなのだ。
『コレなら。』
身体に当て，鏡をのぞいてみる。これならレストランへ行っても違和感はないだろう。それからジュエリーケースを開き，大き目のイミテーションが付いたネックレスとあわせる。
『あと指輪をしていけばいいかな。』
時々ご褒美と称して買う指輪を見て，お気に入りのをチョイスする。あまりちゃっちい物を付けるとお子様に思えるので，ランクとしては上の方のをチョイスした。
　思い起こせば掠夜との関係は曖昧のまま。ジュエリーなど貰ったことは1度もない。欲しいと思ったこともない。ただなんとなく一緒にいるだけであった。だが，今はなんとなく欲しいような気持ちであった。玻紅璃はジュエリーケースを見ながらおねだりをしようか迷っていた。

　葵は花束を持って綾子の病室に入った。あの事があっただけに近寄らない方が良いのだが，さすがに関係者ということで行かないわけにもいかなかった。また，本当ならば同じ楽団のメンバーと行く予定だったのだが，急遽1人で行くこととなってしまった。
　綾子がどうしてこうなってしまったのかを知っているだけに，行

くことが憂鬱だ。
病室の前に行くと，中からは機械音しか聞こえなかった。家族がいると思っていただけに安心し，念のためにノックをして入ろうとドアノブに手をかけた。すると，かけた瞬間に中から開かれ，面食らってしまった。
『あ。ごめんなさい。』
中から若い女性が出てきて，丁寧に頭を下げて出て行ってしまった。慌てて去る女性の後姿を見て，首を傾げる。
『誰だ？』
と，詮索してみるが分かるわけもなく。葵は何事もなかったように病室に入った。
だが，それで気付いてしまった。
微かに漂う黒い靄。
あの女性がここで何をしていたのかは分からないが，黒い力を使っていたのはハッキリと分かる。
『今の女性……。』

揺らぎ

玲がいつものようにヴァイオリンで心を引き出し，ビルから落として帰るときであった。ビルから駅に向かう途中，女性に声をかけられたのだ。

『どうしてですか？』

知り合いでもないのにそういう問いかけはおかしい。玲は無視することに決めた。

だが，女性は続けた。

『間違えた物を点滴してしまっただけです。間違えなんて誰にでもあるでしょう。』

玲の顔が険しくなる。確かに今落としてきた人は看護師で，医療ミスを告白していた。あの場には誰もいなかった。音で結界を張り，誰ひとり，虫1匹すら入れていない。

なぜそれを知っているのだろうか？

熱帯夜なのにも関わらず寒気がする。ここは去るべきだ。無視して歩き続けると，女性は走って先回りしてきた。

『人殺しですね，あなたは。』

してきたことはそうだが，人に言われるのには苛立つ。それに，玲には玲の思惑があってそうしたのだ。あそこで落としていなければ罪の呵責に苛まれてあの女性は生きていけなかっただろう。だからこそ落としたのだ。

『なんだか分からないけれど，知らない人に対して失礼でしてよ。』

『失礼って，あなたがあの人を落としたんでしょう。』

なぜこんなことを言うのだろうか。

『なぜそう言い切るんですの？』

相手の顔をハッキリと見たいが，暗い夜道では前に来ていてもうっすらとしか分からない。言われていることにも，そのことにも苛立ちが募る。

『だって，私に話してくれたんですもの。』
玲の思考に引っかかった。死者が話すわけはない。意識が残っていたとしても，自殺したと思い込むようにヴァイオリンを弾いていた。
なぜ？
それは。
玲はニヤリと笑む。
『あなたも持っているのね。』
女性が身を竦めたのがよく分かった。そして，先程の勢いとは逆に萎縮してきていることにも。
『覚悟がないのに使うんじゃないわよ。』
バサリと切り捨てるように言い，愕然とする女性を置いて駅に向かった。

ついいつもの癖で掠夜の家に足が向いたが，都がいることを思い出して醒の家に向かった。
都心から少しだけ外れいてるが，交通の便の良い地に建っているビルの最上階に醒の家はある。一人暮らしにしては部屋数が多いが，誰かが来たときには便利である。
『いつ来ても眺めがいいわよねぇ。』
『だからって，俺の家にたかろうとするな。』
ワイングラスを手に，くるりと振り返る玲。
『こんな所を独り占めするなんてずるいじゃない。』
醒は脱力したようなため息をする。
『だったらそういう奴と結婚しとけ。で，どうしたんだ？』
『あら，ばれた？』
玲はカラッとしているが，醒は誤魔化されなかったようだ。
『お前とは付き合い長いしな。』
『そうよね。ね，死んだ人と話すことって出来る？』
想像していたよりもくだらない内容だと思ったのだろう。醒は一気につまらなそうな顔つきになった。

『出来るわけないだろ。』
『でも，聞いてくれない？』
これはもう，聞け，という命令だ。醒はしぶしぶ静かに拝聴することとなった。
ここの来る前の出来事は確かに耳を傾けるべきことであった。醒のつまらなそうな顔つきは消え，鋭い目で見ていた。
『死んだ奴の気持ちを読み取る能力か。』
『そ。彼女はその力を持っていたわね。』
明らかにそれは人間の持つ力ではない。
もっと私たちに近い力だ。
黒い力。
『でも，持っていて良いとは思っていないようよ。』
『そりゃ覚悟なしに使って中途半端に接触してくるくらいだからな。』
『そうそう。けど，誰なのか気にならない？』
玲は醒のグラスに白ワインを注ぎ足し，自分にも注ぎ足して乾杯の仕草をしてみた。醒も同じようにしたが，最後までせず肩をすくめて見せた。
『最終的に使いこなせない奴はいらんからな。』
言われた玲は怒ったように眉間にしわを寄せた。
『しわが増えるぞ。』
『そうさせているのは誰よ。ねー，誰か探して～。』
醒は首を振り，白ワインを飲み干した。
『俺は興味ないね。俺にも近づいてきたら考えておくが。ま，聞かれて萎縮するような奴はもう何もしないだろうな。』
『あっそぅ。是非狙われて欲しいわね。』
『お前な。』
醒の剣呑な視線から逃れ，玲はバッグを持って立ち上がった。
『帰るわ。あ，そうそう。侑の留学祝いをここでするから。いいでしょ？』

『お祝い？』
『学校の留学枠に入れたんだって侑が言っていたのよ。９月に出発らしいから，それまでにどうかと思って。お祝いって言っても，送別会に近いわね。』
『それで，ここでするのか？』
さも当たり前と言うようにうなずくと，醒は頭をかいて夜景に目を向けた。
『店を使うわけにもいかないか。いいけど，コンサートで忙しいから日程を早く教えろよ。』
『日程はもう決まっているわよ。』
事がとんとん拍子に進んでにっこりする玲。
『その日は空いているはずだもの。』
予定していた日にちを聞けば，確かにコンサート前の貴重なオフの日であった。
『当日は玻紅璃が来て，料理を作ってくれるんだって。よろしくね。』
それは，既に来る気満々であったことの証拠だ。醒はなにも言えず，軽くため息をついた。
『何がよろしくだ。』
『あら，いいじゃない。』
『はいはい。気をつけて帰れよ。』
『はぁ～い。』
玲は来たときとは打って変わって，あっさりと帰宅した。

　掠夜が家に帰ると，都は出迎えず，ピアノを弾いていた。
弾いていたと言っても，１本指で適当に鍵盤を押しているだけだが。
『どうした？』
今までピアノに触れようともしていなかったので，不思議に思って声をかける。ハッと顔を上げた都の顔は少し青ざめていた。
『あ，お帰りなさいませ。』

いつものように挨拶するが，掠夜は何か引っかかっていた。
黒い靄？
力を使ったのか？
『あの？』
『ああ，悪い。ピアノを弾いているのを珍しいと思って。』
都だけに向ける，子どもをあやすような笑顔になると，都もホッとしたように微笑んだ。それがなんとなくぎこちない。掠夜は都を見通すようにじっと見たが，それ以上は何も把握できなかった。
『響くのが素敵だと思って。あの，ご飯をお召し上がりになりますか？』
『いや，食べてきた。』
『そうですか。』
『そうだ，明日は帰らないから。』
『え！？』
急に不安になったのか，都は自分を抱くように手を回した。
『帰ってこないんですか……。じゃあ，玻紅璃さんはいらっしゃいますか？』
掠夜は口の端を片方上げ，妖艶な笑みを浮かべる。
『明日は玻紅璃との約束だから無理だな。』
都は明らかに落ち込んだようにうつむいた。
『そうですか。あの，気になっていたんですけれど，おふたりってどんなご関係なんですか？』
『さぁね。』
何かを匂わせるような，魅惑的な言い方。
掠夜はそれだけ言い，都を残して部屋に行った。

戸惑い

都はカスタネットを叩きながら家中を歩いていた。掠夜のいないこの洋館はいつも以上に広さを感じ，音も響きが深くなった気がした。

（聞いたからって，何が出来ると言うのかしら？）

フラメンコを踊っている人のように連続でカスタネットを叩く。

その音がずっと響いていた。

醒はコンサートの練習をしていたが，力み過ぎた身体をほぐすために外へ出た。日中の強い日差しは夕方になっても衰えず，夕焼けが眩しい。

目を細めながら歩いていくと，見知った後姿に気付いた。早足にしてその人の肩を叩くと，心底驚いたようにして振り向かれた。

『よう，久しぶりだな。覚えているか？』

驚いた表情が数秒張り付いた顔が，一気に柔らかく変わった。

『醒さん。お久しぶりでございます。』

都は丁寧に頭を下げた。

『日中に出てバレないか心配で，出るのは止めたって掠夜に聞いたけど？』

『ええ，そうなんですけれど。でも，今日は掠夜さんがいらっしゃらなくて。ひとりでいるのが怖くて出てきたんです。』

そういう顔は，それ以上に強張ったように伺えた。

『へぇ，掠夜はいないのか。』

（これから行こうと思っていたが，しょうがないか。）

醒は予定が狂い，どうしようかと思ったときに，あることに気付いた。都を纏う空気だ。

微かに感じる，黒い力。

醒は聞くべきか悩んだが，声にならない声で歌ってみた。もちろ

ん，彼女から何があったのかを聞き出すためにだ。だが，簡単には言わなかった。むしろ，醒から感じ取ったのか，怯えた目で見つめ返してきた。
『なんですか？』
『何が？』
珍しく気付かれたことが分かっただけに，シラを切る。首を傾げて見せるが，都はあまり納得していないようだ。
『だって，今……。』
『何も触れてないけど，どうしたんだ？』
ある種の強みを掛けて問い返すと，都は視線を逸らして首を振った。
本当なんだな。
何か疼いている。

玻紅璃はホテルのレストランで掠夜を待っていた。以前あれこれと迷って決めた黒いドレスにアクセサリーをアクセントとして付けていた。普段は幼いが，化粧と洋服でいつもと雰囲気は違う。大人な雰囲気だ。しかし，胸中はそうでもなさそうである。夜景が煌いて綺麗なのだが，緊張で身体は硬直気味だ。掠夜の家以外で2人きりで会うのは，今夜が初めてだからでもあるし，この場の雰囲気に圧されているからでもある。
『お待たせ。』
うしろから声がかかり，振り向くとスーツ姿の掠夜が立っていた。普段からシックな装いだが，スーツは初めてである。さらにドキドキするが，掠夜に微笑んで見せた。
『いいえ。』
掠夜は席に着き，ワインをオーダーしてから玻紅璃と向き合った。
『緊張しているのか？』
『だって。こんな所で待ち合わせしたのも，食事をしたこともないのよ。』
『見れば分かるよ。』

見透かされている言い方に，拗ねて視線を逸らす。
『拗ねるなよ。』
そう言いながらテーブルにカードキーを差し出した。
『スイート用意したけど？』
驚く玻紅璃に，掠夜は涼しげな笑みを浮かべて見つめた。口元を片方上げて笑っていても漂う雰囲気が優しくて，玻紅璃は一気に機嫌が直った。
『うん，ありがとう。』
ワインを注いでもらい，掠夜は玻紅璃にグラスを掲げた。
『乾杯。』
玻紅璃もグラスを掲げ，それから口をつけた。濃厚な葡萄の香りと，それでいて爽やかな口当たり。掠夜らしい濃い赤のワインであった。
『それから。プレゼント。』
小さなケースを差し出される。思いも寄らない展開に目を丸くしてしまうが，それでも嬉しそうに笑って受け取った。
『玻紅璃に似合うと思ってね。』
『何かしら？』
『開けてもいいけど。』
早速，といわんばかりにリボンを解き，ケースを開けた。中にはサファイアが輝くピンキーリングであった。
『綺麗。』
おねだりしようかと思っていたジュエリーをもらえたことと，掠夜からの初めてのプレゼントに嬉しくて涙が出そうであった。
『ありがとう，掠夜。』
『いいえ。貸して。』
差し出された手にケースを乗せると，掠夜は指輪を取り，玻紅璃の左小指に付けてあげた。そっと手に口付けを添えて。

醒と食事を終えて掠夜の家に帰ってきた都。誰もいないこの洋館

は，いつも以上にひっそりとしていて，不気味だ。それが掠夜に似合っているとメンバーは思うのだが，都はそんなことも知らず，ここにいる自分に情けなく思っていた。しかし，家にいるよりはマシなのだ。

真っ先にシャワーを浴び，ベッドに倒れこむ。家では決してしない動作だが，今はしたかった。倒れこんですぐはいけない事をしてしまったようで落ち着かなかったが，段々と柔らかなベッドに飲み込まれるような，なんとも言えぬ安心感があった。

実家を出て約1ヶ月。両親も心配だし，自分のこれからも心配である。

『どうしましょう？』

つかの間の休息

葵は携帯電話を持って何度も廊下を行き来していた。
昨日の出来事を相談すべきか迷っていたのだ。あの時は確かに感じたが，時間がたつと本当だったかどうか不安になる。嫌な相手に会いに行くから，無意識に保護する意味で黒い力を使っていたのかもしれない。それで過剰反応をしていたのかもしれない。
『何しているんだ，葵？』
はっと顔を上げると，今回コンサートで一緒に演奏することとなった尺八奏者の西沢と目が合った。代々尺八奏者の西沢家の血を引くだけあって，葵と同じくらいの年齢なのに素晴らしいテクニシャン。おまけにイケメンということで，話題の人でもあった。
『あ，電話しようか迷っていて。』
誰に，とは言わないが本当の事を言った。それ以外だと変に怪しまれては困るからだ。
『へぇ。彼女？』
『違いますよ。彼女なんていませんし。』
西沢は目を大きくした。
『この間ヴァイオリンを持った人と歩いていたじゃん。』
おそらく，玲のことであろう。ため息が漏れる。
『違います。よく言われますけど，そんなんじゃないですから。』
『へぇ。』
『そういう西沢さんはいるんですか？』
これだけの容姿と経歴を持つ人だ。いないはずはない。まして，何人もいるのでは？と思う人が多数いるだろう。だが，以外にも苦笑をもらすだけであった。
『消えちゃってね。』
『消えた？』
いる，いないのどちらでもない回答に，葵は首をかしげる。西沢は

そんな様子を気にすることなく，話を進めた。
『元々彼女って訳じゃないけれど，オレとしては彼女にしようかと思っていて。けど，いなくなっちゃってね。』
人の詮索は好きではないが，西沢の様子があまりにも寂しげなので葵は質問をした。
『友達なんですか？』
『いや。お見合いで知り合ったんだ。ほら，うちって代々こんなんだから相手もそれなりじゃないといけないんだよ。』
旧家には旧家のしきたり通りしなければならないところがある。そこが窮屈なのだが，意外にも西沢は外見に反してそれを受け入れているようだ。
『お見合いで知り合ったのに，いなくなったって？』
『んー，オレもよく分かんないんだ。しかも，今も家には帰ってないらしいよ。てことで，この話はおじゃんになったけど。』
西沢の話を聞けば聞くほど，醒から聞いた都とかぶってくる気がする葵であった。ただ，顔を知らないので聞きようがなかった。また，これ以上細かく聞くのは気が引く。
葵は柔らかく笑み，西沢の肩を叩いた。
『もっと良い女性から声がかかりますよ。』
『お前もよく言うよなぁ。ま，今度お前のあの彼女を紹介しろよ。』
面食らう。
『だから，彼女じゃないですよー。』
『へいへい。休憩終わったから行くぞー。』

玻紅璃は窓辺に寄って眼下に広がる夜景を見た。煌く光が互いを反射させているかのようにきらきらとしていて美しい。光輝く摩天楼。テレビで見るのとは全く違う。お互いに反射しあっているような煌き。
『綺麗。』
『夜景がね。』

玻紅璃がちょっだけムッとして振り返ると，掠夜は涼しく笑っていた。
『嘘。玻紅璃が綺麗だよ。』
『あ，そういうわけじゃ……。』
容姿に自信をもっているわけではないが，言われれば心に引っかかる。しかし，こう返されてしまうとドキドキしてしまう。
掠夜はスパークリングワインを出して細身のグラスに注ぎ，玻紅璃に手渡した。お互いにグラスを掲げ，のどに流す。小さな泡がちょっと刺激的。
『美味しい。』
掠夜は笑みを漏らす。
『本当にお酒に強いな。』
玻紅璃は思わず照れる。どちらかと言えば強いのだが，他人から言われるとなんだか恥ずかしいのだ。
『ワイン2本も空けているのに，まだ酔わないからな。』
『2本って，掠夜と一緒に飲んだのよ。掠夜だって強いじゃない。』
掠夜はグラスを一気にあけ，玻紅璃の肩を抱く。
『見かけだけ。』
『本当に？』
玻紅璃が意味を込めて見上げると，さすがにため息をついた。
『ばれたか。』
玻紅璃はにっこり笑む。
『付き合い長いから分かるわよ。それで？』
今度は真剣な眼差しを向ける。
『今日こういう風にしたのは訳があるんでしょ？』
『なにも。』
それだけ言った。玻紅璃は何かあると，ある意味覚悟をしていてのだが，こう切り替えされてしまうとポカンとして何も言い返せなかった。その様子を見て，クスリと笑む。
『飽きないね，玻紅璃は。』

『おもちゃじゃないんですけど？』
拗ねながらソファーに座り，こちらもワインを飲み干す。ピリピリとした刺激がのどを滑り，気持ちとは裏腹にそれが心地良かった。
それが分かったのか，掠夜も隣に座り，玻紅璃の頭を撫でた。
『都のことを言おうかと思ったけれど，もうどうでもいいや。』
『掠夜？』
『俺とだけいればいいんだよ。』
まさに愛の告白のような。しかし，今まで一緒にいたから分かる。コレは告白なんかなんかじゃない。じゃれ合いのひとつ。
『さ，話はもうおしまい。』
そう言うなり，掠夜は玻紅璃に覆いかぶさった。

黒い靄

ホテルから帰ってきたのは夕方。
仕事がある日ならまず見られないような夕日をバックに玄関に入ると，薄暗く黒い靄がかかっていることに気付いた。俺は思わずニヤリと笑みを漏らす。
都の力が溢れてきているからだ。使い慣れれば隠すことが出来るが，力を付けた頃には制御が出来ない。だからこうして黒い靄が出ているのだ。
そのことに気付き，都本人がどう思っているかどうかと思って笑みがこぼれた。
『都。』
大きくない声で呼ぶが，この響きの良いエントランスによって大きくなった。それは部屋にいた都の耳にも届き，慌てた足取りで来て，2階のピアノの横から顔を覗かせた。
その顔は青ざめている。
『お，お帰りなさいませ。』
『どうした？』
挨拶に返事をせず，嫌味を込めた口調で聞いた。どうせ答えられないと思っていたが，意外にも都は階段を駆け下り，抱き着いて来た。予想外のことに面食らうが，その表情を一瞬にしてかき消し，冷たく笑う。
うざい。
『こういう事は恋人にしておけ。』
拒絶するような声で言うと，都は尚更俺の胸にすがってきた。
『怖かったんです。』
この屋敷が？力を持っていれば，ここは怖いはずがない。むしろ心地良いはずだ。
『何が？』

都は顔を上げて俺を見つめた。

ホテルから帰り，自分のベッドに倒れこむ。スイートルームとのベッドの差にむなしくなるが，やはり落ち着く。くるりと仰向けになり，身体を伸ばす。

掠夜と久々に過ごしたからか，なんとなく充実感が満たされていた。

『変な関係。』

ポツリと呟いた。

1週間経ち，玻紅璃は久々に玲と葵の2人とバーで会うことにした。

侑の留学祝いの打ち合わせのために集まったのだが，やはり始めは力について話してしまう。

『ずっと見ていたって事ですか？』

玲が話した，呼び止めてきた女性について，葵は驚いた声を発した。

玲はそのときがよほど嫌だったのか，ムッツリと不機嫌そうにしながらマティーニを飲み干した。

『気分良かったのに，その人のせいで台無しよ。』

『でも，結局は玲さんに言い返せなかったからいいじゃないですか。』

『玻紅璃，甘いわよ。』

ポンと玻紅璃の肩を叩いて首を振る。

『最後の最後に茶々を入れられると腹立たしいわよ。』

『それに，見られたことに気付かなかったのが1番嫌なんでしょう？』

葵がさらりと嫌なことを言った。いい所のお坊ちゃまのような雰囲気でありながらグサリと言う葵に玻紅璃はハラハラした。だが，意外にも葵は怒らずため息を付くだけであった。

『なんで私の気持ちが分かるかな，葵は。』

拗ねたように言うと，葵は小さく笑った。
『やっぱりお似合いだなぁ。』
玻紅璃が呟くと，2人して首を振った。
『それを言うなら，掠夜と玻紅璃でしょ。』
『前から言っているけれど，付き合っていませんよ～。』
『でも，怪しい関係ですよ。』
『ん～そうかもしれませんけど。って，今日はそれで集まったんじゃないですよ。』
玻紅璃は慌てて話題を変える。
『侑君の留学祝いのことですよ～。』
『ああ，でもその前に。』
葵が遮った。珍しいこともあるものだと女性2人は首を傾げて見る。
『綾子さんのことなんですけど。』
『綾子？』
玲は記憶を探るように目を泳がせ，記憶に引っかからず肩をすくめた。
『誰だか分からないけど。』
あっさりと忘れている玲に苦笑しつつ，玻紅璃はあの出来事を話す。それで思い出したようで，玲はつまらなそうにシェリーに口を付けた。
『ああ，邪魔して来た人ね。そんな名前だったのね。で，その人がどうかして？』
『一応関係者ってことでお見舞いしに行ったんですけど，その時に……。』
病室に入るときにぶつかった女性，そして部屋に残っていた黒い靄のことを話した。顔を見ていないことと，一瞬のことであることに信じがたいことだが，玲と玻紅璃は葵を知っている。無視は出来ない出来事だ。だが，一瞬のことだけに相手を特定することは出来ない。
『玲さんのもそうですけれど，葵さんのも誰なのかが分からないか

ら手を出せませんよね。』
『まぁ，そうなるわね。』
『もっと見ておけば良かったです。』
あからさまに落ち込む葵を見て，玲は優しく肩を撫でた。
『気にしないの。何かあれば綾子って人みたいにちょっかい出してくるわよ。その時に見極めればいいわ。』
この中での年長者として，玲はきっぱりと結論出した。悩んでも仕方ないのは分かりきった事なのだ。
その後ようやく留学祝いの打ち合わせをし，その日は解散となった。

都の寝顔を見て，掠夜は落ち着かない気持ちになった。抱きつかれ，そのまま眠った都を部屋まで運んだのだが，なにかざわめいている。適当にあしらってきた相手だが，都の力が出てきてからはなんとなく気にかかっているのだ。
もちろん，黒い力が引き寄せる事なのだが，それとはまた何かが違っているようだ。ただ，何が違うのかが分からない。玻紅璃のように力を取られるわけでもなく，探られるわけでもない。何もされていない。 しかも，まだまだ都の力は掠夜にとって赤ちゃんみたいなものだ。ただ，何かがおかしい。
つい数時間前には玻紅璃といたのに，それが霞んでいくようであった。

蜘蛛の糸

都が来てからは倦厭しがちな掠夜の洋館を久々に訪れた。都への日用品を届けるためにだ。
ドアノッカーを叩けば，いつものようにすーっと軽く開く重たい扉。いつも不思議に思うけれど，ここは掠夜の洋館。不思議ではない。
そこから入れば，ホテルのロビーのように広いエントランス。相変わらずの反響で，足音すら軽く響く。それを聞きつけたのか，都が2階から顔を覗かせた。
『あ，玻紅璃さん。』
その声は幾分嬉しそうであった。
確かに年は近いが，そこまで打ち解けているわけではない。でも，都は寄ってくる。仕方ない。合わせるしかないのだろう。
『こんばんは。お久しぶりです。』
『ええ。お元気でした？』
『まぁね。都さんのご両親もお元気そうでしたよ。』
そう言うと，都は驚いた表情をした。
『会ってきたんですか？』
『いいえ。見かけたんですよ。あなたを捜すチラシを駅前で配っていたので。』
都の表情が強張る。やはりまだ帰りたくないのだ。
『チラシを配られているのなら，尚更外に出られなくなってしまいますわ。』
『そうですよね。』
でも，別の鳥籠に入ろうとしているのでは？
感じ取った都の黒い力はまだ彼女を彷徨っている。
もう黒い力を受け入れるか，いつだかの女性のように手放させないと，生きていけない。

私はそのどちらに行くのか楽しみだ。
どうせなら……。
『ところで掠夜はいますか？』
『はい。』
今まで見た中で1番の笑顔を見せられた気がした。明らかに嬉しい表情。
それが嫌だった。
『そう。』
私は小さく呟き，2階の応接間へ向かった。応接間では既に掠夜が赤ワインを飲んでいた。
『こんばんは。あれ？醒さんはいらっしゃらないんですか？』
『醒はコンサートだよ。』
『ああ，そうだった。』
いつものように隣に座ろうと思ったが，グラスを置いてあることに気付き，掠夜の向のソファーに腰を降ろした。ちょうどよく都が上善水如と杯を持って来てくれた。
『ありがとうございます。』
『いいえ。どうぞ。』
都に注いでもらい，ひと口飲む。
『美味しい。』
『相変わらず日本酒が好きなんだな。』
『掠夜の赤ワインと一緒よ。』
そのとき気付いた。都のグラスにも赤ワインが注がれていることに。以前来たときには飲めないからと言って，烏龍茶があったはずだ。それが変わっていた。
なんとなく気に食わない。
だが，それを気にした様子も出さずにお酒を飲んだ。
『そう，都さんに渡すのがあるんです。』
大き目の紙袋に入っているのは頼まれていた化粧品や洋服。それらをどさっと渡すと，都はにっこりと微笑んだ。

『ありがとうございます。』
『どういたしまして。』
『いつもすみません，お手を煩わせちゃって。』
丁寧に頭を下げた都は大事そうに紙袋を持って部屋へ行った。
『侑の留学祝いは明後日だったよな？』
『うん。先に行って料理とか用意しているから。』
『玻紅璃の手料理か？』
『不味くても文句は受け付けないから。』
この言い返しに掠夜は小さく笑った。
『都とどっちが美味しいかな？楽しみだね。』
都と引き合いにされ，複雑になる。私は返事をしないで，ただお酒をのどに流した。美味しいはずの日本酒が，なぜか今日は苦い。
　都が戻ってきてから料理のことなどを話していたけれど，どうしても上の空になってしまう。この空間そのものが嫌なのかもしれない。気持ちの乗らないことに気付いた掠夜は視線で問いかけてきたが，さりげなく首を振った。
　スイートルームで過ごしたのが嘘のように，また気持ちがあの時のように戻っている。いや，あの時以上のわだかまりがあるのかもしれない。
『もう帰るわ。』
『え？』
掠夜は不思議そうに私を見てきた。その横で，都も不思議そうに見てきた。
『明日会議があるから。』
『そうか。都，片付けを。』
『はい。』
『じゃあね，都さん。』
『はい，失礼します。』
都が礼をするのもあまり見ず，バックを肩にかけて応接間を出た。
　以前にもこんな事があっただけに，掠夜は何か言いたそうではあ

ったが，何も言わずに一緒に玄関まで来てくれた。
『どうした？』
あの時と同じようにここで問いかけられたが，私は首を振った。
こんなモヤモヤした掴みどころのない気持ちなんて，口で言えない。言葉にも出来ない。
『大丈夫だよ，私は。』
『そうか？』
頭を撫でながら目で問う。その視線にくらくらしそうになりながらも，首を振る。
『平気よ。また明後日ね。』
掠夜の手を振りきり，私は洋館から出た。
胸につかえるこの気持ちがどうなるかも知らない。

欠けた環

今夜は侑の送別会。早めに醒の家に来た玻紅璃は食事の支度をしていた。
テーブルの上にはサーモンとたこのカルパッチョサラダとチーズの盛り合わせ，カナッペ，そして食器類が並べられていた。
メインディッシュは，今オーブンから出した子羊の背肉のグリル焼きだ。
子羊肉特有の香りと香草の香りが食欲をわかせる。
香ばしいお肉を大きなお皿にのせ，周りにプチトマトやブロッコリーなどを添える。
『出来上がり。』
中々な見栄えに満足して言い，このお皿もテーブルにのせた。
ちょうどそのとき玄関のドアが開けられた。
入ってきたのは飲み物を買出しに行っていた醒だ。
玻紅璃は慌てて玄関まで迎えに出る。
『お帰りなさい。』
こういう習慣がない醒は少し驚いた表情を浮かべたが，すぐに軽く微笑んだ。
『ただいま。』
『持ちますね。』
『いや，大丈夫だよ。』
醒はそれだけ言い，空いている手で玻紅璃の頭を撫でた。
『可愛いな。結婚を勧める理由が分かる気がしたよ。』
撫でられた方はなんだか照れくさくて微笑んでうなずくだけであった。
『お，結構出来ているじゃないか。』
テーブルに視線がいった醒が嬉しそうに声を上げた。
自分の家でほとんど食事をしないだけに，テーブルに豪勢な料理が

のっていること自体が新鮮なのだろう。
『あとはデザートです。足りるでしょうか？』
『大丈夫だろ。デザートは何？』
そう言いながら冷蔵庫を開けた醒の目の前に，デザートはあった。
『ムースか。』
パステルピンクとホワイトの2段のムースケーキであった。
『ストロベリーレアチーズムースです。』
『器用だな。』
『いやあの…すみません，それは粉を溶かして作るって言う簡単なのです。』
『そんな風に見えないから大丈夫だよ。』
ピンポーン。
インターホンがなり，電話についているディスプレイには3人の姿が映っていた。
玲，葵，侑だ。
『来たか。』
キーをフリーにし，3人を招く。
玻紅璃が玄関にスリッパを揃えて置き，すぐにここの玄関が開かれた。
『来たわよー。』
『いらっしゃい。』
玻紅璃の後ろに立つ醒が言い，玻紅璃はスリッパを勧めている。
それを見て，まず玲が笑い出した。
『なんか新婚の家に来ちゃったみたいじゃない。』
玲のこのセリフにはみんなが笑った。
『年の差夫婦って言われるんだろうな。』
醒が苦笑しながら言い，3人を中に通す。
正面の広い窓からは夕焼けが見え，じきに綺麗な夜景と変わるだろう。
『掠夜さんはまだなんですか？』

すでに来ているだろうと思っていただけに，玲と侑も驚いた顔をしている。
玻紅璃は複雑な表情を浮かべ，醒は肩を小さくすくめた。
『そのうちくるだろ。時間が惜しいから始めよう。』
家主であり，年長者である醒からのことだから反論は出ず，それぞれグラスに好きな飲み物を注いだ。
『侑の前途を祝して。乾杯。』
軽く掲げ，４人もそれに続く。
　あとはいつも通り，獲物の話からスタートし，留学についての話にどんどん進んでいった。
その間にも掠夜が来ることはなく，連絡すら掛かってくる気配すらない。
玻紅璃は気になって携帯電話をチラッと見てしまうが，すぐに視線を逸らして話に溶け込んでいった。
　このまま泊まっていきたいくらい話し込んでいたが，そうもいかないのでいつもよりも早目に終え，駅まで3人を見送った。
玻紅璃は醒の家に戻り，後片付けをすることになっていたからだ。
『悪いな。』
醒は普段していないので手を出さず，邪魔にならないよう，ソファーに座っていた。
『いいんですよ，私も勝手にあれこれ使わせてもらいましたから。』
食器の片付けも済み，流しの中を洗えば完了だ。
『そういえば掠夜は来なかったな。』
『そうですね。日にち間違えていたりして。』
前日に会い，今日のことを話しているだけにそれはあり得ないと思いつつも，口にした。
当然聞いている醒もそんなことはあり得ないと思っていた。
『はい，終わりました。』
『ありがとう，お疲れさん。』
ほっとひと息，と思って玻紅璃は醒の横に座るが，弾かれたように

立ち上がった。
『どうした？』
『終電，まだ間に合います！？』
時計を見れば０時半過ぎ。醒は時刻表を取り出して慣れない様子で見る。
『しまった。もうないや。』
気が抜けた玻紅璃はソファーに座り込む。
『タクシー拾って帰るからいいです。』
醒はあまりにしょんぼりした姿に
『だったら泊まっていくか？』
と言った。そして，言ってから慌て始めた。
『いや，意味はないが。』
あまり見ない醒の様子に玻紅璃はくすっと笑った。
『じゃあお言葉に甘えて。』
『そうか。じゃあ飲み直すか？』
『そうですね。』
玻紅璃はワイングラスを，醒はお気に入りのワインを取って来て，今度は静かなグラスを交わした。

Scar

玻紅璃はカーテンの隙間からこぼれる光を感じてゆっくりと目を開けた。
見知らぬ天井と壁に少しだけ驚くが，なんてことはない。あのあと醒とワインを飲み交わし，そのまま泊まらせて貰ったのだ。アルコールが入った状態で眠っただけに，ふわりとする浮遊感を感じつつ，隣にある温かさに微笑む。心地よい瞬間でもあった。
貸してもらったワイシャツをパジャマ代わりにし，ゆっくり眠らせてもらったのだが，もう日は高そうだ。身体を起こそうと思い，頭を上げたときに気付いた。昨夜…すでに日は明けていたから深夜と言うべきだが…醒に腕枕をしてもらったままであった。その優しさに感謝しつつ起き上がり，バックから携帯電話を取り出して見る。着信はゼロ。まったくの無反応。
いったいどうしたことだろうか。
こんなことは今までなかった。
嫌な予感が全身を走るが，それを無理にでも押し出す。
（私がそう思う権利はないもの。）
玻紅璃がため息をつくと，隣がもそもそと動き出した。
『起こしちゃいましたか？』
慌てて見ると，醒はまばたきしていた。
『いや，そんなことないよ。』
醒もゆっくり起き上がり，そのまま玻紅璃の額にキスを送った。
『おはよう。』
その姿はあまりに自然である。ハタから見れば，映画のワンシーンのよう。だが，主演女優にあたる玻紅璃は慣れていないので照れるばかりだ。あまりのことにびっくりして固まってしまった，赤い顔の彼女を見て，醒は笑い出した。
『まったく可愛いい反応するもんだな。そこまで初心じゃないだろ。

』
初心じゃなくても，恋人でもなくても，渋い素敵な男性からされれば誰だって照れるであろう。
『え，あ，だって…。えっと。おはようございます。』
顔を真っ赤にしながら言う玻紅璃の頭を撫で，ベッドから降りてクローゼットを開けた醒はバスタオルを出して彼女に投げる。
『シャワー浴びてきな。』
『あ，はい。ありがとうございます。』
玻紅璃もベッドから降り，教えてもらったバスルームに行く。それを見送り，醒は携帯電話を取り出してかけてみた。
『何で出ねーんだよ。』
悪態をつくとほぼ同時に，荒々しくドアが開けられた。
『醒さん，どうしよう！掠夜が…！！』
醒のワイシャツを羽織っただけの姿で入ってきた玻紅璃の顔は，真っ青であった。醒の顔も自然と険しくなる。
『着替えろ。掠夜ん家に行くぞ。』
『え？』
当たり前のように返され，動きが止まる。
『掠夜に何か起きたんだろ。携帯電話にも出ないからな。行って確かめた方が良い。早くしろ。』
玻紅璃に背を向けて自分も着替え，車のキーを取り出した。玻紅璃は着替えるのも億劫で，醒のワイシャツのまま，ジーンズを履いただけで醒のあとに続いた。

醒の車は意外にも日本車であった。だが，今は不思議に思う時間はなく，慌てて乗り込む。醒は普段しないような荒々しさでスタートさせた。
『何があった？』
普段聞いたことのない険しい声。玻紅璃の表情だけでも事の深刻さが伝わったのだろう。

『掠夜の身に何か起きたんです。』
醒は眉を顰める。
『それはわかる。だが，どういうことなんだ？』
『内緒にしていたんですけど。掠夜を生き返らせたとき，お互いの身に何かが起きれば反応が出るようにしたんです。
それが，これです。』
ワイシャツの襟をぐっと下げ，鎖骨の左下を見せる。
そこには赤い線が5センチほどついていた。
切られたわけではないが，その赤さが，毒々しい。
『それが目印か。何が起きたって言うんだよ？』
攻めているような口調に，玻紅璃は思わず泣きそうになる。
『何がって言うのは分かりません。でもきっと，悪いことです。』
『最悪だな。3人にも連絡しておけ。』
そう返し，さらにスピードを上げた。

歪んだ想い

醒は車線変更を何度もして走らせた。無謀な運転だが，とにかく急がなくてはならない。
いつもの時間のおよそ半分くらいの時間で掠夜の家に着いたのだが，醒はそれでも倍以上に掛かったように思われた。
乱暴に駐車し，玻紅璃は急いで下りて玄関のドアを開ける。
このときに気付くべきであった。ドアノッカーを叩かなかったのに，重い扉が開いたことに。
間に合わなかった。
『掠夜，いるんでしょ！？』
入るなりそう叫んだのだが，反響する自分の声しか聞こえない。
『掠夜！？』
これだけ叫べば出てこないはずはない。掠夜自身が出てこなくても，なんらかの反応はある。
そして，今ならば都が出てきてもおかしくないのだ。だが，何の反応もない。
『どうしよう，醒さん！』
振り返ると，醒はさらに驚いた表情を浮かべた。
『玻紅璃！？』
玻紅璃が着ているワイシャツの左胸あたりが赤く染まっていたからだ。
『どうしたんだ？』
あまりの形相に，自分を見下ろす。
『嘘……。』
赤く染まっている部分を触るが，濡れることはない。だけど，そのしみは少しずつ広がっていく。水色のワイシャツに赤いしみが広がる様は不気味だ。
『掠夜！』

2人は階段を駆け上がろうとするが，その手前でストップする。しっかりとした黒い力が近付くのが分かったのだ。
掠夜ではない。
都だ。
アンティークのナイフを手に，2階から見下ろしている。
『早かったですわね。』
何の感情もない，気鬱な声。醒は玻紅璃をかばうように前に立つ。
『かばう必要はありませんよ。玻紅璃さんは最後ですから。』
『掠夜を殺したのか？』
今までの都からは想像出来ない位の蔑んだ表情を浮かべ，信じられないほどの速さで階段を下りたと思ったら，まっすぐに醒を刺してきた。
『醒さん！』
避けることも抵抗することもなかった醒は，玻紅璃に支えられながら立つ。
『玻紅璃，任せたぞ。』
それだけ呟き，事切れた。目の前で刺殺された醒をなんとか床に横たえ，都と対峙する。
『私を最後って言うけれど，どうしてですか？』
『みんなが死ぬのを見て，苦しめばいいからですわ。』
よどみなく返すのは，以前の都からは想像出来ない。
『殺すのはあなた。私じゃない。苦しむことなんてないけれど。苦しいのは都さんの方でしょ，掠夜を殺したんだから。』
冷たく返す。すると都はすねたようにそっぽを向いた。
『何をおっしゃっても，強がりでも，掠夜さんは渡しませんわ。』
『掠夜は私のものじゃないわ。欲しいならどうぞ。』
あまりの言われように，今度はにらんでくる。
『やっぱり私を殺すのは，今の方がいいと思うけれど？』
『そうでしょうね。でも，取っておきますわ。掠夜さんのあとをすぐに追わせたくないもの。』

くだらない，というため息をつき，玻紅璃は階段に座って目を閉じた。都は玻紅璃のあまりの態度に腹を立たせながら，反対側の階段に座った。

２人が座って２０分ほどたった頃。ドアノッカーが荒々しく叩かれ，駆け込んできた。それとほぼ同時に都が玄関まで行き，ナイフを突き出す。

まるでナイフに刺さるために入り込んだのは，侑であった。おそらく人がいることには気付いたであろうが，手にナイフを持っていることには気付かなかったのだろう。そのままナイフは吸い込まれるように，侑の腹部に深く刺さった。衝撃と逆流してくる血に目を見張り，声もなく倒れた。

都は表情を変えず，階段に戻る。玻紅璃も何もせず，ただ座っていた。

ドアノッカーが叩かれた。堂々と入ってきたのは玲だ。最初に目に付いたのは侑の遺体。血の匂いとその姿に眉を顰め，玻紅璃に近寄る。

『どういうことなのよ！？』

『都さんのせいですよ。』

『都！？』

記憶にない名前を繰り返すと，本人が返事をした。振り向くと，数メートル先に都が立っていた。

『私のことですけれど。』

玲の形相が変わる。

『あなたなのね！？』

玲の記憶に引っかかった声。それは，獲物を落としたあと，詰め寄ってきた女性の声であった。

『玻紅璃，どういうことなのよ！？』

もう１度同じ言葉で，しかし内容の違った問いを突き詰めるが，玻紅璃の元に行くまでに前のめりに倒れた。背中から刺されたのだ。

玻紅璃は助けもせず，じっと座っていた。その姿をおかしく思い，

都は近寄る。
『なぜ何もしないの？』
『邪魔をしないだけ。』
『私のためだと言いたいんですの？』
『それだけじゃないです。自分の力を知っているから。』
『どういうことですの？』
そのとき，ドアノッカーが叩かれ，葵が入ってきた。あまりの惨劇を目の前にし，顔が歪むが，ナイフを持った都を見て，すぐにチェロを出して力を吸い出した。
だが，その前に事を切らされてしまった。
『私の番ですね。』
その声を無視して都は階段を上っていった。

飛べない鳥

都が2階に上がっていくのを見て，玻紅璃は仕方なしにあとを追った。

グランドピアノのそばに掠夜は倒れていた。首を切られたようで，ワインレッドのワイシャツが赤黒く染まっている。

都はそばに座り，掠夜の頭を抱き上げる。

『あなたには渡さない。』

『さっきも言ったけど，ご自由にどうぞ。ただ，ひとつ聞くけれど，なぜこんなことを？』

ここで初めて都の顔が歪んだ。

『あの女性が言っていたわ。掠夜さんが振るったせいで植物状態になったと。それだけじゃない，今まで何人も殺されているって。だけど……！』

玻紅璃の眉が潜む。植物状態にされた女性と言えば，私たちを丸め込もうとした綾子しか思いつかない。となれば，自然と都の力が見えてきた。

『そう。あなたの力は，意識のない人と意思疎通が出来ることですね。』

都は顔を背ける。当たりだ。

『出来たからって，なんですの？』

玻紅璃は辺りを見回し，気付いた。棚に置かれたカスタネットを取り，都に差し出す。都はびくっとしておびえ，掠夜の頭に縋る。

『黒い力が目覚めて，あそこまで人を殺したのに，もう力を使うのは嫌なんですか？』

『もう嫌ですわ。掠夜さんさえいればいいんです。何をしてきても，やっぱり素敵な方ですもの。』

『その人を自分で殺したのに？』

都は首を振って嫌がる。

『あなたには渡したくなかった。こうすれば私だけのものに出来ますもの。』
殺害することで，独占した気でいたのだ。
『それに，あの女性があまりに可哀想で。力を持っているなら，受け入れてあげれば良かったのに。それすらしないで，廃人に追い込むなんてひどすぎますわ。』
『じゃあここで5人も殺したあなたはどうなるのかしら？』
玻紅璃は無理矢理，都にカスタネットを持たせる。
『聞いてみたらいかがですか？』
あまりに冷たい声に，都は頭を振って嫌がり，カスタネットを放った。だが，玻紅璃はまたカスタネットを無理矢理にでも持たせた。
『都さんが可哀想だと思った女性は，私たちに黒い力を使うよう，命令してきたんです。彼女をひどいと言うのなら，まずはあなたが力を使ってあげたらいかがですか？』
都は自分の手に持たされたカスタネットをじっと見つめた。
『もう力を使うのは嫌ですわ。』
『玲さんにも言われたでしょう？中途半端なのに使うのがいけないんですよ。覚悟がないのなら，手を引けばいいだけのこと。それでよく掠夜を好きになれましたね。』
都はカスタネットを投げつけた。
『この力で，あなたよりも私を選ばせることは出来ましたわ。』
『じゃあ今，掠夜に聞いてみたら？』
再びカスタネットを突きつけられた都は数秒玻紅璃を睨みつけたが，震える手で受け取るとわずかながらに鳴らし始めた。
　しかし。すぐにカスタネットはカツーンと乾いた音を立てて，先ほどよりも遠くに投げ飛ばされた。
『掠夜はなんて？』
『……。』
『都さんのことなんて，なんとも言っていなかったでしょう。あの掠夜が例え黒い力に巻かれたとしても，本気で好きになるわけはな

いですよ。』
『あなたなんて地獄に落ちればいいのに。』
玻紅璃の言う通りだった。
都は震えながらも黙って立ち上がり，玻紅璃に向かって歩き出した。
『私も殺して，それでおしまいにするんですか？』
そうではなかった。都はナイフの持ち手を向けて差し出してきた。
『掠夜さんと同じ所には行かせたくないですわ。私を殺して頂戴。そうすればこの殺人だってあなたに擦り付けられますもの。』
玻紅璃は無視してピアノに向かって座る。
『甘いわね。私の力までは聞かなかったんですか？私にはそんなもの必要ないですよ。』
そう言い，ベートーヴェン作曲『悲愴』の第1楽章を弾き始めた。
強い悲しみがこもったような音色が館内に広がる。その震えるような，それでいて激しい感情が渦巻いたような音色は涙を誘う。
曲の半分にも満たない頃，ゆっくりと掠夜が起き上がった。そして，階下で倒れていた4人も起き上がる。都は蘇生する5人を見て，震えて座り込んだ。
自分とは異質な人間を目の当たりにし，立っていることが出来なかった。
黒い力を操れるようになっても，中までは黒になれなかった。
『籠の鳥は出るべきじゃなかったんですよ。』
そう言い，平吉毅州作曲『踊り』を弾き始めた。
せっかく鳥籠から逃げてきたというのに，別の籠に捕われてしまった都。そこで温まることなく，出ることも考えられず，自分の欲望に走ってしまったのだ。どれだけ自分で理解出来たかは分からないが，おそらく掠夜に魅了されただけで何も考えられなかったのかもしれない。
哀れにも，音からほとばしる力に，都は事切らされた。

靄の結果

掠夜は動かぬ都を見下ろす。生まれてくる黒い力を面白がっていたのだが，その力の靄に巻かれて自分を見失っていた。

制御していない黒い力に惑わされたのだ。

それをしてのけた都の潜在的な力を惜しく思いつつ，また憎い。だが，力を見破り，指揮棒から逃れた玻紅璃とはまったく違う。胸のすくような，あの高揚感はない。水と油のように。染めたくも，染まりたくもない。到底相容れないあの性格はいらない。仲間になんてしたくない。もちろん，都自身も彼らの輪には到底入れないだろう。

『玻紅璃，生き返らせてくれるか？』

意外な言葉に目を見張る。それを見た掠夜は苦笑をもらす。

『処理が面倒だ。』

いかにも掠夜らしい言葉に苦笑しつつ，疲弊感が募る身体に力を入れて弾き始めた。曲は坂本龍一作曲の『ｅｎｅｒｇｙ ｆｌｏｗ』だ。ゆるやかな，癒しの音色が広がり，段々と都の顔は赤みさしてきた。曲が終わる頃にはうっすらと目を開けられるようになり，終われば起き上がれるようになった。殺され，そして生き返らせられた自分の震える身体を抱きしめ，力を使った玻紅璃を見る。

『なぜ？』

『籠に戻ったらいかがですか？』

揶揄する言葉だが，都は抵抗しなかった。うなだれ，泣き始めた。

『帰れというのですね？』

『ここにいても意味がないでしょう。まだ家に帰った方がマシだと思いますけど。』

都は涙の浮かぶ目で掠夜を見る。だが，すぐに逸らしてしまった。

ここでようやく悟ったのだろう。

自分が見てきた掠夜が幻想であったことに。惑わせてでも引き寄

せた彼は，底なし沼のようにひやりと冷たい。
『葵，力と記憶を吸い取ってくれ。』
『はい。』
倒れていたチェロを持ち上げ，弦を弾いた。子守唄は優しく響き，都から力と記憶を吸い取っていく。都の目は焦点が付かぬようであった。葵が弾き終えると，今度は醒が歌い始めた。声ならぬ声だけに，都にはなんだか分からぬようでぼんやりとしていた。だが，5人はしっかりと聞こえていた。『オペラ座の怪人』だ。
じきに都はゆっくりと立ち上がり，そのまま階段を下りて館から出て行った。門からも出たのを確認し，近所の記憶もいじくってから，ようやく6人はため息をついた。これで証拠も残らずに事終えた。
階下にいた醒と玲と葵と侑は階段を上がり，お互いの無事を目でしかと見る。
『また玻紅璃に助けられたな。』
醒は彼女の頭を撫でて感謝する。
『ほーんとよね。しっかしあの女はむかつくわね！！』
声だけで，獲物を仕留めたあとに声を掛けてきた人だと見抜く玲のしつこさも凄いが，よほど腹が立っていたのだろう。
『あれが，力があると思って入れてみたって人なわけ？』
責める目を向けられ，掠夜と醒と玻紅璃は肩をすくめる。確かに力があると思って入れてみた。だが，結果がこうなるとは思ってもいなかった。
『まぁ追い出したんだから許せよ。』
『今後注意して欲しいわね。』
『そりゃするけど，全て見通せるとは思うなよ。』
『やすやすと口にする力じゃないから，全て見通すべきよ。』
『まぁまぁ玲さん，落ち着いて。』
葵が止めに入ると，思わずそちらを睨んだが，ひるむ彼を見て玲はため息をつく。

『はいはい，もう言わないわよ。』
『玲は，葵には甘いよな。』
侑に図星をつかれ，顔を赤らめる。
『いいでしょ，もう。』
『じゃあおれはもう帰ろうかな。準備があるし。』
昨夜送別会をしたのが嘘のように，時間を長く感じられた。
『ねぇ？掠夜が昨日来れなかったのは，さっきのあの女に捕まっていたから？』
掠夜の眉間にしわが寄る。
『意外だな，掠夜が引っかかるなんて。』
さらにしわが寄る。あまりに遠慮のない言葉に，不機嫌はつのるわけだ。
『言い訳はしないが，あの力は惜しかったよ。力だけだがな。』
それほど強い力だったのだと言っているのだが，侑は肩をすくめて笑った。
『ま，誰だって見当が外れるって事はあるんだし。これから気をつけてね～。』
『お前もな。留学先で寝首かかれるなよ。』
掠夜らしい送り言葉を背に，侑はさっさと帰ってしまった。
『玻紅璃，大丈夫？』
玲は椅子に座ってぐったりしている玻紅璃の背をさする。
『前は倒れちゃったけど，今日は平気です。ありがとうございます。』
『そう，良かったわ。じゃあ私も帰ろうかな。玻紅璃はすぐ帰る？』
『いえ，もう少し休んでから。』
『掠夜，頼んだわよ。醒，送ってね。』
当たり前のように言い，醒は苦笑しつつうなずいた。
『お前らしからぬ失態だな。だが，時には薬になる。』
『ああ，もっと目を養うよ。』
『そうだな。じゃあまた。』

2人を見送り，それから玻紅璃は床に身を伸ばした。
『やはり辛いか？』
5人を生き返らせ，1人を死なせ，また生き返らせたのだ。相当な力を使っている。だが，綾子のときと比べると，数段と力が上がっているので気を失うことはなかった。
掠夜はそっと玻紅璃を抱き上げ，部屋に連れて行った。

キズの繋がり

玻紅璃はゆっくりと，柔らかなベッドでまどろんでいた。自分の黒い力とはいえ，生死に関わるだけに強い力が必要である。人数はこの間より1人しか増えていないが，その1人が多かった。1度死に落とし，それから蘇らせるので，消耗は激しい。それを満たしてくれた掠夜は，今はいない。オーケストラとの練習があるからだ。

玻紅璃は家に帰ることも出来たが，醒のワイシャツを着ていることもあり，親に会わずにして家に帰る方法，すなわち夜中に帰ることを選んだ。それまで掠夜の館でゆっくりしていることにしたのだ。

ふと，掠夜のことを気付かせてくれたあの印があったところを見る。もうすでに消えてはいるが，あれを見たときの怖さは言い表せない。約束を交わした相手でもないが，いなくなってしまうのは嫌だ。

（掠夜がいなくなるなんて，心底嫌よ。）

鎖骨の左下をなぞる。ちょうどそこは，都が掠夜を刺したあたりであった。赤黒いしみも，血が出ている現れだったのだ。

自分が都に嫉妬せずにいたら，気付いたのかもしれない。

自分の勘はそれだけ自信を持っている。ちゃんと勘が働いていれば，誰も殺されることはなく，そのまま都を落とすだけで済んだのだ。今更言っても仕方のないことだが，自分の落ち度は覚えていた方がいい。

2度と繰り返さないために。

夜になり，掠夜が帰ってきた。

その頃には起き上がって動けるようになり，玻紅璃は珍しく料理を作って待っていた。それを知らない掠夜は玻紅璃が寝室にいないのを不審に思い，鼻をかすめた匂いに誘われてキッチンまで歩いてきた。料理を温め直している玻紅璃を見て微笑む。だが，ある1点

に気付いた。ようやく気付いたと言うべきなのかもしれない。玻紅璃がワイシャツを着ていることに。そして，そのワイシャツはどうにも大きく，そして掠夜自身の物ではないことに。
『玻紅璃？』
声を掛けると，振り返った彼女は軽く笑んだ。
『お帰り。元気が出たから，ご飯作ってたの。勝手に食材使っちゃってごめんね。』
『そうじゃなくて。』
不思議そうに首をかしげる玻紅璃をうしろから抱きしめる。
『ど，どうしたの！？』
強く聞かれ，そこでハタと掠夜は止まった。
（俺が言う資格もないか…？）
『掠夜？』
返事をしない彼を不思議に思って見上げると，なにやら考え込んでいる表情であった。それがまた様になっている。そんな表情が一転して，見透かすような，涼しげな微笑に変わった。ただ，それには圧迫するようなものが感じられる。
『俺のものにしたいね。』
その声が，背筋を凍らせる。
玻紅璃の頭の中では赤信号が点滅していたが，抱きつかれていることもあり，身動きが取れなかった。
『私を食べる…？』
肉体関係ではなく，文字通りだ。掠夜の力を知っているだけに，戦慄が走る。自分の能力は，当然他人にしか出来ない。つまり，自分が殺されればそこでおしまいなのだ。
『それは惜しいんだよね。』
言っておきながら自己完結し始める彼をなんとかしたいが，身長差もあって何も出来ない。玻紅璃はもどかしい思いをしつつ，表情を読み取ろうとしていた。ただ，相変わらず彼の表情は読みにくい。それがまた魅力的なのだが。

『俺たちって何だろうね？』
初めて聞かれたこの質問には目を見開く玻紅璃。むしろ暗黙の了解で，聞かないことにしていたことである。２人は恋人なのかと言われれば，そうなのかもしれないが，そうだと言える自信もない。だからといって，友達ともまた違う。もちろん，上下関係もない。よく言う友達以上恋人未満なのかと思う節もあるが，でも決定付けるものは何もない。
『私だって聞きたいけど？』
『俺は玻紅璃を手放したくないね。』
自信満々に…思えば掠夜は自信のない言い方をしない…ハッキリと言った。
『掠夜？』
『ところで，このワイシャツは誰のだ？』
玻紅璃はギクリとして顔を元に戻す。
『分かりやすい態度だよ，玻紅璃。』
いつもこうである。
『醒さんのです。』
掠夜は意外な顔をしつつ，抱きついていた腕を放して，今度は抱き上げた。
『掠夜！？』
『今のうちに，今日は外泊だって伝えとけ。』
あまりに横暴な態度ではあるが，それを止める手立てはなかった。

BLACK

侑は都の事件があってから数日後，ウィーンへと飛び立った。
その彼からは，2週間に1度くらいのペースでメールが仲間に届けられている。もちろん内容は，黒い力について。日本よりも音楽教育が進んでいるだけあって，黒い力の予備軍と思われる人は多数いるそうだ。だが，その人たちは純粋に音楽を求めているから，発展しなさそうだとも。
だからといって，侑は遊んでいるわけではない。実力が勝負の世界だ。世界的に有名な掠夜や醒，葵のようになるためには，まだまだ技術を身につけないといけない。
それが黒い力の増幅にも繋がる。

葵は2度と来たくはないと思っていたが，都のことがあったので，再び綾子の病室を訪れた。考えてみれば，近所の記憶を作為したけれど，肝心の彼女の記憶はまったく触れなかった。掠夜が振るった力で終わりにしていたのだ。それが盲点だった。綾子が忘れていていれば，刺されることはなかった。
だが，今言っても詮のないことである。
葵はチェロを奏で，自分たちと関わったことだけでなく，あらゆる記憶を吸い取っていった。抜かりないように。
そういう用心深さを持ちつつも，力を使うことはやめなかった。
吸い取ったときのあの快感は，止められない。もちろん，吸い取ったものの魅力も，見ずにはいられない。

玲は相変わらずで，たまに葵と飲みに行き，醒にお金をもらって楽しんでいた。おじ様受けも良いままだが，自分と同年代の寄り添える人をきちんと掴まえていた。もちろん，黒い力は秘密だが，
また，仕事上は問題ないのだが，再び師に付いて音楽を学び始め

た。落とした女性の記憶を変えたはずが，都には事の真相がばれていた。そのことが，都に通用しなかったことが，相当悔しかったのだ。

ヴァイオリンの腕もどんどん上達し，それに比例していくように力も増幅していった。前と同じように，弾いているときは目を背けたくなるほどの冷酷さがあるが，それはキレの良さでもあった。

それを感じて満足していた。

醒は変わらずコンサートの日々を過ごしていた。たまに母校に呼ばれて特別講師として教えてもいたが，やはりコンサートホールで歌っている方が多かった。その場所は多岐に渡り，年に半分は海外で過ごしている。残り半分は日本で過ごし，ごくたまに玻紅璃の伴奏で歌うこともあった。

年齢を重ねるごとに声にも色が重なり，元々有名ではあったが，確実に声楽家としての地位を確立していった。

もちろん，力を使うことに厭うことはない。良さそうな獲物を引っ掛け，頂くものだけ頂いて去る。痕跡などは一切残さず，ただそこには鮮やかな狩りをしたという，醒の記憶だけしか残らない。

手際は以前よりもスマートだ。

玻紅璃は仕事をしつつ，たまに病院やコミュニティーセンターなどで伴奏や演奏を行っていた。

掠夜に教わっていることもあり，また勘が鋭いこともあり，黒い力は弱まることを知らずに強くなっていった。もちろん，隠すことも上手くなっている。見た目と裏切るこの黒い力に，玻紅璃は自信を持って操っていた。

掠夜との関係も変わらずに続いていた。だが，その状態でも玻紅璃はとある男性と結婚に踏み切っていた。もちろん旦那には，力も掠夜のことも秘密である。

それが色を重ね，力の増幅にも繋がっていた。勘の鋭さと黒い力

で狩るときのあの高揚感は，何度味わってもいいものであった。
今は自分の子どもに力が遺伝するのか，興味津々である。

掠夜は相変わらず天才的な指揮を披露していた。指揮者としては若いが，評価は上がる一方である。メディアに取り上げられることも多く，海外公演も増え，醒と同じように年の半分は海外にいた。
黒い力は場所を問わず使い，跡を濁さずにいる。そのやり方は，蠱惑たっぷりで抗えない。誰もが掠夜に陥落していた。
その完璧さが掠夜である。
コンサートだけではなく，獲物を弄んで力を増やしていった。
また，玻紅璃の結婚には心底驚いていたが…驚いた様子は表に出さないが…この距離で満足していた。
仲間であることは変わりないのだ。

今まで邪魔する人がいても，語らうときが減っても，仲間は途切れなかった。むしろ集まる一方で，毎回獲物の話が楽しくてしょうがない。
もちろん黒い力が芽生えてきそうな人のチェックも怠らない。情報交換もし，良ければ引き入れる。
だが，残念ながら…幸運ながら?…仲間になれそうな人もいなく，強い力を持った人もいなかった。
自分たちは急に芽生えたこの力に対して，優越感に浸っていた。
一般常識から照らし合わせれば，最も忌むべきものなのだが，この仲間の間には爽やかさしかない。そのギャップを面白く思いつつ，使い続ける。自分を保つためにも，楽しみを得るためにも。

『次は誰にしよう?』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8623c/

Takt

2011年10月4日06時56分発行